# 地域はみんなで創る

## 地域はインキュベータ

プロローグ　ある朝のこと *(1)*
第 1 章　友人たちとの話し合い *(5)*
第 2 章　先進地へ *(15)*
第 3 章　とにかく実践 *(24)*
第 4 章　専門家たちとの出会い *(32)*
第 5 章　大フェスティバルへの展開 *(41)*
第 6 章　持続可能な地域が見えてきた－地域がインキュベータに *(57)*
第 7 章　これから *(72)*
エピローグ　ここからがスタート *(86)*



村田　武一郎

## プロローグ　ある朝のこと

金澤は、10 年前のある朝のことを、なぜか突然、思い出した。あの日も、桜の開花が始まった 3 月下旬の朝で、カーテンの隙間から差し込む春の日差しが眩しくて目が覚めた。

この 10 年、たくさんの方々から教えていただき、また協力をいただいたおかげで、今は、衰退の方向に向かっていた地域の活力が蘇りつつあるという実感をもつことができるようになった。10 年前は、活気がなかった。すべてが停滞していたように思う。

ここちよい春の朝である。家族が朝食をとりながら団らんしている声が聞こえるが、しばし、布団の中で、この 10 年間をふり返ってみるのも悪くない。

その日は、休日にも関わらず、いつもと同じ時間に目が覚めてしまった。カーテンの隙間から春の陽光が入り込んでいる。ほんのひと月前と比べて、何と力強い光であろうか。良い天気のようだ。

家の裏の小高い山の裾から「ホーホッチョコイ」と、鳥の声が聞こえる。ウグイスだろう。ウグイスが「ホーホケキョ」と鳴くのは、もう少し季節が進んでからである。

このあたりは、大都市圏内にあると言っても、大都市圏の縁辺部にあたり、自然環境がまだ残っており、四季を通じていろいろな鳥の声が聞こえる。今年もツバメが来てくれたことを、昨日、息子から聞いたばかりである。中学 2 年生の息子は、生物クラブに入っていて、鳥の観察を続けている。

春のこの時期は、気温変動が激しく、春の陽光はあるものの、気温は、昨日の朝の最低気温 8 度よりかなり低そうで、布団から出る気がしない。しばらく、うたた寝を楽しむことにしたが、息子がツバメを見たことの報告とともに言っていた「ツバメの数が減ってきている」ことが気になった。

最近は、軒先にツバメが巣をつくると、それを壊して、ツバメが寄りつかないようにする家もあるそうだ。それだけではなく、ツバメが生活する環境が徐々に悪くなってきているのだろうか。

ツバメの生活環境はどんなふうに悪くなってきているのだろうかと考え始めたとたんに、地域の自然環境のことが気になった。四季を通じていろいろな鳥の声が聞こえると、漠然と思っていたが、子どもの頃と比べると、見える鳥の姿が減っているようにも思える。変化は徐々に起きていて、気づいた時には、取り返しがつかない事態に陥っていることはないのであろうか。

金澤は、思考がこのようになってくると、連鎖的にマイナス状況を考えてしまう悪い癖がある。このような思考から抜け出すには、起きることだ。

家族は、既に朝食を済ませている。息子は、野鳥観察に出かけたそうである。小学 6 年生の娘も、バドミントンの朝練に行ってしまっている。親父は、荒おこしを終えている田んぼの土を細かく砕く作業に出かけている。母親と妻が、食後のコーヒーを楽しんでいた。

娘にせがまれて飼うことになった犬は、ころころとした容姿からコロと名づけられた。雑種の小型犬である。居間のソファがお気に入りで、娘がいない時はいつも、無防備にも仰向けに寝ている。こいつは、俺が起きてきても挨拶もしない。この集団の中で俺は気にかける必要がない存在なのだろうか。散歩に連れて行ったこともないので仕方ないかとも思う。洗濯機が仕事をしてくれている。

親父は、1ha の田んぼと 30a の畑で作物を作っている。カキ畑も 1ha 近くある。親父は、72 歳である。よく働く人で、とても丁寧に作物を育てている。

荒おこし後の田んぼは、3 月も下旬になると雑草が生えてくることから、雑草を埋め込み、土を乾燥させる作業を田植えまでに 3 回ほど行い、雑草が生えてこない状態をつくることが必要なのである。農薬はできるだけ使わない。

親父が祖父の田畑を継いで 5 年ほど経った頃、第 2 次世界大戦中にドイツで開発された、化学兵器であったとも言われる、パラチオンという農薬が使われだした。米の害虫を退治する強力な殺虫剤

である。確かに米は害虫から守られ反収は増えたが、あっという間にホタルが見られなくなった。トンボや小川の小魚もいなくなった。数年後には、体調を崩す農業者が続出した。自然との調和を本分とする農業とは相容れない農薬であった。それ以降、親父は、できるだけ農薬を使わない農業を行っている。

洗濯機の音を聞きながら、歯磨きを始めると、また、地域の環境のことが気になった。自然環境の変化だけではなく、社会環境のことも気になった。金澤が子どもの頃と何が違うのであろうか。もちろん、人口構成は大きく変わっている。

近所は、お年寄りばかりになり、地域に残る若者は世代比較では少数派になってしまった。かつては、小学校の教室に溢れんばかりの子どもたちがいて、同学年の人数が 120 人を超えていた。ところが今、娘の学年は 30 人である。8 校ある町の小学校全体でも児童数の合計が 1,500 人を少し超える程度である。小学校の統廃合が行政課題となっているらしい。我々が何もせずに、このまま齢を重ねていくと、この地域はどうなるのであろうか。

金澤が子どもの頃、誰も地域の将来への危惧を抱いてはいなかったように思える。集落の人々はすべて顔見知りで、会えばあいさつすることがあたりまえであった。子どもたちは外で遊び、大人たちは、子どもたちが危ない場所へ近づかないように、それとなく見守っていた。老人は尊重され、老人の田んぼ作業はみんなで手伝った。若い農業者は、老人に、米作り、野菜づくりをいろいろと教わった。世代を超えて智慧が脈々と伝わり、地域に蓄積され、作物の質を高めてきたのだと思う。しかし、今は、高齢農家が耕作放棄するケースが増えていると聞く。これで良いのだろうか。

歯磨きを終え、顔を洗い、食卓についたとたんに電話が鳴った。「能美さんから」と母親が言う。能美は、中学時代からの友人である。この 20 年ほどは、地域の祭りの時にしか会っていなかった。仕事も違い、共通の話題がないと思っていたが、不思議なことに、「この町の将来のことを相談したい」と言う。以心伝心とはこのことかと思った。

朝からなぜか地域のいろいろな環境の変化が気になっていた金澤は、渡りに船とばかりに、能美の話に応じた。そして、今も同じ町に住む、中学時代から仲が良かった石川、河北とも話をしてみたくなり、久しぶりに 4 人で集まることとした。

金澤は、大阪にある建設会社の総務部に勤めるサラリーマンである。大学時代は、神戸で下宿生活をしたが、就職と同時に実家へ戻ってきた。大学は経営学部で、建設に興味があったわけではない。就職試験にたまたま通ったというだけである。通勤には 90 分ほどかかっている。

金澤が勤めている会社では、団塊の世代の先輩たちが定年に達し始めた 2007 年頃から、会社のラインが一気に若返った。団塊の世代の方々が入社されて後、建設不況が長引き、10 年間ほど新卒採用がなかったので、団塊の世代の方々が退かれたラインでは若手の役職が引き上げられた。特別な能力もないと思っていた自分が、それなりの役職に就かせてもらっているのは、そのおかげであろう。なお、団塊の世代の方々は、長年にわたって会社の屋台骨を支えてこられ、技術・ノウハウもすばらしいものを持っておられ、定年後も専門職的な立場で活躍し続けてくださっている。

金澤は、定年後は実家の農業を継ぐつもりであるが、今はまだ会社の仕事に明け暮れている。通勤時間 90 分は、地域へ目を向ける余裕を削いでいると思う。家には寝るだけのために帰っていると言っても過言ではない。地域のことには何の関わりも持ってこなかった。
親父も、忙しいのはわかっているという態で、農作業を手伝えとか、農地を継げというような話はしたことがない。休日も関係なく田んぼ作業へ言っている親父に申し訳なく思っているが……。

金澤が住む地域は、いわゆる近郊農業地帯で、畑作物を農協を通じて大阪の市場へ出荷する農

家が多い。ホウレンソウ、シュンギク、ネギ、コマツナなどの軟弱野菜と言われる野菜である。このような野菜は、収穫後は急激に品質が落ち、保存性が悪いため、消費地の近郊で作られている、近郊農業の典型的作物である。最近は、ナス、ホウレンソウ、コマツナの出荷量が多いらしい。

かつて、この地域は、新しい品種を次々に開発して、市場で高い評価を得ていたが、この 10 年ほどはヒット作物を生み出せていない。金澤が子どもの頃、サヤエンドウが有名であったが、隣りの和歌山県でこの栽培が始まると、中心的産地はみごとにそちらへ持っていかれた。新しいことにすぐに飛びつくが、諦めも早い県民性なのだろうか。和歌山県では、サヤエンドウ御殿がいくつも建ったらしい。金澤の父もサヤエンドウで儲けたことがあったが、今は畑作を縮小し、ナスと黒大豆だけにしている。

黒大豆については、少し言っておきたいことがある。このあたりでは、かつて、黒大豆が作られていたが、これも、兵庫県の丹波の黒大豆が有名になると、廃れてしまった。しかし、金澤の父は、黒大豆の復活に熱意を注ぎ、友人と一緒に、産地として復活させた。今では、中京市場で、丹波産の黒大豆を席捲するほどになった。

そう言えば、親父の妹も、アワの復活に情熱を注いでいる。この地域、と言っても叔母が住むのは、もっと山あいにある町であるが、昔からムコダマシというアワが栽培されていた。このアワの実は、米と同じ白色で、これで餅を作ると、色も触感も、もち米で作った餅と変わらず、婚礼の時に婿が、もち米の餅であると思った、つまり騙されたことから、ムコダマシと名づけられたそうである。

アワづくりには、膨大な手間ひまがかかる。草丈が短いうちに雑草を排除しておかなければならない。そんな作業に汗を流す人はもういない。アワ餅も食べられることが少なくなり、アワが作られなくなってしまった。

そのムコダマシを、金澤の叔母が作っているのである。近隣の町にある農産物加工販売の会社が買い取って、アワ餅ではなく、アワ粉クッキーとして販売している。無農薬・無添加の、幼児にも食べられるクッキーである。県立博物館の売店などで売ってもらっており、東京から観光に来られた方が買ってくれるそうである。

金澤は、なぜか地域のことが気になりだし、能美からの「この町の将来のことを相談したい」との電話を受けて、中学時代からの友人たちと集まることが決まってから、帰宅の電車の中でも、地域のことにいろいろと思いをめぐらせるようになった。

専業農家は数えるほどになってしまった。近郊農業の野菜栽培は重労働である。施設園芸では、それなりの収入を得ているらしいが、昔からの露地栽培では収入があまり見込めない。米作では、よほどの広さの田んぼを持たないと自立はできない。金澤たちの世代は、サラリーマンばかりである。このあたりから 90 分ほどかかるが、大阪へ勤めに行ける。

かつては、イチゴ栽培が盛んであった。イチゴ農家は、一時期、大ヒットした品種によって潤ったが、今は、関東の内陸県にその座を奪われ、主にクリスマスケーキ用のイチゴを作っているそうだ。クリスマスケーキ用のイチゴは、比較的固くて日持ちするようなものでなければならないと聞いたことがある。そうすると、そのまま食べるイチゴとしては、他産地のものに負けてしまうのだろうか。県における新品種開発が早く進まないものか。

木材加工業も多かった。様々な生活用容器、酒樽なども、この町で作られていたが、容器を作る加工所は、プラスチック容器に負けて、次々と廃業していき、数軒が残るのみである。割り箸を作っているところが何軒か残っている。外食産業がこれだけ増えているから、割り箸の需要は多いはずなのに、安い外国産に押されて、割り箸づくりも厳しいのであろう。

一方、この辺り一帯は、江戸時代からの和漢薬材料の産地で、かつては、薬種商が多かったそうである。薬種商から、大阪へ出て製薬会社を興した人が何人か出ている。そのうちの 1 軒の薬種商

の大きな屋敷が、資料館として公開されている。

そして、この町は、和漢薬材料だけではなく、県内の農林産品の集散地で、ほかの地域から買いつけに来る人が多かったそうである。商店が数百軒も立ち並ぶ通りがあり、賑わっていたらしい。旅館も 3 軒あったそうであるが、今は 1 軒のみとなっている。

商店が立ち並んでいたその通りは、誰も訪れない、車だけが通り過ぎる道路と言っても過言ではない状況になってしまった。伝統的建造物群保存地区に指定され、一時期は観光客が来てくれたが、今は、観光客の姿もあまり見かけない。

金澤の家は、その通りから 3km ほど離れている、のどかな田園地帯で、極端な栄枯盛衰の状況はない。しかし、子どもたちの姿を見かけることは本当に減った。子どもばかりか、人の姿も……。

## 第１章　友人たちとの話し合い

金澤は、能美、石川、河北とは、中学校のサッカー部で、一緒に泥まみれの練習に打ち込んだ仲間である。県大会ではベスト 4 まで進んだが、4 人とも、どこの強豪校からも誘いがなく、公立高校の普通科へ進学した。2 人づつ別の高校であったが、4 人ともサッカーを続けた。

能美は、4 人の中ではサッカーが最もうまかったが、高校まででサッカーをやめ、関東にある大学の農学部へ進んだ。卒業後は種苗会社に勤めていたが、10 年前から実家の農業を継いでいる。意欲的な農業者で、高齢農家の農地も預かって、米 3ha、野菜の施設園芸 40a、柿 1ha の農業経営を行っている。農業粗収入は2,000 万円に近いが、農機具代、施設代、肥料代等々を差し引くと、所得は、その 45％程度のようだ。

石川は、気くばりの天才で、中学時代は、サッカー部のキャプテンであった。高校でもキャプテンだった。京都にある大学へは遠距離通学で、それでもサッカーを続けたが、今は、京都に本社を置く医療機器会社の営業課長である。出張が多く、相当に忙しく、家へは寝に帰るだけのようである。家は、父親が公務員、母親が教師であったため、祖父が亡くなると、すぐに農地を手放した。勤め人と農業の両立は難しかったのかもしれない。

河北は、最も勉強ができた。京都にある大学の経済学部へ、卒業後は県内の銀行に勤め、今は支店長の職にある。河北も、大学時代は遠距離通学であった。家は農家であるが、ここも、親が勤め人であったせいか、農地の大半を既に手放している。

中学のサッカー部時代、能美はフォワード、石川はミッドフィルダー、河北はセンターバックで、金澤はゴールキーパーであった。金澤は、ゴールキーパーとしては身長がそれほど高くなかったが、垂直とび 70cm 超のバネが自慢であった。高校でのサッカーは、身長の問題から、サブに甘んじた。

4 人は、同じポジションではなかったからか、ライバル意識のようなものは全くなく、勝利を目指して団結した仲間である。

3 人とも、忙しい身ではあるが、4 月初めの休日の夕刻から、金澤の家へ来てくれた。

コロが尻尾を振って 3 人のところへ擦り寄っていく。こいつは、俺には挨拶しないのに、見知らぬ客には挨拶するのか。コロコロとかわいかったのに、最近はドテッとしているので、「名前をドテに変えたらどうやろ」と、冗談まじりに娘に言って、いわゆるドンビキされてしまったのが、つい先日のことである。年頃の娘と父親の会話がなくなっていくのは、こんなことがきっかけであるのかもしれないという危惧を抱いた。

かつては、祝いごとや法事などで親戚や近所の人が集まり、酒食でもてなすことはよくあったが、近年はそういう付きあいはなくなっている。母親も妻も、久しぶりのおもてなしにテンションが上がりっぱなしで料理を作ってくれている。

このあたりの 4 月初旬は、フキノトウ、ツクシ、セリ、ミツバ、タラノメ、コゴミなどの山野草が豊富にある。天ぷらにすると美味しい。家の裏の山裾や近くの川べりで採ってきたものに加え、3 年前に開設された、25 ㎡ほどの広さの農産物直売所へ買いに行って揃えてくれている。

この農産物直売所は、当初は地域産品だけを取り扱っていたが、今年から、近隣県の産品も仕入れるようになり、品揃えは増え、来店者が増えているそうである。それで良いのか、疑問を感じないこともないが。

能美は、作物づくりのみならず、品種改良にも熱心に取り組んでいる。能美が品種改良の、そして人生の師と慕っている S 氏が、隣町に住んでおられる。1,000ha もの山林をもつ林業家であり、野菜の品種改良では先駆的な方で、今も 100 種以上の原種を保存栽培されている。

新品種は、交配してつくりだすのであるが、時として、その新品種が全く使いものにならないような

変異を起こすことがあり、その時には、原種へ戻ってやり直さなければならないとのことで、原種を保存しておくことが重要なのである。

品種改良は、一時期、遺伝子組み換えという方法が問題になっていたが、最近、ゲノム編集という手法で品種改良した作物が売り出されることとなった。それから、種子の生産は、外国で行うのがあたりまえ、例えば、ダイコンはイタリア、パセリはフランス、サニーレタスはアメリカといったように、交雑を避けるために、特定の国で特定の種子を作っていることを、S 氏から聞いた。日本の食料自給率が危機的に低いことは知っていたが、種子生産まで外国に依存しているとは……。

S 氏は、地域の伝統料理の継承にも熱心な方である。S 氏は、蔵を改修した工房で、季節ごとの伝統料理を再現して、みんなに振るまってくださる。ある大学のゼミでは、学生が後輩に引き継ぎながら 3 年間ここへ通い、伝統料理のレシピ本を作成した。その本の中に、次の記述がある。

都市部においては、便利な調理済食品の提供、季節に関係なく一年中提供される野菜などにより食生活が変わってしまっており、地域でとれる食材を使った、伝統的な調理法による料理は、いつの間にか、めったに食べられない“ぜいたくな”ものになっている。

最近は、季節のものや身土不二（しんどふに。身体と土は切り離せない関係をもつという意味であり、身近な所でとれるものを食べ、生活するのが良いとする考え方）は望むべくもない。

こうしたなかでも、この地域には、すばらしい人物と、その人が受け継がれた伝統が息づいている。また、豊富な山野草がある。S 氏は、季節毎の食材にこだわり、学生を山や野へ連れて行き、食材を探すところから指導される。S 氏は、料理を出される時に、「いただいてください」とおっしゃる。決して、「召しあがってください」や「おあがりください」ではない。「命をいただいてください」なのである。

そんな S 氏の工房で伝統料理をいただく機会があった時、S 氏から凄い話を聞いたことがある。1950 年代後半の日本は、一定の戦後復興を成しとげ、次への発展を目指す段階にあった。1960 年、池田内閣が、翌年からの 10 年間で名目国民所得（国民総生産）を倍増させる計画を発表し、その後の日本経済は計画以上の成長を成し遂げていった時代があった。

その頃、S 氏宅には、たくさんの林業労働者がいた。その人たちに、住まいと食事は提供するが、給料は出す必要がなかったとのことである。半年間働いた後、床柱用の材木を 1 本持ち帰らせたそうである。大学卒業者の初任給が 5,000 円そこそこの頃、その材木は、都会で 10 万円以上で売れたらしい。この時代、林業は儲かる産業であった。S 氏は、大学卒業後、アメリカとイギリスを漫遊し、帰ってきてからは、横浜で、1 年間に 3,000 万円のも金を遊びに使ったらしい。

顔を会わせて、まず口を開いたのは、農家の能美であった。能美は、息せききったように次のことを話した。ほかの 3 人と比べ、地域に生活の基盤を置いているだけに、地域への想いも強い。

「まず、地域の社会の問題や。人と人のつながりがなくなってきとる。近所で助け合うことがなくなってきとる。高齢の方々への助けはあたりまえやったが、それもせんようになっとる。病院へ行くんも、買物も、墓掃除まで困っとられる。子どもの数がえらい減ってきて、小学校を統廃合する言うとる。会っても挨拶せん子どもが増えた」

「耕作放棄地が増えとるちゅう問題がある。高齢農家の耕作放棄や。放置しとくと荒れ地になって再生できんようになる。それだけやのうて、周辺の耕地に迷惑をかけとる。山裾の棚田んとこでは、工作放棄地へ竹が侵入し、さらに隣の畑にまで竹が侵入してきとる」

「山が荒れとる。間伐してへん山は、林床へ光が届かんから、草が生えへん。林床に草の根がないんやから、少しの雨でも土が流れ出しとる。川へ流れだして川底に溜まっとる。川に大量の草が生えて、三面張りの川が自然の川みたいになっとるんはえぇとして、断面積が小そうなって流量が減るんやから、大雨が降ったら大洪水や。山に食いもんがないから、シカやイノシシが降りてきて、人間が作ったもんを食い荒らしとる。ほかにも、山に間伐材がいっぱい残っとる。林地残材ちゅうやつや。大雨が降ったら、それが流れ出して、たいへんなことになる。エネルギー問題を解決せなあかん、バイオ

マス燃料やと言うとる時に、山にあるエネルギーを放置しとる」
「“平成の大合併”で、2006年に、このあたりの4つの町と村が合併した。合併の時、元の役場に地域振興に関する部門を残すちゅう約束やったんが、蓋を開けたら、残ったんは新しい取り組みをする部門やのうて、住民票を出すとか、福祉の相談にのるとかいう部門だけや。合併前は、役場へ行けば、これからどうするんやちゅう将来企画の話ができたんやけど、今は無理や。もとの町は、それなりに新しいことにいろいろ取り組んどったんやが……。合併せん方が良かった」
能美は、いつも話の糸口を提供してくれる貴重な存在であるが、その日の話は、金澤には、問題点を挙げているばかりのように聞こえた。確かに彼は、昔から、問題点をすぐに見つけていた。「それでどうする」がないのが能美の問題点ではあるが、地域の実情に関する話はよくわかった。
次いで河北が口を開いた。能美が出した問題点に対して、「この辺りは優良農地指定されている田畑が多く、指定されている田畑は……という理由で、簡単には……できない」「林地残材は……傾斜が急な地形が多いことから……できない」などと、できない理由を理路整然と説明した。
こいつは頭が良いだけに、また、銀行員として地域のことに関わってきただけに、説明した内容は理解できるものである。しかし、この地域の活力をどのように取り戻すのかにはつながらないと、金澤には思えた。
能美は、「そんなことはわかっとる。何とかしなけりゃならんのや」と不快感を露わにした。
河北も、ムキになって、「問題の本質を突き止めておくことが先や！」と言い放った。

中学生の頃から、この2人は、いつもこの調子である。つかみ合いのケンカとなったこともあったが、いまでも友だちのままでいるのは、引きあうところがあるからで、じゃれ合っているのでもあろう。そして、決まってここへ割って入るのが石川である。中学時代からそうであった。
フォワードの能美は、いつも、ゴールへ向かって突進するタイプであり、能美の突進に、後からの押し上げのタイミングが合わないことが1試合に何度かある。能美が「後が早くついてこい」と言い、河北が「勝手に前へ行くな」と言う。こうして、小さなトラブルが生じる。攻撃と守備のバランスをとるミッドフィルダーの石川は、2人をたしなめるという構図である。
こんな時、金澤はいつも、この小さな戦いから距離を置いている。ゴールキーパーは、味方同士のピッチ上の言い合いに気を奪われるより、後方から冷静にフォーメーション全体を見て、ディフェンスに次の指示を出さなければならない。

石川が、2人をたしなめたうえで、話題を出した。「先日、兵庫県のある町へ行った時に、巻き寿しを求めて行列ができていた。うちの地域でも、何か名物をつくって、ほかの地域からたくさんの人に来てもらえるようにできないだろうか」
このような状況の時、石川は、いつも、別のことを言い出す。能美と河北の小さなトラブルから話を逸らす意味もあるのだろうが、その話は、今後、何かの参考にしても良いが、うちの地域で具体化するには、あまりにも脈絡に欠ける。

金澤はと言えば、総務部に所属しているが、建設会社がお施主様へ、建物の使い道を提案していることぐらいは知っている。同期入社の友人からの聞きかじりではあるが、どこに建てたビルにはどんなテナントが入り、どのような人たちが来てくれているのかは、おおよそ知っていた。大都市での人の動きは把握しているつもりだが、自分たちの地域で何ができるのか、ここへ誰が来てくれるのか、何も浮かんではこなかった。
この日に能美や河北から出された話題から、金澤は、自分のことを反省することとなった。まずは、仕事の忙しさにかまけて、地域に目を向けたことがなかったことである。行政はいつの間にか金なし状態になっているらしい。行政の役割、議会の役割は理解していなかった。最近、町長と議長が対

立していることも知らなかった。幸いにもと言えば問題があるが、この地域では、子どもの数が減っていることの裏返しとして、保育園へ入れない子どもがいないとのことである。ほかにも、初めて耳にする地域の情報がたくさんあった。

金澤の家では、いわゆる地方紙と言われる新聞はとっていない。全国紙では、この県内のことが掲載される紙面、それもたった1～2面の紙面があるのは、週に数回である。全国紙しかとっていない者には、地域内の動向はよくわからない。全国紙の全国向け紙面に載るこの県の情報は、発掘された歴史遺産に関すること、行政の不祥事のことぐらいである。

そう言えば、数年前、ある病院で高次医療機関への搬送が必要と判断された妊婦が、19もの病院に受入れを断られ、5時間近くたってようやく大阪の高次医療機関へ到着し、脳内出血と診断され、緊急開頭手術と帝王切開を実施し、男児を出産したが、妊婦は約1週間後に死亡した事件が、全国紙に大々的に報じられたことがあった。救急医療体制の不備が問題の本質であった。

この県の地方紙は発行部数が少ない、紙面の枚数が少ない。売れないから、赤字を出さないために紙面数を減らさざるを得ないのか、紙面の枚数が少なく情報が充実していないから読んでもらえないのか、どちらなのだろうか、いちど誰かに聞いてみようと思うが、たぶん、両方の負の相乗効果によるものなのであろう。

会社の同僚に聞いたことであるが、兵庫県下では、一時、全国紙に押されて、県西部でしかシェアをとれていなかった地方紙が、今では県内各地域でトップシェアとのことである。各地域の住民の活動、地域産業の動向に関する情報が、毎日、4～6頁分も掲載されているそうだ。また、この新聞は、環境問題に関しては、全国紙をしのぐ報道を行っているらしい。

この新聞のように、毎日、紙面1頁あたり5件前後の記事が5頁あれば、年間に9,000件近くにもなる活動紹介が行われている計算になる。人口規模（兵庫県の約4分の1）を考慮しても、年間2,000件ぐらいの活動紹介が欲しいところであるが、全国紙の県版では、その半数ぐらいの活動紹介に止まっている。

地域活動をていねいに紹介する新聞があれば、地域のなかでの人々の情報交流、つながりも増えるはずだし、県下の南北あるいは東西の人のつながりも増えるはずなのにと思う。この辺りで新産業が生まれたという情報には、全国紙しか見ていないからか、接したことがない。河北なら、このあたりを知っているのだろうか。

母親と妻が準備してくれた山野草の天ぷら、ひね鳥の唐揚げなどをつまみに、辛口の地酒を飲みだしてからは、肝心の話はふっとんでしまった。4人とも酒は飲める方である。

このあたりの酒は、水が良いから、まろやかでうまい。県西部の丘陵地にある酒蔵の酒が特にうまいと思う。この酒蔵では、2000年頃だったと思うが、20年間熟成した焼酎があった。簡単には手に入らないものであったらしいが、親父の知人が何かの時に持ってきてくださり、お相伴に預かった。すばらしくまろやかで、芳醇な焼酎であった。“まろやか”、“芳醇”くらいしか酒を誉める言葉を知らないことが残念ではある。今はもう、その焼酎は蔵に残っていないそうである。

この県は、清酒発祥の地と言っており、酒蔵が競ってうまい酒を出しており、酒のレベルは高いように思えるが、兵庫県の伊丹市が、自分のところこそ清酒発祥の地であると名乗りを挙げ、少しばかりのバトルが始まったそうである。日本酒の需要が減っている中であるが、ほかの地域とも競って、うまい酒が生まれるのであれば、日本酒への評価が高まるだろうから、このバトルは、どちらに軍配が挙がっても、あるいは決着がつかなくても良いと思える。

親父の子どもの頃は、祭りの時に、子どもにも一升瓶の酒を飲ませることがあたりまえにあったらしい。親父は、いつも、しばらくはしゃぎまわって、コテンと倒れていたそうである。急性アルコール中毒で、今なら大騒ぎになる話だが、大人たちは、「しばらく寝てりゃそのうち起きてくる」と気にも止めなっ

たそうである。2003 年頃であっただろうか。一気飲みによる急性アルコール中毒での大学生の死亡事故が多発し、アルコールとの付きあい方が変わっていくのであるが、金澤たちの学生時代は、まだ、大量に飲めることがうれしかった時代であった。

金澤たち 4 人は、能美と石川が出してくれた話で盛り上がった。

能美は、畑の肥料として使うために、畜産農家へ牛糞を貰いに行っている。牛糞を貰いに行っているとは言っても、牛糞と杉チップを混ぜたものを、畜産農家で寝かせておいてもらい、発酵が進み、水分が抜けた頃に貰いに行くのであるから、運搬用の軽トラックの荷台がそんなに汚れることもない。ただし、溜められている牛糞を杉チップと混ぜる作業は、自分で行わなければならない。

「ある時、まだ柔らかい牛のうんこに足を突っ込んで抜けなくなった。長靴から足は抜けるが、長靴を履いた状態では抜けん。長靴を脱いで足をうんこに浸けるんはいややったからジタバタしているうちに、倒れてしもうた。そうすると、不思議なことに、牛がそばへ寄ってくるんや、心配そうな顔してな」

「牛の心配そうな顔ちゅうのは、どんな顔や」。さぁ突っ込みが入った。能美の災難はすっ飛ばして、河北が聞く。いつもこのパターンの展開になると、小競り合いが起きるのだが、酒を飲んでいると、そうはならないようだ。

「目に涙を溜めておった」

「ほんまかいな」

「うそやない。牛が涙を流すんは事実や。涙を流しながら、“モ～ゆるして”と言うとる。牛もかわいいもんや」

「ちょっとまて、牛の目に涙があったことはえぇとして、“モ～ゆるして”は、言うわけないやろ」

「うん。すまん。ちょっと、話を盛り過ぎた」

石川が話を戻す。「うんこまみれのお前は、それからどうなったんや」

「どうもこうもない。とにかく抜け出して、水道を借りて、道端の側溝までホースを伸ばしてもろうて、服の上から水をかけたんやが、簡単には汚れが落ちへん。服の中までうんこが浸み込んどる。しゃあないから素っ裸になって水を浴びた」

みな爆笑である。人の不幸は蜜の味とは言うが、この場合、ケガもなかったのだから、爽やかな蜜の味と言おうか、十分に笑い合った。ところが、話はここで終わりではなかった。

「ちょうど、中学生の下校時間でな。自転車の女の子が、裸の俺を見て、急いで走り去って行くねん。そっからどうなったと思う？　おい、河北」。いつも小競り合いを起こす相手の河北を指名した。

「う～ん。後日、中学校で話題になって、お前の息子が困ったんか」

「そっちでなかって、まだ良かったんかもしれんな。警察が来たんや。あの近くの交番の巡査や。俺が牛舎の辺りの者やないから、不審者やと通報されたんや。そんで、尋問や」。ここで、また爆笑である。能美は、いつも失敗談を楽しそうに話してくれる。

「そりゃ、公衆の面前で裸になったら犯罪や。しゃぁないな」

「公衆の面前やないわ。たまたま、その子が通りかかっただけや」

「ほんで、巡査が来るまで、裸やったんか。ちょっと時間があったやろ」

「10 分かそこらか、ようわからんが、牛舎の高橋さんが着るもん探しに行ってくれとる間や。その間ずっと、身体と作業服を水で洗うとった」

「ほんで、尋問か」

「事情を話したら、巡査も、臭くてたまらんかったんやろ、すぐに帰っていったが、帰り際に、その若い巡査が、シモを出すのは風呂かトイレにしておいてくださいと言いやがった。余計なことぬかすな、あんたにも、うんこつけたろか、と言うたわ」。また、爆笑である。

「巡査も粋なこと言うやないか」

「何が粋なことや。うちへ帰っても、女房が臭い言うて逃げてくし、犬まで逃げていきやがる。えらい

災難やった。洗濯してもらおう思うて、ビニール袋に入れて持って帰った作業服は、そのまま捨てられてしもうた」
「そりゃおもろい経験やな」
「俺は、牛のうんこに浸かったらあかんという教訓を得た。お前らも浸かるんは風呂だけにしとけや」という一言が能美のシメの言葉である。めげない、楽しい奴である。

石川は、「俺もシモの、怖い“ハ・ナシ”するわ」。なぜか、ハとナシの間に微妙な間がある。
能美が「ちょっと待て、俺はシモの話はしとらんぞ」と言う。石川の言葉のハとナシの間に微妙な間があったことは吹っ飛んだ。
「いや、まぁ聞け」。石川が、ひと息おいて、口を開く。
「仕事で、金沢の近くの美川ちゅうとこへ行った時や。海べりの道を走っとって、海水浴場の看板が気になった。夏の終わりやけど、むちゃくちゃ暑い日の 4 時すぎや……」。そこで、ひと息入れて、間をとった。こいつには、すぐに話題に入らず、ちょっとの間をおいて、期待をもたせる悪い癖がある。
「あ、そうそう。この町には、高速道路からよう見えるとこに、おもろい看板が立っとった時期があるんや。今は、合併して美川町がなくなったから、看板もなくなったがな……」。また、間をとった。たった数秒だろうが、聞いている方は、「お前、早う、しゃべれ」となる。
「その看板には、なんと“美川けんいちの町”と書かれていた」
「歌手の美川憲一の出身地か。それとも、美川憲一が、そのあたりに大きな土地でも持っとるんか」
「いや、歌手の憲一やない。彼は、確か長野県の出身や。書かれとるのは“県一”や。県下で一番ちゅう意味や」
「何やそれ」
「何やそれやろ。自治体が自分とこを PR すんのに、何やそれや。なんでもありかと思うた」
「今の時代は、何でもありかもな。おもろいけど、おもろない。海水浴場はどうなったんや」
「そうやったな……。ところで、お前ら、太陽は海に向かって、どっちの方向に沈むと思う？」これも悪い癖である。話をいったん別の方向へもっていく。ほかの 3 人は、そんなことはいつものことと、わかっているから、誰も反応しない。
「俺ら 4 人で、神戸の須磨へ泳ぎに行ったことがあるな。太陽は、海に向かって右手に沈むんや。日本海側へ行くと、これが逆やねん」。太陽が左手へ沈むとは、思ってもみなかったが、誰も、へぇそうなのかとは言いたくなかった。
「それで、なんの話やねん」と、能美がせかす。
「その日の仕事は終わっていたし、泊まるのは近くのドライブインや。時間もあるし、海を見よう思うて、海水浴場の入口の駐車場に車を置いて水際まで行った。100m ほども奥行きがある、きれいな砂浜でな、あんなきれいな砂浜は初めてやった。海を見とるうちに泳ぎとうなって、素っ裸になって海へ入ったんや」
「そりゃ犯罪やろ」
「いや、そうでもない。周りには誰もおらん。日本海側の海は、盆を過ぎると、土用波ちゅうて、大きな波がきて危ないから、盆を過ぎたら、海水浴場は遊泳禁止になって、誰もおらん」。ここは、「へぇ」とか「ほぅ」と言うべきか、相槌を打つと、こいつはまた調子にのるからな。
「ひと泳ぎして、服を着て、帰ろうとした時、北東の方向にある松林の中から女が走ってきた。松林は北東の方角にあるんや。その女が、なぜか浴衣姿で、それが乱れていて、艶めかしかった」
「おいおい、シモの話はそっちか」。ここでも、金澤は、石川が“北東”という言葉を 2 回言ったことに違和感があったが、話は、シモの方が優先された。
「まてまて、シモの話と言うたんは、俺も裸になったというだけや。能美の話に引っ掛ける方がおもろかろう思うて言うただけや、すまん。それと、話の本筋にあんまり関係ないんやが、臨場感をもって

もらおうと思ってな」。何が臨場感や、能美の裸やお前の裸をイメージさせるな。話を早く先へ進めろ。
「それがな、女が、“助けてえ～”、“助けてえ～”と叫びながら走ってくるんや。びっくりしたけど、後から誰も追いかけて来てへんしな。ちょっとおかしい奴ちゃうか思うて、近くへ来る前に、そそくさとそこを離れたんや」
「助けを求めとんのに、ひでぇ奴やな」
「うん。そやけど、あの雰囲気は異常やった。逃げるが勝ちと思うた。車に乗って、すぐ近くのドライブインへチェックインした」
ゆっくり風呂へ入って、晩飯を食うて、次の日の仕事の準備をして、ベッドへ入ったが、夕方のことが気になって、なかなか寝つけなかったそうである。
「次の朝、遅い朝飯を食うとったら、警察が来てな」
「お前の話も、警察かい」
「そやねん。“少しお話を聞かせてもらって良いですか”と言うんや……」。また、間をとる。
「はよ、次を言えよ」
「海水浴場で、浴衣姿の若い女が死んどったそうや。俺の車が海水浴場の駐車場にあったのを見た者がおったとのことや。誰も泳ぎに来ん時期に、車が止まっとるんは不思議や思うて、車の色、形、どこの県のナンバーかを覚えとったらしい」
「そうすると、お前は容疑者か」
「そや、状況証拠ではそうなるな」
「ほんで、どうしたんや」
「警察へ連れて行かれて、いろいろ聞かれた。他府県の者が、この時期はずれの海水浴場にいること自体があやしいそうだ。俺は、医療機器会社の営業マンで病院まわりや、この辺りにおっても不思議やないやろと言うたが、簡単には認めてくれん」
「そんで、どうしたんや」
「いろいろ聞かれたんや。まぁその中味は置いとくけど……。あんたが言うことを仮に信じるとして、あんたが海水浴場で見た人かどうか確かめてくれちゅうことんなって、霊安室いうんか、そこへ連れて行かれた」
「そんなもん、見たぁないわな」
「見たないけど見た。けど、同じ人かどうか全くわからん。俺の記憶にあるんは、艶めかしい容姿だけや。警察にそんなこと言うわけにもいかんし、首を傾げとったら、警察が、何でも良いから、何か思い出すことはないんかと言うた」
「凄い話やな」
「ひとつ思い出したんや。向こうから走ってきて、“助けてえ～”と叫んどる時に、口の中がキラッと光ったんや。それを言うたら、金歯が夕日にあたって光ったんかもしれん、金歯があるか確かめようとなって、口を開けようとするねん。けど、口は簡単には開かん」
「へぇ、そんなもんなんか」
「警察の奴が、力を入れて、ガバッと開けた……。うわぁ」。石川は、少しの間をおいて、大きな声で「うわぁ」と叫んだ。3 人とも、腰をぬかしそうになった。ビビリの金澤は、後へ飛び下がった。足がテーブルにぶつかり、殆ど飲み干した一升瓶が倒れそうになったのを、石川が冷静に押さえた。
「何をわめいてんのや。びっくりするやないか」
「口の中に歯がなかった」。ちょっと間をおいて、「これが本当のハ・ナシや」
聞いていた 3 人ともキョトンとしたままであったが、また少しの間があって、河北が「なるほど、歯・なしか、ハナシやな」
台所で洗い物をしていた妻が、大声に驚いて、様子を見に来たが、その時にはもう、笑いの最中であった。怪訝な顔をしつつ、安堵して戻って行った。

全くの作り話である。嵌められた。でも、笑うしかない。こんな時の笑いを何と言うのだろうか。“くやし笑い”という言葉があれば、該当するか……と金澤は思った。石川は、こんな話をどこで仕込んでくるのだろうか。

日本海側では海に向かって左手へ太陽が沈む、北東方向に松林がある、だから、海から上がって帰ろうとする自分に向かって松林から走ってきた女の顔に西日があたって金歯が光る。くそったれ、ハ・ナシの導入部からして計算しつくされている。大声を出して驚かすところまで計算されている。

しかも、このハ・ナシは、途中はどうでもよくて、口の中が“歯なし”でありさえすれば、どんなハ・ナシでも作れるではないか。作った者の勝ちかもな。

こんな話の後で、金澤が話すことを促されたが、能美のような笑わせる話も、石川のような臨場感を持たせた作り話もない。仕方なく、ちょっと良いことをした話をした。

「この前、ある駅の改札口付近で、人を待っとった時や。東洋人らしきアベックが改札を出ようとしとった。男が、切符を改札機に入れて、なぜか隣の改札機を通ろうとしたんや。当然、無理やわな。おろおろしとった。後ろにいた女の子に注意されて、切符を入れた改札機の方へ回ったが、時すでに遅しや。こっちも通れない」

「そんな奴がおるんか、わはははは…」。能美が笑ってくれた。いつも笑いをとっている能美のようにはいかないが、笑いを入れてくれると話を進めやすい。

「うん。おったんや。女の子が自分の切符を入れて通ったんやけど、男はおろおろのままや。俺が、駅員がいる所へ行けと身振りで教えたら、2 人は駅員のところへ行ったんやが、何か様子がおかしい。近寄ると、駅員が男に“金を払ってもらわないかん”と言うとるが、言葉が通じておらんようや」

「駅員は、そんな時、金を払わすんか？」

「そのようやな。一部始終を見ていた俺が、向こうから 2 台目の改札機へ切符を入れた彼が、なぜか一番向こうの改札機を通ろうとした。それで出られなくなっただけで、切符は入れていたと駅員に言って、駅員が納得して通してくれた」

「どこの国から来とるんや。ほかの駅でも改札機を通ってきたんやろ」

「なんで隣の改札機を通ろうとしたんか、俺も不思議やったが、ちょっとええことした気分やった。アリガトゴゼマスと 2 回言うてくれた。ザイの発音がゼになっていた」

銀行員の河北は、お堅い仕事場ゆえに、格別おもしろい話はなさそうだ。時刻は、もう 10 時である。京都へ行っている石川と大阪へ勤めている金澤にとっては、朝の早い通勤のことが気になる。金澤は、「近々また集まらないか。それまでに俺が今日の話を整理しておくから」と言って、お開きにした。

次の休日、覚えているかぎりを書き出し、それを表にしてみた。すると、問題点ばかりが目立つ表になってしまった。地域は、自分が気づかないうちに疲弊してしまっていた。そのことだけは良くわかる表にはなったが、問題点に対する対応策を誰も持っていなかったことも良くわかる表になった。何らかの参考になるかもしれない事例は、石川からいくつか出ていたが、何の参考になるのかは、今はまだわからない。さぁ、これからどうする？

**2 回目の話し合い**

2 回目の話し合いを、5 月の連休中に行った。

まずは、金澤が整理した表を出して確認しあった。通常、このような表の形で話し合いの内容をまとめることはない。金澤が、大阪で、大学・会社とも同期の奴に誘われて行った研究会で、あるシンクタンクの人が使っているのを見て、覚えた方法である。ただし、この方法でまとめてみたのは、今回が初めてである。

表頭には、現状と問題点、将来発展方向、発展への具体策、参考事例という言葉を入れている。表側には、地域社会、農業、工業、商業、ほかの地域からの来訪という分野を入れた。そして金澤は、先日の話で出たこと以外にも、自分が気になった地域の状況を追加していた。

「どうやろ。俺らのこの前の話は、現状と問題点、参考事例しかなかったということや。現状と問題点は、能美と河北がたくさん出してくれた。俺が後になって気づいた分も入れとる。石川は、参考事例をいくつも言うてくれた」

「ほんまやな。真ん中がすっぽり抜けとる。将来発展方向や発展への具体策と言うても、思い浮かばんな。お前はスゴイ方法を知っとんのやな」

「いや、たまたま知った方法やけど、使うてみた」

「そうすると、この真ん中を考えろと言うことやな」

「うん。そうせんことには前へ進まんような気がしとる」

「というても、耕作放棄地をどないしたらえぇんや。農業の現状と問題点に書かれとるけど」

「耕作放棄地をどないかできたとして、それが何につながるんかも、わからん」

「俺の聞きかじりやけど、鹿児島で、黒ブタを使って、荒地化してしもうた工作放棄地を優良農地に戻しているようや」石川は、こんな話をどこで仕入れてくるのだろうか。先日のいくつかの参考事例と“ハ・ナシ”の時もそう思ったが、今度も不思議である。

「耕作放棄地へ山裾から竹が侵入したり、セイタカアワダチソウが繁茂して、あるいは、時間が経つと木が生えてきて、田んぼが荒地化するわな。簡単には田んぼに戻せんから、そんなとこを借りる人もおらん。そうなると、何百年も伝えられてきた耕地は終わりや」

「そうやな。ここらでも、そんな土地が増えとる」

「鹿児島では、黒ブタを耕作放棄地で放牧しとるそうや。ブタはイノシシの仲間で集団生活するから、柵がなくても逃げんらしい。鼻で土を掘り返して、木や草の根っこを食べてくれ、1 年もすりゃ耕作可能な土地に戻るそうや」

「そうすると、今の話は、参考事例であり、耕作放棄地問題を解決する有力な具体策のひとつちゅうことやな」

「うん。今、そういうつもりで話した」

「石川君、やるやないか」。なぜかここは、呼び捨てではなく、君づけである。

「もうひとつ、金沢市で、30a農業というもんをしとる人がおる」

「お、また金沢か。この前の作り話も金沢の近くやったな」と、河北がちゃちゃを入れたが、石川は、それにかまわず、「金沢へ出張した時、地元紙で見たんや。出張の時、午前中の時間が空くことがようあってな、そんな時、ゆっくり朝飯を食いながら、地元の新聞を見るんや」

「石川君はえらい奴やな」と、能美が冗談めかして誉める。

「いや、何が営業の時の話の糸口になるかわからんから、行った先々の情報はできるだけ知っとくようにしとる」。なるほど、仕事柄とはいえ、確かにこいつはえらい。

「年に 15 回も野菜を収穫して、売上 1,000 万円、所得 500 万円と書かれとった」

能美が悔しそうな顔をして言う。「そんなことできるんかい。俺が米 3ha、施設園芸 40a、柿 1ha で所得 900 万円やねんぞ」

「採れたもんは、サラリーマン家庭へ直売と書いとったな」

「う～ん、くそ。流通やな。自分でお客さん持っとったら強いな」

「お前はそんなことできへんのか」

「もう無理や。高齢農家から預かっとる田んぼもあるし、それを放り出すわけにもいかん。年に 15 回も収穫しよう思うたら、手間も相当なもんになるやろ」

「それが、農業をやったことない素人がやっとるらしい」

「余計にむかつくわ」。こんなふうに話が展開していくと、表の真ん中はいつまでたっても埋まりそう

もない。
「そんで石川よ。参考事例を出してくれとんのか、具体策との関係は？」
「30a 農業で生きていく道があるんなら、うちらには耕作放棄地がいくらでもあるんやから、そこへ、農業を目指す若い人に入ってもらえんかという提案や」。なるほど、それは良い提案だ。具体策がひとつ増えた。
「ほかには、何かないか」
「そう簡単に出てくりゃ、今までに何かしとる。黒ブタの放牧は、俺が誰かの工作放棄地を再生させる時に使えるかもしれん。周りの理解をもらわにゃならんが……。新規農業者を入れるとなると、俺らだけではどうにもならんぞ。役場やったり、農協の協力が必要やな」
「確かに、実行に移すとなると、簡単なもんではないな。そんでも、出されたアイデアを、できるかできへんかでその都度つぶしていくと、何もなくなるようにも思う」
「そや。今はまだ話を広げていく方が先や」と言ったものの、誰も、具体策をそうそう持っているわけでもない。

河北が、「俺は、いろんなとこから、うちの町へたくさんの人が来てくれていた姿が理想やと思うんやが」と言う。
「ほう、それは、将来発展方向にあてはまる言葉やな。金澤が書いてくれとる、“ほかの地域からの来訪”ちゅう分野やな。来てもらうためにどんな方法があるんや」
「今いろんなとこに道の駅ができて、都会からそこへ大勢行っとるらしいな」
「農産物直売所があるから、道の駅つくったら競合になるけどな」。話は行きつ戻りつである。
結局、金澤がつくった表の真ん中は大半が埋まらないまま、酒の席となった。今回も、金澤の母と妻が、この辺りで採れる季節のものを中心に酒の肴を揃えてくれていた。母も妻も、楽しそうである。
いつも家族だけの食卓ではなく、時々ほかの人が来てくれるという刺激があることが重要なのであろう。河北が言う、“ほかの地域から来てくれる”が重要なキーワードのように思えた。
次回は、表の真ん中をできるだけ埋められるような話をみんながもってくることとして、お開きとした。

## 第 2 章　先進地へ

金澤たち 4 人は、8・9 月にも話し合いをもったが、自分たちの地域がどのような姿であることが良いのか、地域の活力をどのように高めていくのかについての具体的な方策を見つけだせなかった。

というより、地域の将来の姿をイメージする必要があるとは思っていなかった。地域の活力がどうすれば生まれるのかを考えなければならないという意識もなかった。

家族に話してみても、「このままではダメである」ことは理解しているが、ではどうするのかについては、首を傾げるだけであった。ほかの 3 人の家族も同様とのことであった。

9 月の話し合いの時、能美が、「石川が言っていた兵庫県の真ん中あたりの町へ行ってみないか」と言い出した。

自分たち 4 人で話しているだけでは、話は何度も同じところを回るだけで、先へは進まない。河北も「そうだな、ここらで、頭の切り替えをするか」と応じた。

石川は、医療機器会社の営業課長という仕事柄、とにかく出張が多い。各地域の病院へ営業に行っている。兵庫県中央部のある町を通りかかった時に、何もなさそうな場所で長蛇の列に遭遇したそうである。時期は 2 月の初め、午前中で、昼飯にはまだ早い時間であった。先方との約束にはまだ時間の余裕があり、長時間運転の疲れをとる意味もあって、列ができている店の隣にある喫茶店の駐車場に車を止めた。部下が、すぐに走って行って、何の列かを聞いてきた。節分の恵方巻（巻き寿し）を求める人の列とのことであった。この時は、何の問題意識ももっておらず、並んでいる理由を確認したかっただけであったとのことである。

我が地域の将来をどうするのかという、4 人での話し合いの場ができて、たくさんの人が来ている、活力ある地域の例として話題に出してくれたそうだ。

### 巻き寿しと大阪マダム

11 月中旬のある日、休みの日を合せて、朝から能美が運転するワゴン車に乗って 4 人で出かけた。車の中ではたわいもない会話ばかりで、地域に関する話題は誰も言いださなかった。3 月から 9 月までに 4 回の話し合いを行ってきて、自分たちだけでの情報交換については、飽きていたというのが正直なところだった。

高速道路を降りて北へ向かった。のどかな田園地帯が続く。落ち着いた景観は、自分たちが住む地域より優れているように思った。道ばたに派手な看板がないから、昔ながらの景観が残されているようだ。我が県はと言うと、最初は、赤色を使った派手な看板が目立ったが、赤色の看板がたくさん立ち並ぶと、今度は黄色を使った看板が増えた。今は、歴史文化的空間へと続く道が赤色と黄色の看板で埋め尽くされている。我が県の沿道景観が壊れて行っている。

以前、京都の知人に言われたことを思い出す。「この前、君んとこへドライブに行ったが、奈良県へ入ったとたんに派手な色の看板だらけ。歴史文化都市の名折れやないの」。京都は、景観の維持に気をつかい、例えば、白地に赤文字は許すが、赤地に白文字の看板は禁止とのことであった。この指摘には、何とも反論のしようがなかった。さらに、「街路樹の剪定方法がひどすぎる」とも言われた。街路樹は生長点を切らない剪定方法で、美しい樹勢を保って伸びて欲しいものであるが……。何とかならないものか。

ここは、川に沿って走る道も、緩やかなカーブが連続し、カーブごとに川面が見えて、なかなか良いものである。川の反対側では、いくつもの民家に、実をたくさん残したままの柿の木が見られる。ここでも、柿をあまり食べなくなっているのか、それとも、高齢世帯で高いところにある実をとれないのだろうか。助手席で景観に目を奪われているうちに目的地に着いた。高速道路を降りてから 30 分ほどであった。

時刻は 11 時である。平日であり、特別なイベントもないようで、石川が言っていたような大行列はな

かった。それでも、駐車場は8割がた埋まっている。兵庫県以外のナンバーの車が多い。大阪、京都、四国からの車もある。

店へ入ってみると、大量の巻き寿し、サバの押し寿し、それに野菜、漬物などの加工品が並んでいる。奥には20席ほどのカフェスペースがある。

カフェスペースには数人の客しかおらず、次々にレジに向かう客は、巻き寿しと野菜をかごに入れている。レジでは、1万円札を出す人が多い。巻き寿しを10本以上買っている人も多い。1本540円だから1万円札での支払いになるのだなと思っていると、能美が「こんな田舎で、こんなにも客が来て、こんなにも売れるのか」と驚いている。

金澤は、店の人に声をかけようと思ったが、忙しそうにしているので、ためらった。そもそも、何を聞けば良いのか、何も考えていなかった。気おくれしてしまい、しばらく様子を見ていただけで、外へ出た。ほかの3人も出てきた。河北が「凄いな」と言う。誰も、それ以上の言葉は見つからず、しばらく立ちすくみ状態であった。

能美と金澤が、店の入口から少し離れたところに灰皿を見つけ、そちらへ移動しようとした時、石川が駐車場の一角へ歩き出した。大阪ナンバーの濃緑のセダン車の横で、乗り込もうとしていたおばちゃんに声をかけた。おばちゃんという言い方は失礼だろうか。60歳前後の派手な装いの大阪マダム3人である。石川は、見知らぬ人に声をかけることに躊躇しないのか、中学・高校時代は、どちらかと言えば人見知りする方であったのに、仕事を始めてから変わったのであろうか。

「ちょっとお話を聞かせてください」

一瞬、小柄で最も派手な装いのマダムは怪訝な顔をしたが、「ええよ。何やねん。あんたら警察か、私ら調べても何も出てこんよ」

平日に私服で来ている40歳すぎの男たちが私服の刑事に見えたのだろうか。あるいは、サスペンスドラマで刑事が「ちょっとお話を聞かせてください」というシーンがよく出てくるが、石川のその言葉に対して、サスペンスドラマに引っ掛けた返答とすれば、大阪マダムは機知に富んでいる。

「いや、警察ではありません。大阪からここまでわざわざ巻き寿しを買いに来られたんですか」

「それ、どういう意味やねん。大阪から巻き寿し買いにわざわざ来たらあかんの？」

石川は、ちょっとひるみながらも「すみません。自分たちの地域を元気にすることを目的に活動しているのですが、どうすれば良いのかわからなくて、元気な地域を参考にしたくて、調べているんです」

「そうなんか。あんたら、どこから来てんの」

「奈良です」

「私らより遠いやないの」

「はい。ここまで2時間半かかりました」

「大阪からは、たった1時間半や」

大阪マダムは元気が良い。話のやりとりを楽しんでいる。石川はたじたじである。話の主導権は、既に相手に持っていかれている。医者に医療機器を売り込むのとはまるで違うようだ。

「そんで、聞きたいのは何やの」

「巻き寿しを買いに来られた理由をお聞きしたいです」

「具材が多いし、味つけが良いからや。大阪人は味にこだわるねん。奈良へ行った時、奈良公園で食べることにして、巻き寿しを買うたんやけど、具材は少ない、甘いだけで味も悪かったわ」

質問への回答に加え、みごとな打っ手返しの言葉が返ってきた。奈良人としては耳が痛い。石川は、たじたじを通り越して、降参の態である。金澤の方へ助けを乞うように顔を向けたところで、別のマダムがつけ加えた。

「私ら、これから香住へカニ食べに行くねん。先週、カニ漁が解禁されたやろ」

そうだったのか。海がない県に住んでおり、カニ漁が解禁されたとは知らず、カニを食べに行くという楽しみ行動があることに思いが至ったこともなかった。

さらに、もう一人のマダムがつけ加えた。「ほかにも行くとこあるから、大阪へ帰ったら、ええとこ 7 時や。それから旦那にご飯食べさせなあかんねんけど、遊んできた後で晩ご飯つくる気がせんやろ。ここで、晩ご飯になるもんを先に買うておくねん」

なるほど、そういう理由もあるのか、大阪マダムはスゴイ。会話も遊びも生活もフルに楽しんでいるように思えた。

最初のマダムは、「春先には、このあたりは山野草の美味しいもんがあるから、また、それを食べにくるねん」と付け加えた。

それだけにとどまらず、気遣いも一流であった。「あんたら、えぇこと考えてんのやな。あんたらんとこで何か始めたら行ったるさかい、連絡してきてな。私ら、急ぐから、またね」。

ここまで、石川の後ろにいた 3 人は、誰も口を挟めなかった。大阪マダムの会話はこんなテンポで進むのか、話の主導権を奪われると、聞きたいことも十分に聞けないのか……。大阪マダムたちの車は、パッパ～ッと音を鳴らして、北の方向へ走り去った。こちらは頭を下げて見送るだけであった。「連絡してきてな」と言ってもらえたが、連絡先を教えてはもらえなかった。

大阪マダムたちの車が見えなくなった時、銀行員である河北は、「おばちゃんの消費行動がわかった。おばちゃんに楽しんでもらうようなことを考えれば、金を落としてもらえる」と言う。それはそうであるが、何をすればというところが欠落している。

農作物を作っている能美は、「具材は、うちの地域でも揃えられる。米、卵、キュウリ、シイタケ……、巻き寿しを作ろうと思えば作れる」と言うが、それでは、形だけのコピーではないか。形だけを真似て商品を作ったところで、大阪マダムがわざわざ買いに来てくれるとは思えない。彼女たちのダイナミックな周遊行動を知ったではないか。それに、うちの地域で誰かがカンピョウを作っているという話は聞いたことがないぞ。ここの巻き寿しには、アナゴも入っていたぞ。兵庫県は、ノリ養殖が盛んなところで、ノリも含めて、素材のすべては、地元産品だとも言えるぞ。

石川はと言えば、大阪マダムの毒気に当てられたように、ほぼ放心状態である。3 月の初会合の時には、ハ・ナシで、俺たちをあんなにも煙にまいてくれたのに、会話の主導権をとられ、翻弄されるとこうなるのか。

せっかく事例調査に来たとは言っても、地域活性化の知識も調査ノウハウもない金澤たちの最初の調査はここであっさりと終わった。店舗の運営者へのヒアリングもせずに。

「まだこんな時間やな」

「そうやな。どっか行くか」

「何も考えてなかったな。大阪のおばちゃんたちのように、ダイナミックに動ける情報をもたなあかんのやろな」

結局、帰りは、高速道路のサービスエリアで簡単な昼食を済ませ、有馬温泉へ寄って、日ごろの仕事の疲れを癒しただけであった。家を帰って、みやげものを何も持って帰らなかったことに対する家族の冷たい視線が痛かった。

調査に行く時は、少なくとも事前にその対象のことを調べておく必要があるが、この時はまだ、そのことすらわかっていなかった。

後にわかったことであるが、この地域は、瀬戸内海と日本海の両方に面している兵庫県のほぼ中央にある。昔から瀬戸内海の魚と日本海の魚が運ばれてきた地域で、サバの押し寿しは昔から食べられていたそうである。巻き寿しに入っているアナゴは、高砂市あたりでよく獲れる。昔からの食文化をベースに巻き寿しも押し寿しも作られていた。

そしてこれは、最近知った情報であるが、節分の巻き寿しは、地域の人たちにも手伝ってもらい、総勢 90 人ほどが徹夜で 18,000 本を作るそうである。店で売る以外に、県都のふるさと産品ショップへも出している。地域が培ってきた食文化という地域資源を大切にしたからこそ、今があるのである。巻き寿しの具材の多くは地域の農家からの調達であり、地域経済への貢献度も大きい。

**滋賀県北部の道の駅へ**

12 月初めには、滋賀県の北部へ出かけた。そこの道の駅が、年間約 80 万人の来訪者を集めているとのことであった。広い駐車場には、観光バスが 30 台以上も停まっていた。大きな施設であったが、並べられている商品は、すべて地元のものである。

豊富で新鮮な野菜、野菜の漬物、琵琶湖で獲れる何種類もの淡水魚の佃煮、この町で栽培されているベリーの一種を使ったクッキーや果実酒など加工品の数々……。そして、この店の商品の特徴は、“小分け”されていることであった。米も 10kg 入りは置いていない。いくつもの銘柄米が小分けされている。来訪者は、買物かごに、次々と商品を入れている。同じものを 5～6 個も入れている人も見られる。

今回は、調査を行うという意思をはっきりさせてきた。アポイントなしだったが、事務所を訪ね、幸いにも運営責任者の M 氏に話を聞くことができた。金澤たちと同年代だろうか。

「ここは、北陸と京阪神を結ぶ主要道上にあり、北陸から京阪神へのバス旅行の方々が帰りに立寄ってくださる。車での家族旅行の時にも立ち寄ってくださる方々も多い。県都から、毎週、ここの野菜や加工品を買いに来られる方々にも助けられている」

「道の駅を造りたいとの話が出た時から、地域での話し合いが始まった。どんなものを陳列できるのか、誰に何を買ってもらいたいのか、喜んであるいは納得してお金を落としてもらえるのかなどを徹底的に話し合った」

「“特産品がなければつくれば良い”という考え方もあった。この店にたくさん並べているベリー関連の商品は、海外からベリーの苗を取り寄せ、栽培し、実を加工しているものである。栽培は農家が、加工は食品加工業が、販売はこの施設でということで、地域全体で 6 次産業になっている」

「農家も商業者も食品加工業者も、主婦のグループも、商品づくりに取り組んでくださった」

「試作品ができた時には、地域の人たちに集まってもらい試食会を行った。高校生も参加してくれた。年配者と高校生の味の好みや包装に対する評価はまるで違っていた。ここでの意見をもとに、皆が商品の改良に取り組んだ」

「こうして、道の駅がオープンした時には、自信をもって提供できる品物が 100 種 1,000 品目以上あり、その出荷者は 100 を超えていました」

「そして、最も重要なことは、このような取り組みを通じて、地域の産品、先人からずっと培われてきた生活文化を大切にするということの合意ができたことです。この店舗には、他地域から仕入れたものは皆無です」

「ここへ来てくださるお客様は、この地域の産品のファンになってくださっているのです」

「おかげさまで、農業にも商業にも食品加工業にもお金が回るようになりました。道の駅ができる以前は、お客様が来られるのは夏場の水泳場だけでした」

「車の運転ができない高齢の出荷者の方々にも、集荷車を回すという方法で出荷してもらっています。その方々は、売上が年間 30 万円未満の小規模出荷者が殆どですが、生きがいにもつながっていますし、当方としても商品の多様性を実現することができています。とても丁寧に作ってくださって感謝しています」

「今、出荷くださる個人・団体は合計 250 になりました。提供されている品目は 3,000 種類を超えるまでになりました」

4 人とも、話の凄さに唖然としてしまった。自分たちの地域は、成し遂げたことがゼロの状態である。そのゼロの状態と、この道の駅のような盛況の状態とをつなぐイメージがわかなかった。道の駅の話が出てから 8 年、開設からたった 5 年でこのような状況をつくり得るものなのか。8 年後の自分たちの地域がこのような状況になる可能性をイメージできなかった。

忙しい時に、突然の訪問者に時間を割いて、貴重な話をしてくださった M 氏に丁寧にお礼を述べて、事務所を後にしたが、帰り際の M 氏の一言「皆さんの活動が着実に進むことを願っています。ま

たいつでも来てください。私が知っていることはいくらでもお話しします」は忘れられない。

高い評価を得ているところは、こんなふうに来訪者を大切にしているのだ。どこの馬の骨かもわからない者にまで貴重な時間を割いてくれるのだ。魅力ある施設は、自信をもってすべてを公開するのだ。俺たちもこんなふうになりたいと、金澤は思った。

感謝の気持ちを込めて大量のみやげものを買いこんだ。帰ってから、心を込めて、M 氏にお礼状を書いたことは言うまでもない。大量のみやげものは、家族に喜ばれた。反面、「こんなにたくさん買ってきて……」という一言も耳にすることになってしまった。

今回も、来訪者にインタビューしてみた。金沢市から車で来ておられた 4 人連れのご家族で、2 人の娘さんがファンになっている宝塚歌劇を観に行った帰りとのことであった。なぜか、金沢に縁がある。

40 才代後半のご主人は、「ここは、3 回目。最初に寄った時に、みやげものになるものがたくさんあったからファンになった。今回も、ほかでは何も買っておらず。帰りにここへ寄ると決めていた」。

金沢らしい品の良さを備えた奥さんは、「みやげものは、値段が高いものは、相手に気を使わせることになるからダメ。小分けされたものであれば、いろいろと使い道がある。その地域でしか買えないものを買う。友だちと集まった時に出す。習いごとの先生にも渡す。そうすると、ひとつ 500～800 円ぐらいまでのものが 5～6 個必要」とのことであった。

帰りの車の中で、最初に、河北が呟いた。「リピーターの確保が鍵だな」。それは、そのとおりだが、何をするとも決まっていない中で、今それを言っても始まらない。

能美の感想は違った。「施設を造る以前にやったことがたくさんある。地域の人たちの力を結集したところが参考になる」。そうだな、良いところを突いていると思う。ただし、何をきっかけとして地域の人たちに呼びかけるのかな。

「みやげものを買ってる人らが、みんな楽しそうにしてるのに驚いたわ。時々、嫁はんにつきあって行くスーパーの雰囲気とは全然ちゃう」

「そうやったな。この地域のもんしか置いとらん。ほかから来た人には珍しいもんばかりや。小さなみやげもんを何個も買う時は、渡す相手の人らとの楽しい時間をいくつもイメージしてるんやろな」

「仮想臨場感を演出しとる」

「なんやそれは」

「仮想現実というとる映像技術があるやろ。それをもじって言うてみただけや」

石川は、無言状態である。あまりの凄さに打ちひしがれているのか、それとも、得られた情報を活かすにはどうするのかを考えているのか。金澤が良い方に解釈していただけで、石川は完全に眠りこけていた。

金澤は、こう言わざるを得なかった。「この 2 回の調査で、我々は貴重な情報を得た。何かに取り組んだ時に、何に注意あるいは留意せんならんかのキーワードはたくさん見つかった。ほんでも、何をするのか決めんことには、貴重な情報の活かしようがないぞ」

「両方とも、地域の資源や生活文化を大切にしていたな」と能美が言った。

「地域の固有性、ほかの地域にないもの」。河北の言葉である。

「概念はわかったが、うちらの地域の固有性とは、何やねん！」。ちょっと強く言い過ぎた。気まずい雰囲気になり、帰るまで誰も言葉を発しなかった。別れ際、それぞれで考えて、次回に持ち寄ることとした。

### 町家のひなめぐり

翌年の 3 月上旬には、近くの町で 2007 年に始まった「町家のひなめぐり」というイベントへ出かけた。2007 年に約 8 千人であった来訪者が、昨年（2010 年）は約 4 万人にもなったそうである。新聞は、今年も大盛況と報じていた。

そもそも“ひな人形”は、個人の家の財産であり、それぞれの家で、女の子がすくすく育つように願

うもので、オープンにするようなものではないが、この町では、3 月のひと月間、個人の財産を地域の財産・資源としたのである。

ちょっと寒い日であった。例年 3 月は、気温変動が激しく、寒い日と暖かい日がめまぐるしく変わる。金澤たちが訪れた日は、寒い日であったが、街並みにマッチした石畳や水路、ゴミがなく美しい景観が気持ち良かった。

寒い日には、お客様があまり来られないとのことで、運営の中心メンバーの N 氏が時間をとってくださった。最初に、来訪者の数字を見せてもらった。2007 年が約 8 千人、2008 年が約 26 千人、2009 年が約 35 千人、2010 年が約 40 千人であった。

「どうして、こんなに増えたと思われますか」という N 氏の問いかけに、誰も返答できなかった。次に見せてもらったのは、3 年間のアンケート結果である。2 年目から、きちんとアンケートをとられている。そこには、“去年も来た”人が全体の 15～20%、“知人の紹介で知った”人が全体の 37～40%という数字があった。来て良かったから再訪、行って良かったから知人・友人へ口コミ紹介、その合計が 52～60%である。河北が「凄い」という声を発した。

「お客様のアンケートの自由記入を見てください」との N 氏の声が誇らしい。そこには、次のような言葉が並んでいた。

◇心のこもったお心づかい、お茶ありがとうございました。おもてなしキュンときました。

◇町の方が楽しそうで、表情が生きいきしておられ、イベントに花を添えておられました。

◇ありがとうございました。次は、たくさんの人と一緒に来たいです。

◇お雛さまのお顔とスタッフの方々の笑顔が重なって、とても楽しかったです。

「それから、こちらも見てください。こちらは、運営参加者の声です」とのことで、そこには、次の言葉があった。

◇楽しい 1 ヵ月であった。こんな状況が続いたらうれしい。

◇皆さんに、「美しい町ですね」「良い所ですね」と言っていただき、町に誇りをもてた。

◇「住民の方と話をできるのがうれしい」と言ってもらえ、私たちもうれしかった。

来訪者との関わり、信頼関係を創りだしたこの町では、人と人との交流がベースとなって、交流が新たな交流を呼び込む“好循環”が膨らんでいることが、アンケート結果からわかる。自分たちの町で、今はまだ何に取り組むとも方向すら定まっていないが、何かを行うとすれば、“人と人との交流”を大前提として考えなければならないと、金澤は思った。

「それから、私たちは、行政に頼らず、“住民自ら”を当初から行っています。町の財政が破綻しかけていたことも、“自ら”のきっかけのひとつです。住民による“もてなし・かかわり”を重視しています。当初から、来訪者層を明確に想定し、口コミを重視しています」

「どんな来訪者層ですか」

「今日も見ていただいたとおり、また、お雛様ということもあって、“おばちゃん”です。みなさん、時間を自由に使える方々です。おしゃべりが好きで、口コミも期待できます」

「なるほど。でも、“おばちゃん”は、評価がキツイことはないですか」。かつて大阪のおばちゃんの毒気にあてられた石川が聞いた。

「私たちは、住民による“もてなし・かかわり”をブランドにしようと最初から確認しあっています。アンケートでも、それが重要であったことが現われていましたね。それから、正確な数値を把握して、それを活かすことも行っています。来訪くださった方に不満を抱かせない“もてなし体制”、必要な食事数をどこで提供できるのかの検討、トイレの確保などが重要です」

「先ほど紹介いただいた数字で、初年度が 8,000 人、2 年目が 26,000 人と急増していましたね。何か問題は起きなかったのでしょうか」

「当然、起きました。それだけたくさんの方に来ていただけるとは想定できていませんでしたから、提供できる食事数が足りない、トイレに長い行列ができてしまうことが起きました。電車でお越しくださ

る方が中心でしたので、駐車場は大きな混乱が生じなかったですが……。お客様に迷惑をかけたのです。それでも、3 年目は、35 千人もの方々が来てくださった。“もてなし”を感じて、また来てくださる、口コミで広げてくださる。ありがたいことです」

天候が不安定な3月は、平日・休日は関係なしに、晴れる・暖かい日に来訪者が多いことがわかったそうである。1 日あたりの最大来訪数5,000 人にも対応する必要がある。一方で、寒い日、雨の日に、多くの食事を準備していた場合、大変なことになってしまう。

金澤たちは、N 氏に心から感謝しつつ、町並みをじっくりと眺めながら帰途についた。

「イベントを行うということは、いろいろなことを事前に想定せなあかんのやな。それと、基本的な考え方が重要やねんな」

「始める前に 2 年間、徹底的に計画を練ったと言うてはったな」

「N 氏は、東京・名古屋・大阪で、40 年間にもわたる単身赴任生活をされたんやから、自炊の時は買い物にも行かれ、おばちゃんの生活感覚やらニーズを知っていらっしゃるんやろな」

「地域の人の活躍の場をつくってはるな。そこが凄いことや」。みんな良い勉強をさせてもらった。

この数日後、大変なことが起きた。東日本大震災では、大変なことが起きている状況が放映された。見ていて、声を失った。胸が張り裂けそうになった。どのような支援ができるのだろうか。一市民として何ができるのか、建設会社の一員として何ができるのであろうか。そう考えている間にも、福島第一原子力発電所 1～4 号機が、炉心溶融や建屋爆発事故などを連続して起こした。

1995 年 1 月の阪神・淡路大震災の時は、金澤は、入社 7 年目であった。この時には、所属部門を問わず、社員が総動員されて、被災地支援、復旧工事、復興計画づくりにあたっていて、春の連休など全く関係なかった。被災地での泊まり込みの連続であった。ところが、時々、家へ帰ってきた時には、あまりのギャップに、何をどう考えれば良いのかすらわからなくなった。

学生時代を過ごした神戸の街が壊れた。ところが、大阪都心は、その日も、それ以降も日常のままであった。さらに腹がたつことが起きた。オーム真理教による地下鉄サリン事件である。出張で、東京本社へ出向き、関係省庁との折衝の役割も担ってきた。中央省庁の方々は、未曽有の大災害に対して真摯に向き合ってくれていた。東京の雰囲気も、神戸を思いやる感じがあった。ところが、3 月 20 日を境にして、東京では、神戸のことが忘れ去られたように思ってしまう。

サリン事件の 1 週間後であっただろうか、東京での仕事を終え、横浜支社にいる大阪出身の同期入社の知人が労ってくれるというので、横浜で一杯飲んでいた時のことである。どうしてそういう話になったのか、前後は忘れたが、50 歳前後の店主に出身地を問われ、“神戸”と答えてみたた。当然のことながら、「大変ですね」という返答を期待していたのだが、神戸の震災は、既に忘れ去られていた。

東日本の被災地で、そういうことがあってはならない、日本中が、被災地を思いやることを続けなければならないと思った。

### ここからどうする？

5 月初めの連休中に集まった。話し合いを始めてから、既に 1 年以上が経過している。

「そもそも俺らは、何のために兵庫県の真ん中や滋賀県の北部、隣町へ行ったんかな」と、金澤が口火を切った。

「活力があるところを見れば、何かヒントが得られるということだったな」

「俺たちはヒントは得られたのかな」

「うん。兵庫も滋賀も 10 年であの状況にまで持っていけていることが凄い。刺激を受けた」。

石川は、「大阪のおばちゃんが凄かったな」と言う。あの時、会話の主導権を瞬時に相手に握られ、負けたという思いが強く残っているのかもしれない。

「確かに大阪のおばちゃんの行動や思考から得られたものはある。この隣町で、おばちゃんをお

客さんにして成功しているのもわかったが、今日は、それを、うちの地域に、いかに反映させていくんか、考えるんとちゃうか」と、金澤が、思考の発展を促した。
「何かに取り組む時に留意しなければならないことはいくつも学んだ」
「何に取り組むんだ？　河北は、地域の固有性、ほかの地域にない資源を活かすと言っていたな。何を活かすのか、考えてきてくれたんだな」と、金澤が、河北に話を向ける。
「考えたが、わからなかった」
能美が、「わからなかったということは、考えていないのと同じだな、支店長様」と言う。いつもは、この言葉で河北がむっとして、ののしり合いが始まるのだが、今日の河北は「そう言われても仕方ないな……」と、なぜかおとなしい。
「何かあったんか」と、能美が気づかう。喧嘩相手が元気ではないと、能美の優しさが出るのか。
「うん。ちょっとな。この地域の支店の取引先で、倒産が続けて 5 社も出た」。
こんな深刻な話を出されると、みな言葉を失ってしまう。5 社とも創業から約 50 年、従業員数は合わせて 50 数人と多くはないが、地域の素材を活かした優れた製品をもっており、長年にわたって地域の雇用を支えてきた企業だそうである。
「伝統工芸的な商品は売れなくなっているのかな」
「そのようだな。5 社とも後継者もいないし」
「きついようだが、商品開発の工夫が足りなかったのではないか」
「そうでもない。技術を活かした新商品を作ることを怠ってはいなかったと思うが……」
「地域の産業が衰えていくと、この地域の活力がさらに落ちてしまうな」
意思決定機構が地域にある企業は重要な存在である。意思決定機構が地域外にある企業は、地域のことは無視して事業所の改廃を行い、地域の雇用や利便性を損なわせる。ショッピングセンターが撤退した時に、大きな問題が生じた。意思決定機構が地域にある企業は、そんなことはしない。
「そうすると、我々の検討課題の中に、地域産業の創造も入れなければならないな」
それはそうだろうが、今それをテーマに入れると、ますます混迷状態が広がっていくだけのようにも思われる。何からどう取り組んでいけば良いのか？

突然、能美が、「このまま会合を重ねていても、何も生まれん気がする。ともかく、何かやってみんか」と言い出した。
「何をやるんや」
「夏休み期間中に、子どもたちに体験をしてもらうちゅうんはどうやろか。最近の子どもたちは、家にこもってゲームばっかりや」。能美の長女は、金澤の娘と同学年、長男は彼女の 2 学年下である。このあたりの子どもも、外で遊ぶことが減っているそうである。
「それは良いかもしれん。そんで、どっから来てもらうんや」
「都会の子どもやな」
「親も一緒ちゅうことやな」
「おととい、子どもを連れて、あこの小学校跡にできた体験交流施設へ行ってきた。ものづくり体験をやっとって、うちの子どもは 2 人とも、勾玉づくりに夢中になっとった。ヤスリで荒削りをして、紙ヤスリで丁寧に磨いていくだけのことやが、それに 1 時間以上も没頭しとった」
「その間、お前は何してたんや」
「最初は、子どもらの様子を見とったが、仕上りまでに時間がかかりそうなんで、店の中をぶらぶらしていた。地元野菜を少しだけ販売しとったが、同じようにヒマな親がそれを買うとった。女房は、ヒマを持て余しとった。うちに野菜があるんやから、野菜を見てもしゃぁないしな」
「なるほど、子どもの楽しみと親が得することの両方が必要なんやな」
「俺たちでも、夏休みに、そんなイベントができるな。ここらには、木工職人もいるし、ものづくり体験

を指導してくれるはずや」
「夏休みの工作の宿題を作れるようにしたらどうやろ」
「能美が子ども連れて行ったとことバッティングするかもしれんちゅう問題はあるけど、子どもが楽しめることと親が得することを合わせてやってみるか」
「都会の親子に楽しんでもらおうやないか」

何か道が開けたような気がしてしまった。何を行うのかを考えてくることを義務づけ、次の日曜日に企画会議を行うこととした。河北から出た企画会議という言葉に、なぜかしら高揚感を感じた。
何のために、どのような目標を立てて、ということについて議論しておかなければならないとは、誰も思わなかった。都会に対して、どのように情報を届けるのかについても思いが至らなかった。

## 第 3 章　とにかく実践

1 年以上にわたって、4 人で話し合いや先進地調査を重ねてきたが、金澤には、何か成果を得られるという実感は全くわかなかった。ほかの 3 人も、同じように感じていた。このままでは、この地域は停滞を解消できない、衰退の一途を辿るという危機感は共通に持っていた。

そこで、春の連休に集まった時に、方法を切り替えることとした。「ともかく、何かやってみる」という方法である。何かをやりながら、その先を考えていこうということであるが、何かをやったことが先へつながるのかどうかは全くわからなかった。あの時に、こんなやりとりがあったことまで思いだされる。

「ともかく、何かやってみんか」

「またかい」とちゃちゃを入れたのは河北である。「中学の時、釣りに行こう言うて、何もわからんまま、親父さんの釣り道具を持ち出して行ったやないか。あたりまえに釣れんし、お前は川にはまってズブ濡れ、おまけに、解禁前に何しとんのやちゅうて怒られるしな」

「余分なこと、思いださんでえぇ。ほかに方法があるんなら言え」

「すまん。何もない。もうひとつ言うてえぇか」

「なんや」

「“ともかく”と言うたが、“とにかく”ではないんか」

「面倒くさいこと言うな。どう違うねん」

「“ともかく”は、それは差し置いといてということや。俺らには差し置いとくものがないから、“とにかく”が正しいんではないか」

「ほんまかい。そんなこと考えたことないわ。もう、どっちでもえぇ。面倒くさいこと言うな」

1 年以上かけて、話し合いや先進地調査を重ねてきたが何も成果がない閉塞状況から抜け出したかったのが 4 人共通の本音であった。

企画会議と名づけたことから、それぞれ何かしらの高揚感を持って集まったが、コトを起こした経験は誰にもなかった。それぞれ、いくつかのイベントに行ったことはあったが、既にお客さんが来ている会場へ行っただけで、会場ができるまでに、運営者側がどのようなことを考え、どのようにしてイベントをつくり上げてきたのかは全く知らない。

小学校の PTA 主催の行事にも参加したことはあるが、行事を準備する過程での、母親たちや先生方の苦労は知らない。地域の祭りにも参加したが、昔からの運営手法が踏襲されているもので、自ら何かを行うという経験ではない。

農家の能美の提案は、先に決めた“子どもが楽しみ、親が得する”というコンセプトを踏まえ、堆肥の中にたくさんいるカブトムシを活かすこと、農家仲間に呼びかけて野菜を販売することであった。

「ただし、農協がえぇ顔するかどうかわからん。農産物直売所へ出している人からの協力が得られるかも微妙や。ほんでも、1 日限りのイベントやから、気にせんでもえぇか」

「親父に頼んで、うちの自分とこ用の野菜も出してもらうことにする」と、金澤が言った。

銀行員の河北は、「気になっていることがあるんだが…」と言い出したとたんに、能美から、「銀行ができることは、金貸ししかないやろ」という、いつものような小競り合いを生ずる言葉である。

石川がすぐさま、「まぁ聞こうやないか」と言う。

河北は、能美に何か言いたそうであったが、それをこらえて、「山あいの辺りのことなんやが、家族の数が少のうなって、高齢者夫婦だけの家で、昔からの広さの畑を作ってられる。食べきれないほどの野菜ができて、腐らしてはる。あの辺りのおばあちゃんに、野菜を出してもらえんやろか」

「持ってきてもらえるんか、売れ残ったらどうする」と、能美が、すぐに反論を入れる。

「いや、俺たちが集荷に行かな無理やな」

「仮に俺たちが集荷に行くとして、その間、会場の設営は誰がやるんや、それ以前に、出荷してもらう確約を誰がもらいに行くんや、どのくらいの数量が見込めるんや」との能美の指摘で、この話は終わってしまった。
そのとおりであるが、今は無理でも、近い将来、何とかならないものか、お年寄りに元気になってもらうきっかけにもつながるなと金澤は思った。

「ほんで、カブトムシはどうするんや。数は確保できるんか」
「ほかの農家でも堆肥を使っとるから、頼めば、数は確保できる」
「数が確保できるとして、売るんか？」
「うん。売る」
「売るだけか」。いつもは、能美が先に仕掛けるのだが、今日は河北が仕掛けた。
「それの何が悪い」
河北は、能美の剣幕に押され、「いや、そういう意味やないんや。カブトムシに競争させたり、相撲をとらせたりはできんか」
「それは考えとった。何かせにゃおもろないもんな」
「数はどんくらいを考えとるんや」
「考えとらんかった。銀行員のお前が数字に強いんやから、考えてくれ」
「ムチャ振りやな……。売れ残ったら山へ逃がせばえぇんやから、1,000 匹かな」
「どっからそんな数字が出てくんのや」
「調べてみんとわからんが、オス・メスつがいが入ったカゴ 500 個や。ひとカゴ 500 円でどうや」
「銀行員が適当な数字を言うとってえぇんか。500 人が買うてくれるちゅうことか。来てくれる親子が 1,000 組いても、そんなに売れへんぞ。仮に 1,000 組が来てくれるとしたら、来てくれる人の合計が 3,000 人から 4,000 人や。どこにそんな会場があるねん」
話は、こんな感じである。企画会議というもっともらしいネーミングがふさわしかったのであろうか。数字は、後日、河北が調べてくることとなったが、具体的なことをやろうとすると、次々と課題がでてくる。何人の人に来てもらえるのか、会場はどうするのか、運営スタッフは、トイレは、食事は……。何かコトを行うとは、こんなにも大変なものなのか。

石川が話を変えた。「中学時代に一緒だった志賀を覚えとらんか、家業の木工所を継いどるが、あいつに協力してもらって、能美が言うとったような工作教室ができんかな。夏休みの宿題の工作ができる教室」
志賀は、斜陽産業と言われて久しい木材加工業を営んでいる。木工品は、安いプラスチック製品に押されて需要が減り、この町の木工所は、次々に閉鎖に追い込まれた。しかし、志賀は、親から継いだ家業を続けている。経営状態は厳しいながらも、伝統技術に根ざした製品は、長年続く一定の顧客を持っているそうだ。
志賀へは、石川がすぐさま電話をかけた。志賀も、地域の衰退が気になっていたようで、協力を約束してくれた。

会場は、地区の公民館とその前の広場を想定したが、すぐには首を縦に振ってもらえなかった。何とか頼み込んで、会場が確定したのは 6 月中旬であった。
5 月・6 月は、能美が農家仲間との調整を行ってくれた。カブトムシの確保、野菜の出品などについて、何人かに了解を得てくれていた。と言っても、何人に来てもらえるのか、想定できないままである。能美以外はサラリーマンで、地域内で動く能力はなく、3 人は、主として能美の成果を聞いていただけである。

石川は、7 月の初めに、志賀との調整を行ってくれた。子どもたちに体験してもらうのは竹トンボと決まった。

東日本大震災の被災地が大変な時に、自分たちのことばかりをやっていても良いのかという気持ちが心の隅にあり、前に進みにくい時もあった。かと言って、俺たちにできることは、被災地の方々に思いを致すことと義援金を送ることぐらいしかない。3 月上旬に行った“ひなめぐり”の来場者は、3 月 12 日以降、めっきりと減り、最終的には去年より 1 割減とのことであった。日本中の誰もが、自分の楽しみを控えていた。

金澤の会社はとにかく忙しかった。東北支店へ多くの応援部隊が行っていて、大阪本店の人員が半数ぐらいになっている。残っている者も、仕事量が増え、休みをとることがままならない状況が続いていた。時折、東北の現場から本店へ戻ってきた同僚と話をすると、心が痛むことが多い。

阪神・淡路大震災の時は、渦中にいるも同然だったので、半年間で、家へ帰ることができたのは、ほんの 10 回くらいであった。怖い目にも遭った。三宮の現場へ支援に行った帰りに、新神戸駅から JR 住吉駅までタクシーに乗った時のことである。

JR 神戸線、阪神電車、阪急電車が被災していたが、JR 住吉駅からは、大阪へつながっていた。三宮から住吉駅へ車で移動するのは、通常であれば、国道 2 号線か国道 43 号線を使うが、両者とも悲惨な状況にあった。新神戸駅から東へ向かう山手幹線が比較的被災が少なかった。

それでも、倒れかけて街路樹に寄りかかっている家がいくつも見られる。この震災では、耐震壁が入っていない古い住宅が倒壊した例が目立ったが、街路樹に寄りかかっているということは、住民が圧死していない。大変な状況ではあるが、少しばかりの救いに思えたその時、突然、タクシーが急ブレーキをかけた。直後に、ガァンという耳をつんざくような音がして、同時に耳の横を何かが凄まじい勢いで通り過ぎた。前列のシートの背に突き刺さっている直径 5cm ぐらいの鉄パイプが、首のすぐ横にあった。

タクシーが横から走り出してきたネコを避けようと急ブレーキを踏んだ時、後ろを走っていた軽トラックも衝突を避けるために急ブレーキを踏んだ。その時、軽トラックの荷台に積んでいた工事資材のパイプが前へ飛び出し、タクシーの後部窓を直撃したわけである。軽トラックがきちんと荷造りしていなかったから飛び出したのであるが、震災復旧の現場で、きちんと荷造りするような余裕はない。もう 10cm、いや 5cm ずれていたら即死で、今頃ここにはいない、ということまでもが思い起こされる。

東北でも、被災地で、様々な混乱や危険なことが起きているはずである。家族を亡くされた方々のこと、復旧現場で働く人たちのことを思って、胸が絞めつけられた。

案内チラシの印刷ができ上がったのは 7 月中旬であった。本番まで 30 日ちょっとしかないと、本当は思わなければならなかったのだろうが、そうは思わなかった。この 30 日で準備しなければならないことの全容が掴めていなかったからである。

イベントの名称が決まったのは、6 月も終わろうかという時期であった。名称を決めるのは難しい。ああでもない、こうでもないを繰り返したうえで、“夏休みものづくり体験＆産直野菜フェア”となった。

5 月から準備を始めたが、その時点で、何をいつまでにということが決まっていなければならなかったのであるが、当日の状況を詳細にイメージできなかったので、何をいつまでに準備という計画は立てていなかった。イベントを見に行った経験があっても、運営・設営側の経験がないから、わかるわけがなかった。

数量はいつまでたっても決まらなかった。はたして何人が来てくれるのか。とにかくやってみなければわからないが、参加くださる人数が決まらなければ、野菜出荷をお願いしている人にどの程度の量をお願いするのかも決められない。それだけではない。来訪者数を決めたとしても、おひとりがどの程度の量を購入くださるのかもわからない。

窮余の策として、「あまり広範囲に声をかけても迷惑がかかる、農家仲間 5 人だけにお願いする」と

いう能美の言葉で決定した。出荷数量は、「その時になってみければわからない」とのことである。「そんなことで、イベントができるのか、来てくれた人に満足してもらえるのか」と言いたかったが、自分が何もしていない金澤は、その言葉を飲み込まざるを得なかった。

牛糞堆肥を使っている農家が能美ともう1軒あり、カブトムシは、牛糞堆肥の中に多いから200～400匹は集まるだろうとのことであった。この数値も、勝手な推測にしかすぎないが、そうすると、100組ぐらいの来訪者に対応できるということになった。

来てもらう目標数は200組、500人ぐらいとした。今は、供給側から数字を決めざるを得ないが……。500人を集めるのがいかに難しいかは、後に思い知ることとなった。

さて、カブトムシの飼育容器はどうする？　木工所でつくってもらうと、ひとつ800円は必要とのことであった。それでは、カブトムシ2匹を200円としても、原価1,000円となる。

急遽、「100均」へ走ることとなった。幅17.5cm×奥行11.5cm×高さ11.5cmの小さなものが売られていた。しかし、100個の容器を揃えるには、5つの店舗を回らなければならなかった。これで丸1日がつぶれた。想定していなかった作業が生じるものである。容器には、杉チップと牛糞堆肥を混ぜたものを入れることとした。

カブトムシの値段は、オスが500～600円、メスが400円、つがいで1,000円程度というのが相場と、河北が調べていた。ひとつがいを500円で売るのであれば、100つがいは売れると、4人は勝手に思ってしまった。

ただし、イベントの時期を8月下旬の日曜日、学校が始まる1週間前と決めていたので、もうひとつ問題があった。カブトムシは、6～7月に、サナギから成虫になる。成虫が飛んで行ってしまわないように、カブトムシがいる堆肥を網で覆っておかなければならない。

それだけではなく、イベントまでの間に産卵期を迎えてしまう。成虫になって2週間後ぐらいから産卵期に入る。そうすると、オス・メスつがいを販売しても、産卵が終わっていてすぐに死ね。翌年、その飼育容器からカブトムシが発生することはない。

堆肥を網で覆う前にカブトムシを取り出して、オス・メスを分離しておく必要がある。早く対応しなければ、お客さんに不良品を掴ませてしまうことにもなりかねない。カブトムシの寿命は10ヵ月ほどで、成虫の期間は2ヵ月ほどしかない。想定できていなかった急な作業にバタバタした。

能美は、堆肥にカブトムシの幼虫がいること、それがいることで堆肥の効能がより上がることは経験的に知っていたが、カブトムシのライフサイクルは知らなった。河北が調べてきたものである。河北の報告では、カブトムシは、産卵期が8月頃、孵化期が9月頃の約1ヶ月、幼虫期が10～5月、サナギ期が5～6月、成虫期が6～7月だそうである。

こんなことが早くにわかっておれば、イベントの時期を8月の上旬にしたのに……。いや、取り組みをきめたのが5月上旬で、バタバタし続けてきたから、そもそも8月上旬では無理だったかもしれない。イベントを行うとは、こんなに大変なことなのかと、改めて思った。

この地域に酪農農家があるが、牛のし尿を川へ垂れ流す、糞が臭いということで、周りからは良い目で見られていなかった。多くの人は、地域のマイナスの資源という認識であった。

ある人が、これもマイナスの資源であった製材の端材を細かく砕いたチップと牛糞を混ぜて1年間放置・熟成したものをブルーベリーの肥料として使ってみたところ、すばらしい効果が出た。ブルーベリーの樹勢がよくなり、実の糖度が増した。

それだけではなく、従来、ブルーベリーに与えるべく肥料を撒いていたものが雑草の繁茂を招いていたのだが、牛糞堆肥を10cmほどの厚さでブルーベリーの周りに敷き詰めると、雑草の発生も抑えられた。一石二鳥である。

そして、この時から、酪農農家への見方が変わった。貴重な資源の供給源である。さらに、端材は産業廃棄物として、砕いてから処分しなければならないとされていたからマイナスの資源であったが、

これも有用物に変わった。一石三鳥にもなっている。
　この牛糞堆肥には、カブトムシの幼虫が大量に棲息している。カブトムシの最適な産卵床であったのだ。堆肥の中に幼虫がいることは良いことらしい。幼虫の糞が混ざった堆肥が畑に良い影響を与えるようで、カブトムシの糞が肥料として売られてもいるようだ。

　ここまで、バタバタの連続だったなと、金澤は思う。能美から、農協へ相談に行ったが、協力が得られなかったという連絡が入った。
　「あいつら、何やろうしとんのや」「そんなことやってもうまくいくんかい」「勝手に動いといて、協力せえへんぞ」という心ない声も聞こえてきた。
　俺たち 4 人が突っ走っていることに理解が得られていなかった。何もしない周りの人たちは勝手な“批評”をしてくれるのが常である。ところが、実際に取り組んでいる側にとっては、それが“批判”に聞こえて、ツライところがある。
　田舎では、何かする時には、昔からの寄合いで、事前に賛同してもらっておく必要がある。今回の俺たちの動きは、そんなこととは無関係に進めてしまっている。しかし、あの時の、「思い立ったが吉日や」という石川の言葉に、金澤と河北が奮い立ったのも確かである。
　田舎では、各家が平等で、寄合いでは、全員の賛同が得られるまで何度も話し合いを繰り返す。一方で、古くからの家の序列が残っており、そこを見誤ると、何も決まらず、何も進まない。「地域が共同体であった時代と俺たちの時代は違うんだ。そんな面倒くさいことを金科玉条としているから、今まで問題を放置してきたのではないか」とも金澤は思うが、地域に関わってこなかった自分にそれを言う資格はないかとも思える。親父が、批評・批判を何とか抑えてくれたようだ。

　さて、イベント当日のことを考えると、頭が痛い。ここまで、出し物の準備に時間がかかっていた。チラシは、とりあえず 1 万枚を印刷していたが、どこへ届けるのが良いのか、皆目見当がつかなかった。都会の親子に来てもらうためにどうするのか？
　都会へチラシを届ける術がないことに、この頃になって気づいた。会社で親しい何人かに渡して、配布してもらうか。せいぜい 100 枚だ。石川や河北もそのくらいだろう。河北の銀行の支店に置いてもらえれば県内だけで 100 店あるから、1 店 30 枚として 3,000 枚だろうか。近くに 40 年ほど前にできたニュータウンへはポスティングするとして、1,500 枚ほどが必要であろう。
　「おいおい、チラシの効果は千三ツと聞くぞ、誰かれなしの 4,000 枚ぐらいの配布やったら 12 人や。的を絞って配布せんと、目標に届かんな」
　「そう言うても、何かあてはあるんか」
　娘の小学校の校長先生にお願いに行くと、「教育委員会へ行って、全小学校で子どもに渡してもらえるよう頼めば……」ということになった。それでも、町全体で約 1,500 人である。
　教育委員会は手ごわかった。趣旨はわかってくれたが、教育委員会の後援名義をとっていない“個人的な活動”のチラシを学校で配布することはできないと言われた。既にチラシは印刷済である。今さら後援名義を申請して、後援名義先を記載したチラシを印刷する時間もない。事前に企画・計画書を出して、公益性が認められれば後援名義というお墨付きがとれることをわかっていなかった。チラシを校門外で子どもに渡すことについては、了承とはいかなかったが、否定はされなかった。
　河北の銀行からも簡単に了解は得られなかった。“個人的な活動”を当該支店で紹介するのはかまわないが、全支店に置くとなると、別の“個人的な活動”についても同様に対応しなければならないようになり、収拾がつかなくなるとのことであった。河北は、「申しわけない」と謝ったが、それでは終われない。仕方なく裏道を使うこととした。親父の知り合いに銀行の創業者一族で大株主の方がおられ、その方から口添えしてもらった。ここでも事前に後援名義申請をしておけば……。
　後に知ったことであるが、県の農林部が、県下全域の“夏休み子ども体験教室”を、ひとつのパン

フレットにまとめ、全小学校で子どもに配布している。これに載せてもらえれば、県下全域の小学生の親に情報を届けられる。各市町村の図書館に置いてもらいたいのであれば、そのネットワークの中核にある県の図書館へ持ち込めば、県下のすべての図書館へ送ってもらえる。これも、県の後援名義があればの話であるが……。ただし、後援名義をもらえたとしても、資金的援助が得られるわけではない。

これも後に知ったことであるが、都会の小学生の母親は、6 月に入ると夏休みのことを考えるそうである。母親向けの情報誌には、6 月号に、夏休み特集が載っている。SNS を使って、参加してくれる仲間を募るという方法はまだなかった。

### イベントの結果

そろそろ、イベントの結果に言及しておかなければならない。大阪から来てくださった車が 10 台で 30 人ほど、県北部からと思われる車が 10 台ほどで約 30 人、参加者総数は約 150 人で、他地域からのお客さんは 4 割程度であった。

カブトムシの販売は約 20 つがい、ものづくり体験は 15 人だけであった。野菜の販売は、5 人の農家が 10kg づつ出してくれたが、すぐに売り切れ、後から来た人からの苦情が続出した。「それ見たことか」という批判の声が聞こえてきそうな気がした……。

それでも、金澤たちは、少しばかりの達成感を感じていた。500 人の目標に対して 150 人しか参加してもらえなかったにも関わらず、である。何もわからないまでも、初回は何とかやり遂げた。カブトムシは野へ放ち、飼育容器は来年も使える。

8 組だけであったが、大阪から来てくれた家族とつながりをもつことができた。こんなことがまたあるのであれば、友人にも声をかけて一緒に来てくれるという 10 家族とのつながりが、今後の頼みの綱となった。

資金面では、何にいくらお金がかかるのかを事前に把握していなかった。チラシのデザイン料と印刷代、カブトムシを逃さないための網、カブトムシの飼育容器、会場の借上げ料、野菜を持ち帰ってもらう袋、ものづくり体験の紙ヤスリ代等、当日サポートをしてくれた人たちの昼食代などで、合計 10 万円ほどであった。収入は、カブトムシの販売代 10,000 円、ものづくり体験 1,500 円のみで、赤字分は 4 人で負担した。

### 反省会

イベントの反省会を9月中旬に行った。木工所の志賀も参加してくれた。志賀は、ものづくり体験を手伝ってくれた横山君を連れてきてくれた。35 歳の家具職人である。主に椅子を作っている。すばらしく座りごごちが良い椅子らしい。素材を入手しやすいことから、この地域へ移住してきた。

能美は野菜を出品してくれた農家仲間の津幡君を連れてきてくれた。38 歳である。農業を継ぐ人が少ない中で、期待されている若手農家である。これで、7 人の侍である。

志賀は、イベント当日、竹トンボづくりを担当してくれた。志賀が言う。「眼鏡かけた小生意気なガキがおってな。材料と小刀を並べておいてたんやけどな。おっちゃん、子どもに刃物もたせたらあかんねんでと言いやがる。小学校 2 年くらいかな」

「ほう、なんでや」

「ケガしたら、どうすんねん。学校では禁止やで」

「くそったれ、このガキが！　指摘しやがってと思うた」

しかし、志賀は、確かにうちの息子も学校へ刃物を持って行かない、この子はお客様であると思い直して、つくり笑いをしながら、「ほんなら、これでやるんならどうや」と紙ヤスリを出したそうである。「つくり笑いは、人生で初めての経験やった」とのことである。結局、自分で粗削りをして、子どもに体験させるのは、紙ヤスリでの仕上げだけにせざるを得なかったそうである。

「俺たちの子どもの頃、学校に鉛筆削り器が置かれたが、それでも、小刀を持って行ってたな」
「ガキに出鼻をくじかれたんやけど、その子ができ上がったものをえらい喜んでくれてな。ずっと飛ばして遊んどんのや。そしたら、次々とほかの子が寄ってきてくれて、うれしかったな」
なるほど、そういう流れが生まれるのか。参加してくれた子どもたちが楽しそうに遊ぶ姿は、連れてきた親にとってもうれしいはずである。次回は、そういう遊びの広場も入れよう。
「でもな、竹トンボでは、小学校低学年の工作の宿題になっても、高学年には人気がなかった」
そういうものか。次は、年齢層を考えながら、誰に何を楽しんでもらうのかを考えながら、ものづくりの出し物を考えなければならない。

「PR がバタバタだったな」
「うん。何もわかっていなかった」
「河北の顔をつぶして悪かった」
「まぁそれは良しとしよう」
「どこへ撒いたチラシでどのくらいの人が来てくれたのか、全くわからんぞ」

「目標設定が難しかったな。目標数を決めないと、準備もできん」
「仮に、目標数以上の来訪があった時には、避難轟々やったんやろ。野菜がすぐになくなって、後から来てくれはった人に怒られた」
「次にやる時は、今回の数字が基礎になる」

「事前に調べておかなならんことに気づけなかった。例えば、カブトムシが成虫になる時期、産卵する時期」
「そうやな。河北が調べてきてくれて、慌てたもんな」
「カブトムシ競争は、人気がなかったな。あんまり動きがあらへんからかな。当てた人への景品が、野菜ではあかんかったんかな」

「野菜はすぐに売り切れた言うても、ほんまに、あの野菜で良かったんかなと思うてます。安ければ売れるのがあたりまえで、野菜の種類がもっと必要やなかったんか、珍しい野菜を並べて、それの食べ方について教えられたら、つながりがもっとできたんやないかとも思います」。能美が連れてきた津幡君は、なかなかの奴やなと金澤は思った。

「アンケートは何人が書いてくれたんや」
「10 人だけや。少ないわ。けど、10 人とも、次も来てくれると書いてくれてる。連絡先も書いてくれてはる。地元の女性は、こんなことをやったら良いと思ってたそうや。励ましの言葉がある。次は手伝うと書いてくれてる」
「俺らは、俺らが何かやらなと思うてたんやけど、そんなふうに思うくれてる人もいるんや。元気がでるな」

### 干し柿づくり

晩秋には、夏休みのイベントに来てくださった家族へメールを送り、干し柿づくりに来てもらった。参加は 5 組 18 人であったが、金澤の父親が作っている柿のひとつである“平核無（ひらたねなし）”の干し柿づくり、伝統食の“亥の子餅（いのこもち）”、“きぬかづき（小芋の田楽）”、“大根の甘酢漬け”などでのおもてなしで、11 時から 5 時間をともに過ごした。
干し柿は、年末に、宅配便で、5 家族へ礼状とともに届けた。正月に、5 家族から丁寧なメールや

手紙が届き、とてもうれしかった。
　こうして、“つながり”は深まった。みんな都会人で、田舎を持っていないということであった。大阪から車で 1 時間ほどの田舎は、都会人にとって貴重な存在なのだ。“田舎とのつながり”が、キーワードのひとつかと思う。

**第 2 回イベント**

　翌年は、8 月上旬に、第 2 回の“夏休みものづくり体験＆産直野菜フェア”を開催した。今回は、準備も十分、前回の反省を踏まえて、出し物も十分に練った。PR にも手間ひまを割いた。企画の段階から、7 人の侍に加え、50 歳代の女性 2 人が加わってくださった。
　今回は、成功間違いなしと思っていた。成功とは何なのかの定義はなかったが、メンバー全員がそう思っていた。
　結果は、目標 500 人に対し、参加者総数約 250 人で、野菜は売れ残りが出た。カブトムシが売れたのは 30 つがいにとどまった。ものづくり体験は 20 人であった。

　俺たちに何が足りないのだろうか。俺たちはどこへ向かおうとしているのだろうか。金澤の脳裏に、「俺たちに明日はない」という映画のタイトルが、ふと浮かんだ。原題は「Bonnie and Clyde」である。金澤が生まれた 1967 年につくられたアメリカ映画である。学生時代に、神戸の名画館で見た。
　時は、1929 年に始まった世界大恐慌の時代という設定である。この時の実在の強盗をモデルにしているらしい。刑務所を出てきたばかりの強盗犯クライドは、ウェイトレスのボニーと出会う。ボニーは、クライドに興味をもつ。クライドは、彼女の面前で強盗を働き、ボニーは刺激を受ける。二人は、車を盗み、次々と銀行強盗を犯していく。悲しい結末になることは見えているのに。
　俺たちの「まずは、何かをやってみよう」は、そう遠くない先に終わりを迎えるのだろうか。初回は、目標に達しなかったイベントであったが、何かしらの達成感があった。しかし、今回は、きちんと準備も行ったのに……。何か疲労感が残る結果となった。
　盆休みの間に反省会をもったが、次に向けての威勢のよい声は出なかった。それでも、「ここで止めたら何も残らない。来年もやろう」という意思だけは確認しあった。

　晩秋の干し柿づくりは、この年も同じように実施した。前回の 5 組 18 人が、10 組 38 人に増えたことがうれしかった。前回来てくださった方々は、夏のイベントにも、知人とともに顔を出してくださり、今回も、知人を連れて来てくださった。“つながり”が着実に増えたことは確かである。この“つながり”を大切にしていかなければならないことは、4 人とも認識していた。

　後になってわかるのだが、俺たちは本当に大切なことをわかっていなかったと、金澤は思う。みんなも、何かしなければという焦りばかりで動いていたのだろう。でも、2 回のイベントを実施したことを無駄にはしたくない。
　このイベントを実施する以前、1 年以上も議論していて、向かう方向が何も決まらなかったことの理由が、後になって、少しずつわかってくることとなった。俺たちが話していたことは、地域づくりの本質をついてはいなかった、それがなければ、いつまで経っても、地域づくりに結びつかない、活動方針を変更し、時間がかかっても良いから、その本質を、地域で“共有”しなければならないとは、金澤も、ほかの 3 人も、まだ気づいてはいなかった。

## 第 4 章　専門家たちとの出会い

2 回目の夏のイベントの失敗を自覚して、少し落ち込んでいた折、河北が、近くの都市で開催される「地域づくりシンポジウム」のチラシを持ち込んできた。

開催の趣旨に“地域の持続可能性を高めるために、地域資源を活かす地域の将来像を描き、そこへ至る道筋をつくり上げていくこと、地域の人たちの合意を形成し、多様な関係者が楽しみつつ参画する地域づくりを進めていくことが求められています。持続可能な地域を実現するために、何にどのように取り組めば良いのでしょうか”とある。

“地域資源を活かす地域の将来像を描き、そこへ至る道筋をつくり上げていく”という発想は我々にはなかった。いや、地域資源を活かすことの重要性については、調査に行った先で学んだ。しかしながら、自分たちの地域の資源が何なのかについてはわからないままであった。地域の将来像を描くとはどのようにすることなのか、そこへの道筋とはどのようなことなのか、かつて、話し合いの結果を表にまとめてみて、真ん中が抜けていたことを思い出した。真ん中に据えた、将来発展方向、発展への具体策を記入できないままであった。

10 月半ばの土曜日、4 人そろって、シンポジウムに参加した。

### 地域づくりとは

基調講演に立った先生は、“地域とは”、“地域づくりとは”から話し出した。そんなことは、考えたことがなかった。誰も、この言葉についての確かな知識はなかった。

「地域とは、相対的に定められる、あるいは相対的に意識される一定の地理的範囲であり、経済・文化・歴史・社会等に関して何らかの共通性やまとまりをもつ範囲を言う」とのことであった。この地域という言葉が使われる時には、他地域との関係や、いくつかの地域によって構成される全体が常に意識されているそうである。確かに、近畿地域という言葉は、関東地域を意識し、あるいは全体としての日本・国土を意識して使われている。

「特定する地域の範囲を超えてつながるような場合には、広域や広域的という言葉を使う。それぞれの特長を活かしあうことが重要である。広域は、複数の地域の範囲を一体的に考える時にも使う」。なるほど、俺たちが行っているイベントは、主に大阪から来てもらうことを意図しているから、広域的ということになるのか。この辺りでは、大阪まで勤めに行っている人が多いが、職業の種類と量の多寡を考えれば、大阪と一体的に考えなければ、この辺りの生活は成り立たない。買い回り品を買うには大阪へ行かなければならない。大阪におんぶにだっこのような気もするが、大阪にはない自然や産品をこちらが提供しているから、特長を活かしあっているとも言える、と金澤は思った。

「その地域には、人々の多様な活動がある。人々は、生まれ、育ち、病み、老いる。住み、働き、学び、憩い、交わる。さらに、着る、食べる、買う、遊ぶ、表現する、感動する、創る、運動する、捨てる等々の活動を行う。人々のこのような活動を支えるために、地域には多様な機能や社会基盤が求められている」

「地域づくりは、地域において、“その地域が内包すべき機能や社会基盤を、そこに住む人々をはじめ多様な関係者が、主体的に充足していく、あるいは創りだしていく活動や行為”のことを言う」とのことであった。

“内包すべき機能と社会基盤”は、地域に必要な居住・福祉・医療、教育・学習、産業・雇用、商業・業務、交流・新価値創造、環境維持・管理等々の機能と、そのような機能を支える場としての社会基盤（施設）ということであった。なるほど、世代を超えて人々が交わり、信頼関係をつくるためには、交わりを演出・運営する人たちの働き（機能）があり、それを行う社会基盤（公園や公民館）が必要である。教育を担う人たちの働き（機能）があり、それを行う基盤として学校が必要である。

「地域が必要とする機能は、地域の人々自身が担い、あるいは行政機関や教育機関が担っており、

また、地域産業が担い、他地域の産業が担うこともあるとのことで、例えば、産直市場において地元産品を提供する人たちの働き（機能）は、地域の人々に愛されている地域産業である。コンビニエンスストアにおいて日常生活に必要な品々を提供する人たちの働き（機能）は、今や私たちに不可欠なものとなっているが、その経営主体の多くは他地域に存在する」

「そして、地域では、1)次世代に引継ぎ得る基盤（社会経済基盤施設、自然的・社会経済的環境、社会経済の仕組み、対外交流ネットワーク、知識・情報、文化など）が積み重なり続けていること、2)地域内の人々の自信や誇りが醸成されていること、3)他地域の発展に貢献している（他地域と活発な交流を続け、刺激し合い、融合し、新たな価値を創造し合っている）ことが必要」とのことであった。

「こんな小難しいこと聞いて、何になる？」。隣にいる能美が、横で小声でつぶやいた。

「いや、もう少し先まで聞いてみよう」と、金澤は返した。

そこから先は、いろいろなところで動いている事例がいくつも、臨場感たっぷりに紹介され、ここまでの話を理解させられた。

「なるほど、“内包すべき機能と社会基盤”を、俺らが創らないかんのや。紹介された事例にあったようにや。最初は、おもろないこと言うてはると思うたけど、いつも間にか、話に引き込まれてしもうた」。能美が、また、つぶやいた。

### 地域づくりにおける人の役割

4 人は、地域づくりに関する基本的な事項を、講演の冒頭で理解し、より興味をもって講演の残りを聞くことができた。そこでは、“地域発展に関わる人たちの役割と資質”が次のように紹介された。

「世間では、“バカ者・若者・ヨソ者が揃えば地域発展につながる”と言っているようだが、そんなに単純ではない、関わる人たちの役割と資質が重要」とのことであった。これも、次に書いておきたい。

「地域内で新しいことに取組む“先走りするバカ”を、旧来からの地域社会のリーダー、意識の高い住民、専門的知識やノウハウをもつ“よそ者”、行政スタッフが支援する仕組みが必要である。ここに、若い視点から地域の人々に刺激を与える“若者”も存在すれば、なおさらに地域活力が醸成されていくこととなる」

「各地域では、1)地域が抱える問題・課題に気づき、その解決に向けて、誰よりも先に動き出す“先走りするバカ”（先導者）、2)私心がなく、旧来からの地域社会の人々をまとめる能力をもつリーダー、3)何ごとにも興味をもって参加する、“何もしないことのリスクが、何かすることのリスクよりも大きい”ことを理解している、“地域全体の利益”を考える住民、4)その地域を気にかける“よそ者”（計画・自然・景観・産業・生活文化などに関する専門的知識をもつ地域プランナーや地域コーディネータ）、5)地域において信頼される行政スタッフが必要である」

「地域プランナーは、地域の将来に関するソフト・ハード両面にわたる計画をつくる人であり、地域コーディネータは、地域の将来像の確立とその実現の過程において様々な支援・調整を行う人である。このような人材の育成が急務である」。そう言われれば、このような役割を果たす人材は、我が地域にはいない。

そして、4 人とも、このシンポジウムに参加して、自分たちが“単なる先走りするバカ”であったことに気づいた。“先走りするバカ”を支えてくれる周りの人（旧来からの地域社会のリーダー、意識の高い住民、地域プランナーや地域コーディネータ、信頼される行政スタッフ、みんなに刺激を与える若者）がいなかった。金澤には、“単なる先走りするバカ”であった自分たちが、長距離走で最初は先頭を走るも、すぐに脱落していく走者とダブって見えた。

### 地域発展の構図

地域がどのように発展していくのかについては、次のような説明があった。

「まず、地域にどのような資源があるのかを、専門家や他地域の人に評価をしてもらい、情報を発信する必要がある。情報を発信すると、興味をもつ人が訪れてくれ、地域外からの様々な評価がなされることで、地域住民は地域に誇りをもち、さらに情報を発信する好循環が生まれてくることとなる」

俺たちは、地域にある何が資源なのかがわからないままにきている。資源を専門家や他地域の人に評価してもらうという発想もなかった。自分たちが資源と思っていないものでも、専門家や他地域の人には、何かに活かせる資源に見えるのかもしれない。

「一方で、地域外から人が来ることに対して、住民がマイナス評価をし、住民間での対立が生じる場合もある。そうした場合、地域での新たな活動が活力を減じることになれば、地域はユデガエル現象に陥る。いつ、何に、どのように対応しなければならないのかを、地域の人たちが認識できないことが多く、問題を認識していても、対応行動をとらずに、取り返しがつかない事態を招いている」

確かに、ほかから人が来ることに違和感を持つ人もいるのであろう。でも、その人たちが、何か新しいことに取り組んでいるとは聞いたことがない。我が地域の今の閉塞状況は、そんなところから生じているのではないだろうかと、金澤は思う。

「ユデガエル現象に陥らないように、地域外の人々との交流関係を大切にしなければならない。地域外の人々は、地域の資源を評価してくれるだけでなく、他地域の市場情報など地域には存在しない情報をもたらしてくれる。他地域の人たちと交流することが、気づきを生み、新しい知識の獲得につながる。対応行動を褒めてもらえれば、手探りで進めてきた“自分たち流の取り組みやもてなし”が正しかったことへの確信がもて、以降は、自信をもってコトを進められる。地域の自然的環境やまちの佇まいを褒めてもらえれば、あたりまえにあることで評価していなかった環境や佇まいに対する誇りが生まれる。他地域の人たちとの交流は、“地域人材の教育システムが構築される”ことであり、“人が活かされる“ことなのである」

金澤は、そうだ、俺たちが目指していたのは、他地域から来てもらい、交流関係をつくり、地域活力の醸成に結びつけていくことであったのだと、自分たちの活動の意味を確認することができた。

「そして、他地域の人たちが満足して落としてくれるお金は、地域での再生産に投入され、地域の活力醸成をさらに促すこととなる。うまくいけば、二地域居住の場のひとつとしてくれたり、移住してくれるかもしれない。このような動向は、若者やリタイアした人たちのＵターンの拡大へも結びついていくこととなる」

**地域発展の“踊り場”**

それから、地域発展の“踊り場”についての説明もあった。

「地域発展の途中には“踊り場”が必ずある。どのような活動であっても、“踊り場”はやってくる。この“踊り場”をどのように認識するのかが重要なポイントである。参加者の減少により活動が停滞したことによって、中心的役割を担っていたメンバーが意気消沈してしまえば、そこで終わりである。それまでに積み重ねてきたものが消失してしまう。このような事例は多い」

「“踊り場”は、活動が消滅してしまう予兆や前段階ではなく、次の発展のために不可欠なステージであると認識しなければならない。活動の意義を再確認する機会、活動方法を考え直す機会なのである。一緒に活動してきたメンバーに、今後の協力を改めて求める必要がある。新しいメンバーを探すことも重要である」

「しかしながら、活動している者には、それまでの活動の意義・成果・今後の展開可能性が見えない。ヨコから見ている者には、それが見える。地域の人たちの活動意欲が続き、力を発揮し続けられるように、積み重ねてきたものを評価し、伝える、また誉めることが地域づくりの専門家の役割のひとつとして重要である」

我々は、まだ２回のイベントしか行っていない。だから、踊り場を経験しているわけではないが、踊

り場は必ずくるのであろう。その時に意気消沈しないように、いや、2 回目のイベントで既に意気消沈に近い経験をしている、このことは覚えておこうと、金澤は思った。

基調講演の後は、実際に地域づくりの現場で活躍されておられる 3 人の方々による活動の紹介、パネルディスカッションが行われた。活動の紹介では、発想の段階から取り組みの過程、その結果として生まれた状況が紹介され、金澤たちは、ありがたい参考事例を得た。パネルディスカッションでは、地域づくりに取り組むことの意義を見いだした。

**地域プランナー・コーディネータ（地域 P&C）との出会い**

地域づくりシンポジウム終了後の交流会では、出会った地域づくりの専門家である地域 P&C の方々と話すことができた。このシンポジウムでは、参加して気づいたこと、問題意識や想いを、シンポジウムの内容を共有した人たちと確認したり、議論できる交流会という場が準備されていることがありがたかった。

なお、地域 P&C は、一般社団法人地域づくり支援機構が認定する資格で、同機構が開催している地域 P&C 養成塾を受講すれば、地域 P&C 試験受験資格を得ることができる。地域 P&C 養成塾は、2008 年から始まっており、今年が 5 年目とのことであった。既に 50 数名の方々が地域 P&C 試験に合格し、資格認定を受けておられ、その方々の多くは、地域づくり活動の支援に携わり、あるいは地域づくりを自ら実践しておられるとのことであった。シンポジウムを開催したのは、同機構である。

交流会には、50 名以上の参加があり、地域 P&C の方々もたくさん参加しておられた。4 人は、手厳しい洗礼を受けつつも、すばらしい学びを得ることができた。

**石川と金澤が得たもの**

石川と金澤は、3 人の地域 P&C とじっくり話すことができた。自分たちの取り組みを聞いてもらい、何が問題であったのかについて、地域 P&C に意見を求めた。

「それでは、単なる“先走りするバカ”やね」と言われ、能美はムッとした。関西人にとっては“バカ”という言葉はキツイ。関西では、“アホ”は、相手を否定しない、親しみがこもった言葉である。関東では、“アホ”と言われるとムッとするようで、関西とは逆であると聞いたことがある。

そこから、多くのことを指摘された。2 人とも、顔が強ばっていったが、我が町のユデガエル現象を喰い止め、子どもたちに引き継ぎ得る町をつくりたいと話し合ってイベントを始めたことを思い出し、笑顔を保つようにした。

ユデガエル現象は、シンポジウムの基調講演で学んだ。これは、経営学でよく使われる警句で、徐々に進む環境の変化に適切に対応していかなければ、突然、破綻が生じることを戒める言葉である。熱湯が入った鍋にカエルを放り込むと、驚いて飛び出し、火傷はするが命はなくならない。私たちも熱い湯に足を入れた時に同じ反応をする。一方、水を入れた鍋にカエルを入れて熱すると、カエルは、ゆっくりとした温度変化により、いつ飛び出すべきかがわからず、茹で上がってしまうという話である。実際には例え話で、科学的な根拠もないのであるが、経営学では教訓のひとつとして定着している。地域においても、このようなゆっくりとした変化（衰退）が進行しており、取り返しがつかない“ユデガエル現象”に陥るというのである。確かに、我々の地域も、いま手を打たなければならないことを強く認識した。

自分たちのイベントに対して指摘された問題点は、次のようなものであった。

1)地域において新しいコトを始めるにあたっての情報・ノウハウがなかった。地域活性化の参考事例はいくつか持っていたが、“始める段階”からの知見を持っていなかった。

2)コトに活かせる地域資源を発見しようにも、誰にアピールし得る資源なのか見当もつかなかった。そもそも地域資源はあるのか、周りを見回しても、いつも見ている何の変哲もない、あたりまえにそこにあるものしかないという意識であった。
3)コトを始めるにあたって、計画をつくるという意識がなかった。何を検討しておかなければならないのかという意識もなかった。
4)誰に何を、どのようにして伝えるのかのかがわかっていなかった。
5)来てくださる人たちに何を提供すれば満足してもらえるのかがわかっていなかった。
6)地域発展の構図への理解が不足していた。
7)地域における「合意形成のデザイン」への知識が不足していた。周りの声を聞く能力、わかりやすく伝える意識が欠如していた。
8)目標(数値目標を含む)を設定し、その達成のためにどのような手段・方法を投入すべきなのについて検討することを怠っていた。

2 人とも、最後は、親身になって率直に問題を指摘してくれる地域 P&C に感謝するともに、彼らの知識・ノウハウの豊富さに驚嘆した。ただし、彼らとて最初から多くの知識・ノウハウをもっていたわけではない。地域づくりについて学ぶ意欲をもち、多くのアンテナを立てて情報を集め、多くの経験を経て知識・ノウハウを得たそうである。

「ところで、みなさんは、地域づくりを学び始めてからどのくらいで、今、教えてくださったようなことを、ふつうに言えるようになられたのですか」と、金澤が問うた。

「人によって違うでしょうが、私の場合は、まず自分で小さな交流イベントを始めたけれど、うまくいかんかった。そこから、地域 P&C 養成塾で学んで、また、交流イベントに取り組んで 3 年。なんとか、それなりのものになってきて、今日、えらそうに言わせてもらいました」と、同年代と思われる地域 P&C が答えてくれた。

「先生から、何度も同じキーワードを聞いとって、それを使うてみよう思うて、使うてみたんやが、相手の反応が良くない。3 年かかってようやく、自分の言葉として言えるようになってきた」と、50 歳半ばと思われる地域 P&C が話してくれた。

石川と金澤は、地域P&Cと話すことによって、これまで自らが住む地域に関心をもたなかったこと、コトを始めるにあたってあまりにも知識がなかった自らを恥じたが、同時に、これから地域づくりを着実に学んでいけば“何とかなる”という気持ちを持つことができた。そして、“持続可能な地域づくり”を目指すことの想いを新たにした。

3 人の地域 P&C たちは、協力を約束してくれた。金澤は、一緒にイベントを行ってくれている侍たちと 2 人の女性に「元気を持ち帰る」ことができると感じた。

**能美と河北が得たもの**

一方の能美と河北は、同じテーブルをとり囲んだ 4～5 人の地域 P&C に想いをぶつけた。特に、能美に対して、地域P&Cの面々の指摘は手厳しかった。彼らが初対面の人に対しても手厳しいのは、自分たちが目指す“持続可能な地域づくり”に興味をもってくれ、ともにシンポジウムの場にいて内容を共有し、交流会に参加して意見を求めている者を仲間として受け入れ、これから一緒に地域の未来を創ろうと思ったからである。石川と金澤の場合も、同じことであった。

能美と河北への指摘は、次のようなものであった。河北からもらったメモに基づくものであるが、石川と金澤への指摘と重複するものは省いている。
1)「自分の想いをそのまま活動の目的に据えると失敗する」という意識がなかった。
2)自分の想いを前面に出せば、賛同してくれる人はいるが、動いてくれる人はそんなにいないことを

わかっていなかった。

3)“責任はもたないが運営に参加してくれる”という“ゆるい連携”をしてくれる人を見つけられなかった。なお、“ゆるい連携”をしてくれる人は、意外にも、知人をお客さまとして呼び込んでくれる人でもある。

4)最終像（運営のイメージ）を描く能力、計画をつくるという意識がなかった。その時、多様な視点から考える、多様な立場から考えなければならないことをわかっていなかった。

**か・き・く・け・こ**

4 人への以上のような問題指摘は、裏返せば、4 人にとっての今後の課題であり、4 人が地域での活動を進めるうえでの教訓でもある。問題指摘をする側にとっても、地域づくりの指導・支援や中心的役割を果たすなかで、同じような問題を経験・体験したはずである。それだからこそ、4 人を仲間として受け入れ、率直なもの言いをしてくださったのである。

そして、4 人には、地域 P&C から聞いたなかで忘れられない言葉がある。「か・き・く・け・こ」である。これは、「仮説を立て」「聞く周りの人に」「繰り返し」「検証しつつ」「ここからが始まり」の頭文字をとったものである。しかし、たいていは、「勝手に解釈する」「聞く耳もたぬ」「繰り言を言う」「ケツを割る」「これで十分と思う」という勝手な思い込みの「か・き・く・け・こ」であり、それでは、多様な世代がいて多様な人間関係があり、豊富な地域資源があるはずの地域での地域づくり活動の先導役としての役割を果たせないとのことであった。あの先生がいつも言われている言葉らしい。

確かにそうである。能美と金澤は、「仮説を立て」～「ここからが始まり」のサイクルを回し、仮説をより確かなものにしていくという意識がなかったことに思い至り、この「か・き・く・け・こ」を胸に刻むこととした。そして、地域 P&C たちが自分たちへの協力を約束してくれたこともあって、次に何かに取り組む意欲も湧いてきた。

**次のステップへ**

さて、金澤たち 4 人の挑戦は、本当に失敗であったのであろうか。ここでやめれば、それは失敗である。しかし、何かを今後に活かすことができれば、我々の最初の挑戦は、次に進むにあたっての教訓を得たこととなる。ひょっとして、少しのノウハウを得ているのかもしれない。

ひとりの地域 P&C が、「地域イベントが実行されたが、参加者数の目標 200 人に対して 100 人の参加しかなかった。これは失敗ですか、という質問に、どう答えますか」と、問いかけてきたが、石川も金澤も答えられなかった。

横にいた地域 P&C が、代わりに答えてくれた。「地域の中で、横から見ていて自らは動かない人に限って、このような質問をする。答は、“地域でのイベントに失敗という評価ワードはない”ということです。たとえ少しであっても、地域にとっての“ノウハウや教訓の獲得”が獲得できたことが重要なのであり、次への確かな礎を築けたことを喜ぶべきなのです」

我々は、誰も何も実行しない状況のなかで実行したのであるから、実行したこと自体に価値がある。少しの方々であっても来訪くださった方々の生の声を聞けたことは、“次に進むにあたっての仮説を得た”ことである。少しのつながりをつくれたことは、今後、その人たちを通じて何かを動かせることでもある。このような思いをもたせてくださった地域 P&C の方々に感謝であった。

計画をもたずに実行すれば現場が必ず混乱すること、多様な視点・立場から検討しておかなければ、当初勝手にイメージしていた状況と異なった状況になった時に対応できないことなどは、重要な教訓として残った。

### 地域 P&C 養成塾

能美と金澤は、6 月から始まる一般社団法人地域づくり支援機構の地域 P&C 養成塾への入塾を決めた。年 20 回の朝から晩までのプログラムに参加可能だったのは能美と金澤であった。

自分たちの第 3 回イベントは、やると決めていたので、正月から企画・計画づくりを進めてきた。もちろん、シンポジウム、交流会での学びを踏まえている。ただし、地域 P&C の言葉にあったように、学びを自分の言葉として使えるようになるのは、まだ先のことであろうと、金澤は思っていた。

この塾では、塾生の学びを先達の講師たちが導いてくれる。地域づくりの基本を教えてくれ、多くの事例を紹介してもらえる。このような座学に加え、グループで議論し“共働”する機会が多く、地域づくりの現場での研修があり、プログラムの進行とともに塾生が仲間となる。それに加えて、地域 P&C の先輩たちが何かと関わって親身にアドバイスを行ってくださる。

地域 P&C 養成塾の基本的なプログラムは、午前・午後の講義、その後のグループワーク、そして必ずと言ってよいほどに、飲み会がある。飲み会には、講師、塾長、塾頭、機構の事務局長、先輩 P&C も参加される。酒を全く飲めない方も、「こういう場でなければ聞けない話があるから」と、出席される。

### あの先生と酒席で

地域 P&C 養成塾では、最初に、昨年の地域づくりシンポジウムで基調講演をされた、あの先生が講義くださった。知識の紹介に終始するような講義ではなく、いくつもの事例も紹介され、説得力抜群で、得られたことが多かったと感じた。

ところが、能美も金澤も、記憶に鮮明に残っているのは、飲み会での話である。酒が好きで、一緒に飲むと、失敗談を楽しそうに話すことも多い、気さくなオヤジであった。先生は、自虐ネタと親父ギャクを合わせたようなことも言われる。

「地域へ寄せてもらって、活動している方々を励ましていたら、ハゲが増しました」と。事実、彼の頭頂部はとても寂しい状況にある。これにはクスっと笑ってしまう。大笑いはとれないが、必ず小笑いをとり、聞く者を話に引きずり込む。金澤は、誰よりも先に降雨を感じる能力ができている自分を認識してはいるが、こんなふうに自虐ネタにはできない、この先生には勝てないと思った。

先生は、最初から大学人であったわけではなく、50 歳までは民間人であり、地域づくりの現場にも身を置いていた経験を持たれる。地域の産業が“共働”して発展していく地域産業フォーラムという仕組みを、35 歳ぐらいの時につくられたそうである。この“共働”という言葉は、辞書にはない。辞書では、共働きとなっている。

ところが、先生によれば、「政策用語の“協働”は、さぁ皆さん協力して一緒に何々しましょうという感じで、何か安っぽい。“共働”であれば、共に何かをして、何かをした先にまた何かがある、何かが生まれる、相乗効果があるという意味で、私は“共働”にこだわる。“協働”という政策用語が出てくる以前から“共働”と言っている」とのことである。

それから、「質問をもらったら、あるいは間違いを指摘されたら、気づく機会、考える機会をいただいたと、感謝すべきである。相手がたとえ学生であっても」と言われる。金澤には、シンポジウム後の交流会で地域 P&C の方々に指摘され、冷静さを装うのに必死であったことが恥かしく思い出される。

あるいは、「最初に会った時に、6 時間以上の時間を共有すれば、以後、ずっと付きあえる。たとえ、その後 10 年間会っていなくても、このまえも会った人のように話せる」と言われる。一人ひとりと真摯に向き合い、一期一会を大切にせよとのことである。

### 住民と行政

ある飲み会の時は、住民による地域づくり活動と行政との関係に話が及んだ。

「地域は、本来、地域の人たちが創るもので、地域の人たち自身が、こうありたいという状況や将来

像をイメージすることが先である。それが公共政策として実行すべきものであれば、行政がその実現を代行することとなる」。

こんな意識はなかった。自分が卒業した町立小学校や町立中学校は、行政がつくったという意識でしかなかった。子どもたちのためにこんな学び舎が欲しいと住民が思い、言うから、その実現を行政が代行するというのである。金澤は、住民と行政との関係を始めて認識することとなった。

「君たちの活動は、行政に何も求めなかったことがすばらしい。ただし、今度こんなことするという情報だけは入れておけ。行政には何も求めるな。そのうち、何か支援しましょうかと言ってくる」

「そんなもんなんですか」

「そんなもんです。行政は様子を見ている。失敗するのを見ているわけではなく、成功することを願いつつ様子を見ている。うまく進みだせば、先導性・モデル性がある、住民から預かっているお金を投入する意義がある、さらに発展させようとして、何か支援しましょうかとなる」

「なるほど。我々がまずやることが重要ということですね。行政に期待せずに」

「でも、先生、実行のためのお金が不足している場合、行政に協力を求めてはいけませんか。私たちは、イベントの赤字を自分たちで穴埋めしてきましたが」

「行政は、住民の活動への助成金を準備しています。助成金は、自分たちの活動に私心がないのであれば、プレゼンテーションをして、堂々と勝ち取れば良い。行政は、新しい活動のモデルを求めている。成功例が地域で普遍化することを期待している。従って、審査基準は、先導性やモデル性があるのか、たくさんの参加があるのか、収支が適切・透明性があるのか、単発ではなく次への発展性があるのかなどとなっている」

### 0.1 カラットのダイヤモンド 100 個を楽しんでもらう

また、別の飲み会の時の話である。先生は、1990 年に大阪で開催された“国際花と緑の博覧会”の計画づくりに携わられたそうである。

「国から来られたエライ人が、目玉を探せ、大阪万博の“月の石”みたいな目玉持って来いと言うんです。こちらは、目玉はいらない、一つひとつの展示や会場空間の集合体が目玉である、ダイヤモンドは、10 カラット 1 個より 0.1 カラット 100 個の集まりの方が美しいと言った」

「10 カラットのダイヤも、0.1 カラットのダイヤ 100 個が集まったものも見たことがないですが、そんなもんなんですか」

「そう。私は、関西国際空港の周辺整備計画をやってた時に、ダイヤモンド商の方に見せてもらった。絶対に、集合体の方が美しい。地域づくりでも同じことです。10 カラットのダイヤなんか、あるはずがない。失礼な言い方になるが、どの地域へ行っても、0.1 カラットのダイヤは必ずたくさんある」

なるほど。そういうふうに考えれば、自分たちの地域にも、たくさんの資源があるのかもしれないと、金澤には思えた。

「それで先生、目玉はどうなったんですか」

「結局、ボルネオからだったと思うが、世界最大の花と言われるラフレシアを持ってきて展示した。直径 90cm もあったが、毒々しい赤色で、あまり人気が出なかった」

「先生の 0.1 カラットのダイヤ 100 個作戦はどうなったんですか」

「“来てくださった人が主役になれる”展示や会場空間を、計画の基本的考え方として入れた。例えば、花に囲まれた小さなステージをたくさん準備することとなった。みなさんそこで、楽しそうに写真を撮られ、弁当を食べておられた」

「私は、会社へ入って 2 年目だったと思いますが、当時つきあっていた今の女房と 3～4 回行きました。花に囲まれた舞台で、たくさん写真を撮りました」

「それから、会場に映画館を造ることでも、1,500 席もある大劇場ではなく、300 席の小劇場を 4～5 館という計画にした。お客さんに、4 つ 5 つの中から、好きに選んでもらうという考え方を出したんです。

お客さんにいくつもの選択肢を提供して選んでもらうこととした。選択肢がひとつしかなかったら、見た人の 50%しか満足されないかもしれない、選択肢を多くして、選んでもらえば、80%、90%の人が満足してくださるのではないかということやね。今あたりまえにあるシネマコンプレックスの原型です」

「映画も見ました。選べるのが良かったです」

「ありがとう。おかげで、花博には、2,300 万人以上が来場され、大成功となった。覚えておいて欲しいのは、エライ人は、目標入場者数 1,600 万人を“集める”ことを考えられたこと、私は、“楽しんでもらう”計画をつくった、この違いです。エライ人は、立場上、“集める”ことに重点を置かざるを得ないのでしょうが、重要なことは、“楽しんでもらう”ことです」

そうか、そうなのだ。我々は、集めることばかり考えていた。どうすれば、お客さまに楽しんでいただけるのかを考えていなかった、お客さまの立場に立っていなかったと、金澤は思った。それから、先生が使われた言葉、“来てくださる”、“してくださる”が、とても重要であると思った。主役は“来てくださる”方々、“してくださる”方々であることを胸に刻んでおこうと思った。

**イベントの事務局長の役割**

また、ある日の飲み会では、イベントの事務局長の話が出た。先生は、国際シンポジウムの事務局長を何回もやられたそうである。

「本番では、大会議場の最奥の、出口に近いところに座って、何もしない」とのことである。何もしないわけはなく、全体を見渡せる位置にどっしり座って動かないことが重要なのだ。実施計画を十分に練ったうえで、当日は、問題がないかを見ておく、何かあった時にスタッフが居所をわかっている、すぐに対策を指示できるということのようである。

「先生は、語学が堪能でいらっしゃるんですね」

「相手が言っている英語は、ほぼ理解できますが、会話の能力はありません」

「国際シンポジウムの事務局長ですよね」

「そうですよ。かっこよく言えば、Secretary General です。国連事務総長と同じ役職名称で、総責任者です。会話ができなくても、たくさんの方が助けてくださいました。英語もスペイン語も、中国語も助けてもらいました。相手の表情や言葉の抑揚から相手が言いたいことを汲みとる能力さえあれば、回りの方々の語学力に助けてもらって務めることはできます。ありがたいことです」

金澤は、とても重要なことを聞いたと思った。“後から全体を見ておく”、“助けてくださる方がたくさん”、金澤は、ゴールキーパーで、後から全体を見ることは、ある程度、身についている。経験をもっと活かさなければならない。そして、回りには、様々な思い・知識・ノウハウを持つ人たちがいてくださる。みなさんの能力に助けられつつ、みなさんに感謝しつつ、これからの歩みを進めようと思った。

8 月は、“重要伝統的建造物群保存地区”に指定されている町での実習に参加した。9 月には、“空き家がない・空き家が出ない村”へ宿泊研修に行き、そのリーダーを長年にわたり務めておられる方から講義を受けた。10 月には、棚田オーナー制の現場へ、また、農産物直売所へ見学に行った。

その後も、月に 2 回のペースで、2 講義＋ワークショップ＋飲み会があり、塾へ入ってから、多くのつながりができた。学んだことは多い。講義の中には、合意形成のあり方、イベントのつくり方、人に伝えるためのプレゼンテーション技術もあった。

この年は、4 月に NPO 団体の認証を得た。会員が 12 名となった。8 月のイベントは、約 400 人が来てくださった。イベントも 3 回目であり、それなりに運営上の手際は良くなってきた。3 名の地域 P&C の方々が手伝ってくださった。“つながり”が着実に増えている。これからも続けていく自信は生まれてきたが、その先に何があるのか、まだまだ、先が見えていなかった。

## 第 5 章　大フェスティバルへの展開

能美、石川、河北が、3 月半ばの休日に、金澤の家へやってきた。この 10 年間、金澤の家へよく集まっている。母と妻が、「たいへんやわぁ」と言いながらも楽しそうに、酒食の準備をしてくれている。今日は、春の山野草にはまだ早いが、フキノトウやセリぐらいはあるかもと期待している。

コロは老犬になって、走り回る元気さが衰え、臥せっていることが多くなったが、この 3 人が来ると、相変わらず、尻尾を振って近づいて行く。なでてやらなしゃあないかという態で、石川が相手をしてくれている。

今日は、何かの相談のために集まったわけではない。金澤たちが始めた活動の延長上に、新しいメンバーが集まり、組織だった動きができるようになり、今年度の基本計画は既に出来あがっている。実施計画の最終チェックは、来週、みんなで行う予定である。

### 最初から酒席

時刻は午後の 3 時すぎであるが、最初から酒の席である。石川が、出張時に買ってきてくれた石川県の地酒 2 本、“手取川”と“菊姫”、そして、つまみに、“ゴリの佃煮”と“フグの粕漬け”を、さりげなく置いてくれた。石川県への出張は、金沢大学医学部付属病院、金沢医科大学付属病院、石川県立中央病院などの高次医療機関とのつきあいだそうである。

「うれしいな。地酒と珍しい食いもんを持ってきてくれたんか」という能美の一言に、石川の話が始まった。今日は、「ハ・ナシ」ではないようだ。出張に行った先々で仕入れてくる一種のうんちくだ。

「“手取川”は、白山を源にする手取川の伏流水を使っとる。白山は金沢市内から見えないが、JR 北陸本線の小松から松任のあたりで、きれいに見えたことがあった。霊峰と言われるだけあって神々しい姿やった。あの辺りの人が崇めるのがわかるような気がした」

「その白山から流れ出す豊かな水が、加賀平野の入口にある鶴来というところから伏流水となって平野の地下を流れとる。加賀平野の中央あたりの山島村、今は白山市安吉町やが、山島村には、かつて 10 数軒の造り酒屋があって、酒造りの村として知れ渡っとった。今は 1 軒になってしもうたが、その蔵の、キレがあり上品な甘みを感じるうまい酒や。手取川は、急流で、昔、手を取り合わなければ渡れなかったことから名づけられたそうや」

「“菊姫”は、鶴来の酒で、兵庫県吉川町の特 AAA 地区の山田錦を使っとる。炭濾過をせず 1 年以上も寝かせとる、コクと旨味がうれしい酒や」

甘辛いゴリの佃煮、とてもコクがあるフグの粕漬けは、確かに、この地酒に合う。酒が進みそうだ。誉めると、こいつはまた調子にのるなと思いつつ誉めたとたんに、さらなるうんちくが始まった。

「このゴリは、清流の犀川でとったもんらしい。犀川は、金沢市内を流れとるが、高度成長期から日本中で川が汚れた時も、犀川は、ひどいことにはならんかったそうや。金沢市民が身近にある犀川に愛着をもって汚れが広まらんように、何に取り組んだんかは聞かなんだが、守ったそうや。手取川は、その頃、中流から下にかけて、農業排水やら工場廃水やらでムチャクチャになったらしいがな。アユが全くおらんようになったそうや。今は、アユが戻り、サケが遡上するまでにきれいになった」

「石川は、えぇこと言うとるやないか。良い水があることが重要や。川に愛着をもっとることが、川を守るんやな。俺も、似たような話を聞いたことあるぞ。滋賀県の野洲川の話や。昔は、農耕用の牛のエサを堤防へ採りに行っとった、子どもが川遊びに行っとった、集落へ生活用水を供給しとった野洲川が、水道ができ、牛が機械に置き換わって、子どもにも危ないから行くなと言い出して、そこへ農薬をバカスカ使い出して、その排水で汚して、そうなると、ゴミを捨てる場所になってしもうたそうや。農薬だけやなく、肥料を大量に撒いて、ここらの川が汚れたんも同じことや。愛着をもてる、生活と関わりがある川にせにゃいかんちゅうことや。俺らのイベントで、子どもらに川遊びさせたんは、そういう意味で良かったんや」。能美が話をとっていって息せき切ったように話した。確かにそうだ。水・川とのふ

だんの関わりが重要である。石川は、かまわず話を続ける。

「ゴリは、2～3cm ほどの小魚で、ハゼのような形をしておって、吸盤のような腹ビレで川底にへばりついて生活しとる。北陸から京都にかけての日本海側では、カジカ、ウツセミカジカなどの川のカジカ類をゴリと言うとるようや。犀川が生活用水で汚れ始めたことは、ゴリが採れなくなって問題になった。金沢ではゴリの佃煮、唐揚げ、ゴリ汁などが名物や。四万十川でもゴリの佃煮があるようやが、この辺りでは聞いたことがないな」

「フグを、あちらではをフクと言って、縁起の良い魚と見とる。フグは、下関のものとばかり思っていたが、天然フグの水揚げ第 1 位は石川県や。大阪のフグ料理屋は、下関直送と言っとるもんが多いが、獲れたのは石川県かもしれん。福井県ではフグの養殖が盛んで、こちらも下関へ送っているようや。ちなみに、春先にうまいサワラは、岡山へ良いものが集まるらしいな」

「そうすると、ブランドをつくった方が勝ちか。魚でもブランドがあったな。ブランドづくりは簡単ではないが、地域産品が世間から評価されるためには重要なことや。うちの町の地域ブランドを考えることも必要やな」と河北が言う。

今日は、酒を飲もうと集まったのであるが、これまでの活動を通じて、我々には、地域がどのようにあるべきかを常に考える力がついてきたのだと、金澤は、しみじみと思う。

石川の話は、まだ続いた。金沢に、“笑って死ねる病院”があると言う。

「ベッド数が 300 を少し超える、職員 430 人ほどの中規模病院や。自分たちの健康は自分たちで守ろう言うて、1984 年に地域の人たちがお金を出し合って、小さな診療所を開設したことがスタートで、名称は、公益社団法人石川勤労者医療協会城北病院や。差額ベッド代を取らず、生活困窮者には無料で診療しとる。患者の最後の願いを叶える病院として金沢では有名や。“桜を眺めたい”、“もう一度家に帰りたい”、“カラオケに行きたい”というような、余命わずかな患者の願いを、人手不足の現場をやりくりして実現しとるそうや。例えば、肺気腫で余命数日の患者が手間ひまかけて造った庭を見るため、ボランティアも含め 6 人がかりで自宅へ連れて行くようなことまでやっとるらしい。こんな行為は診療点数にはあてはまらんから、病院の収入はゼロやが、スタッフは、患者が笑顔でいられるようにと奔走するらしい。今は、できるだけ長期入院させたくないというのが普通の病院やが……」

「地域に、そんな病院がなけりゃいかんのやろな」

「簡単ではないが、自分たちの健康を自分たちで守るために、地域の人たちがお金を出し合ってというところからスタートしているのが凄い」

「30 年以上も経っとっても、創設の精神を引き継いどるんやな。“みんなのために”ということで創った組織が、いつの間にか、自分の図体を維持することを中心にするようになってしもうとる世の中やのに。感心するわ」

「そう言や、こんなこと聞いたぞ。“みんなのために”が設立理念にあるはずの組織の宅配サービスを利用しとられるおばぁちゃんの話や。その娘さんから聞いたんやけどな」と、話が半分横にそれていくが、ここは聞くとしよう。

「“みんなのために”が設立理念にあるはずの組織とか、わざわざ回りくどい言い方するんやな」と、河北がツッコミを入れるが、能美は「まぁえぇやないか」と、小競り合いにはしないようだ。

「ひとり暮らしのおばぁちゃんが、若いにいちゃんが宅配に来てくれ、親切にしてくれる、親身になってくれると勝手に勘違いするそうやな。そして、何でもかんでも注文してしまうらしい。冷蔵庫にギチギチに詰まっとって、全部出してみたら、奥のほうは消費期限切ればっかりになっとる、営業成績を上げるために、どう見ても食べきれん量の注文を平気で受けとるとしか考えられへん言うて怒ってはったんや」

「そうか。若いスタッフに、お客さんの状況を見て、必要量を推し量る能力がないちゅうことか。設立理念が若いスタッフに浸透してないちゅうことか」

「それが問題やねん。俺らの活動は、最初は理念を立てられなかったが、本質は“地域のために、

みんなのために”やったと思う。理念ちゅうもんを教えられて、それを共有せなあかんことも教えてもろうて、そこから活動が広がっていったんやないか」と言う。今日の能美は、頭が冴えている。

石川は、よほど金沢市や石川県に縁があるようだ。かと言って、大阪や京都の医療機関とのつきあいを怠っているわけではない。

「石川が石川県に縁があるんは、少しうらやましいな。なんか、機嫌よう行っとる感じや。俺は、金澤だが、金沢市には縁がない」

「そうでもないんやないか。実は、この 4 人の名前は、石川県の地名にあるんや。能美は能美郡や。これは“のうみ”じゃなく“のみぐん”と言う、河北は河北郡や。これも“かわきた”じゃなく“かほくぐん”と言うんや。4 人とも縁があるちゅうてもえぇかもしれん」。こじつけ的なものであるが、なぜか皆、うなづいてしまった。こうなると、石川がさらに調子にのる。

「東京で銀座のクラブへ行くと、必ず出身地を聞いてくる。話の糸口を見つけるためやろな。うちの東京支社に金沢出身者がおって、そいつが、ホステスが石川県も金沢市も知らん言うて嘆いとった。今は、北陸新幹線ができて、知られとると思うが、銀座では、金沢は、横浜の金沢区や金沢文庫の方がメインキャストやったと」

「何の話や。話の先が見えん」

「ちょっと待ってくれ。金沢の飲み屋へ 4 人揃って行くとおもろいな、話がはずんでえぇんちゃうか言おう思ったんや」

「なるほど」と能美が言ってしまい、石川の上機嫌な話が続く。

「金沢の近くに、能美郡白峰村ちゅうところがあってな。今は、合併しとって、白山市白峰やが。そこの出身者が金沢の学校へ転向してきて、“のみしらみ”とイジられたそうや。芭蕉の句にあるやろ、“のみしらみ馬のしとする枕もと”に引っ掛けたイジリや。ついでに、石川県の名称の由来も言うとくぞ。県ができた時の県庁所在地が石川郡やった。その石川郡には、さっき言うた手取川が流れとって、石が多い手取川の通称は石川やった」

「おいおい、もう酔っとるんか。それなりにおもろいが、話がバラバラになってきとるぞ」

今日は、いつもの、かって金澤が勉強部屋として使っていた離れにあるテーブルではなく、居間のゆったりとしたソファに座っている。いつもは、出された言葉やアイデアを書きとめるためにテーブルの方が都合が良かったが、今日は、メモをとるつもりはない。

### 毎回 3 万人が来てくださる大フェスティバルへ

石川のうんちくがようやく一段落して、能美がしみじみと言う。「もう丸々10 年になるな」。

金澤は、自分が年をとったという実感はあまりないが、息子は去年、就職した。家から県内の大学へ通っていた娘も既に仕事に就いている。親父は 81 歳になる。10 年という歳月は、家族の状況を変えてしまうのだ。ほかの 3 人の家族も、同じような状況になった。

「早いな。10 年前、俺らは、何もわからんまま、何とかせにゃならんという一念だけで集まったんや」

「何もわかっとらんかったな。最初のイベントは失敗やった」

「そや。ほんでも、何か少し、達成感があったな。それがあったから、2 年目もやれたんかな」

「俺も、そう思う。地域で何も活動しとらんかった俺らが、俺ら自身で考えてやったんや。それが、少しの達成感やったんやろな」

「2 年目は、失敗を実感したな。1 年目の反省からいろんな工夫をしてやっても、来てくれる人の数があんまり増えんかった」

「4 人で話し合いながら、先進地にも寄せてもろうて……、行く先が見えへんから、あせって、やってまえちゅうような感じで、やってみた」。1 年目のイベントに来場くださったのは 150 人、2 年目は 250 人であった。

「中心メンバーには、木工所の志賀、椅子づくりの横山君、農業の津幡君が入ってくれて、“7 人の侍”やちゅうて盛り上がった。2 年目の企画段階から、女性 2 人が加わってくれはった。みなさん、今も熱心にやってくれてはる」

「2 年目のイベントの失敗の後、秋に“地域づくりシンポジウム”に参加して学んで、地域づくりにタッチしてはる人らと知り合いになって、いろいろ指摘された。そして、その人らに勧められた地域プランナー・コーディネータ養成塾へ、次の年の 6 月から、能美と俺が参加して、いろんなことを学んだ。そこからやな、合意形成、地域の若者らとの関係づくり、イベントのやり方やらを考えるようになった」

「4 年目に NPO を設立して、みなさんの協力のおかげで、来てくださる人が増えた」

「5 年目やわな。俺らのイベントの運営メンバーがさらに増えて、出店くださる方々が増えた。そうすると、来てくださる方々が 1,000 人を超えた。150 人、250 人、400 人、500 人の次がいきなり 1,000 人を超えて、てんやわんややったけど、うれしい悲鳴やった。余分に準備しとったんやけど、売り切れ続出で、お客さんに迷惑をかけたな」

「車が 300 台以上で、駐車場の空き待ちの車で道路の渋滞を引き起こしてしもうた」

「会場内の動線、トイレ、スタッフの配置、出し物、もちろん駐車場問題もあって、それまでとは全く違ったな」

「そうや。そして、こんなに来てもらえるんやったら、この会場だけでは無理やな、どうしよう言うとったタイミングで、“うちらでもやりたいから教えてくれ”言う人が来てくれはった。“ぜひ一緒に”と歓迎したもんな。そしたら、ひと月もせんうちに、やりたいとこが 3 地区も現われた。うれしいことや。“みんなでやりましょう”、“日を合わせてやりましょう”となった」

「“あこもやるらしいぞ、うちらもやろうや”となったらしい。みなさんが秘めとったエネルギーがバンとはじけた。そっからは、相乗効果いうんか、今では、5 月と 10 月に、それぞれ 3 万人も来てもらえる大フェスティバルへ発展した。会場は 12 ヶ所にもなった。凄いことになった」

「6 年目を 5 地区でやるに際しては、いろいろあったな」

「大転換があった。10 月に、5 地区の代表者や世話人に集まってもろうた。そん時に、“うちらは高齢化が進んどって、動いてくれる人が年寄りばかりで、暑い 8 月は無理”ちゅう話が出てきた」

「そうやったな。俺らは、みんなで日を合わせて、あのあたりで何かやっとるぞと思うてもらえるんが重要や、何月でもえぇと思うとった」

「うん。今までどおりの 8 月、それから 5 月、10 月と、3 案が出てきた。5 月はほかの地域でもいろいろやっとるから競争に負ける、10 月はなんたらかんたらといろいろあったんや。ひとしきり話し合ったところで、金澤が“5 月も 8 月も 10 月も全部やりましょう”と言うたんや。それで決まった」

「俺は、その会合に出てへんから知らんかったが、ようまぁ、そんな無謀な提案したな。今となっては、それで良かったんやが」

「無謀な提案ちゅうより、あの会合は、みなさんの意気込みが凄かった。その雰囲気が、俺にそう言わしめたんやろ」

「おいおい、雰囲気が言わしめたやと、かっこえぇ言い方してくれるもんやな」

「かっこえぇかどうかは別にして、なぜか、言うてしもうた。そしたら、みんなが“うおぅ”と声あげてくれて、それで決まってしもうた。もう誰も後に引けんことんなったんや」

「そうやったな。5 月だけの会場があってもえぇ、8 月だけでも、10 月だけも OK やちゅうて合意したんや。そしたら、みなさん、それぞれの地区へ持ち帰ってくれて、どこも、5 月も 10 月もやるちゅう結論を持って来られた。びっくりした。エネルギーが溜まっとったんや。俺らだけは、8 月のイベントも続けとるが、ほかの地区から、8 月に手が空いとる人が応援に来てくれはる状況になった」

「毎年々々、参加する地区・会場が増えて、今に至るや。12 会場で、5 月・10 月とも、来てくれはる人の実数が各 3 万人の大フェスティバルや。凄いことになった」

「それぞれの会場の主催者がバラバラやちゅうんも凄いな。地区の自治会が主催してはるとこ、有

志が主催してはるとこ、統一性がないことが凄い。12 会場の連絡協議会ちゅう組織はできとるが、基本的には、それぞれの会場がそれぞれの主体性でやっとる」

「俺らが“有志スタイル”で始めたもんに、ほか地区から参加くださった。以来、主催者の立場がどうのこうのちゅう話は出とらん。有志がやっとるから、地区がやっとるからちゅうことは、どうでもえぇんや」

**夏のイベント**

「8 月のイベントは、根強い人気があるな。いつも 1,000 人ほど来てくれはる。牛糞と杉チップの堆肥づくりする人が増えて、カブトムシの産床がたくさんできとる。8 月は、カブトムシ、ものづくり体験、野菜販売の 3 本柱のオールドスタイルで続けとるが、続けられとることがうれしいことや。秋の終わりの干し柿づくりも、いつも数十人が来てくださるから続けとるもんな」

「オールドスタイルという言葉は、なかなか良いな。川遊びとハイキングは追加しとるがな」

「5 月・8 月・10 月の 3 回はけっこうキツイが、一緒にやってくださる人が増えとるし、毎回来てくれはって親しくなっとる人も多いから、楽しみの方が多いな」

「フェスティバルのそれぞれの会場の産品市場がどんどん充実してきとるから、それに触発されて、俺らの 8 月も、産品の種類を増やしてきたな」

今、夏場の野菜として、丸ナス、キュウリ、トマト、オクラ、カボチャ、マクワウリ、ヒモトウガラシ、サヤインゲン、シシトウ、キャベツ、レタス、ネギ、アスパラガス、カリフラワー、ブロッコリー、ピーマン、サヤインゲン、サヤエンドウ、エダマメ、ニンジン、ダイコン、トウモロコシなどを並べ、果物は、ブドウ、イチジクを提供している。野菜は、ていねいに特徴を説明し、調理方法を紹介している。

**大フェスティバルの裏方**

金澤は、毎回 3 万人もの人が参加くださる大フェスティバル、凄いことになったという話になった時から、そんなふうに簡単に言ってほしくはない、いや、誰も簡単に言うはずはないのであるが、裏方で苦労してくれている人たちのことを思っていた。

5 月と 10 月の各 2 日、それぞれ 3 万人の来場は、1 日あたり最大来場数が 2 万人にもなることがある。12 ヶ所の会場は、来場数が 1,000 人程度のものから 8,000 人のものまで様々である。小学校、市立文化会館、県営公園、市営スポーツ公園、県立歴史資料館を使わせてもらっている。

小学校は 8 校を使わせてもらっているが、うち 4 校は廃校後に、体験交流施設、工場など別用途に転用されたものである。小学校は、町村合併前に合計 8 校あったが、その後の統廃合により、今は 4 校になっている。

問題は、1 日あたりの車が最大で 6,000 台を超えることである。この駐車場をどこで確保するのか。ピーク率を 50%と想定した場合、学校の運動場を借りて、1 校あたり 400 台が限度だから……、あそこの空き地も駐車場として借りられないか……。子どもたちが通っている学校では、駐車場として使った後のグラウンドの整地作業が、フェスティバル 2 日目の午後 3 時ころからの重労働である。

食事は？ トイレは？ 雨が降った時は？ 早めに売り切れ続出の時は？ 最初から 3 万人の来訪ではなく、毎年増え続けて、今が 3 万人なのであるが、実施計画をつくる裏方の仕事は大変である。

それから、警察との調整は簡単ではない。こちらの想定以上の箇所に、「ガードマンを配置せよ」と指導される。そんなお金がどこから出てくるのか。「車のルート、人の動線をこんなふうに分けて、ここは、ガードマンがいなくても……」といったような調整が続く。事故対応、喧嘩や盗難への対応など、いろいろとある。

さらには、ケガ、脱水症などでの救急車の依頼、イベント会場で爆発があった時にどうするのか、食品衛生上の問題での保健所との折衝、警備会社との折衝、車椅子の方への対応……、やらなければならないことは山ほどにある。

毎年、計画を練って、準備をしてくださる裏方の方々には、とても感謝している。また、駐車場での

車の誘導と駐車場利用後の整地作業、会場案内などに多くのボランティアの方々が来てくださり、救護所には、看護士を退職された方が何人も常駐してくださるなど、とても助かっている。
　幸いにも、昨年までのフェスティバルは、運営に支障をきたすほどの雨が降ったことはなく順調であったが、駐車場でのトラブルは毎回数件が発生している。脱水症状を訴える人や転んで怪我をする人があり、救急車を要請することもある。これらは、現場のスタッフが適切に対処してくれ、大ごとにならず、助かっている。

　金澤は、中高校時代、ゴールキーパーであった自分をも思いだしていた。ゴールキーパーは、後から見る陣形が、全体としてうまく機能していないと不満であり、バックスやミッドフィルダーに指示を出す。フォワードにまで大声で、自陣へ戻ってこいと命令することもある。そんなことを経験してきたからか、イベントの裏側までの全体が気になる。若い人たちの自主性・主体性に期待しつつも、時々、計画会議や現場スタッフへの事前説明会に顔を出し、アドバイスしてきた。
　なお、金澤は、高校時代は控えに甘んじたが、試合に出ていないわけではない。チームとしては、仮に正ゴールキーパーが怪我などで試合に出られなくなった時に困ることになるから、控えの選手にもレギュラーと同等に近い経験をさせておかなければならない。このため、練習試合の半分近く、公式戦の 3 分の 1 は試合に出ている。こうして、後から冷静に全体を見て、指示を出すスタイルが身についた。
　能美は、フォワードらしく突進して、地域内の新たな動きを見つけてきてくれる。ミッドフィルダーの石川は、縦横無尽に動き回って、ほかの地域から有用な参考事例をもってきてくれる。時には、若い人たちのトラブルを収めてくれる。センターバックの河北は、サイドバックのミスをカバーするような、実施計画のどこかが弱い時に指摘・指導することが得意である。この 4 人の組み合わせは、どこからどう見てもすばらしいと思える。

「ところで、金澤は、フェスティバルの中でフリーマーケットやることでは、苦労したんやな」
「別に苦労ではない。若い人らでは埒があかんかったんで、出て行ったんや」
「何があってん？」
「最初のフリーマーケットの時や、今年はフリーマーケットも、と新聞が書いてくれたやろ。それを見た警察から、呼び出しがあったんや。古物商の免許を持っとるんか、盗品が売られとったら犯罪や、どないすんねんちゅうことやった。フリーマーケットでそんなことがあるんやて、誰か知っとったか」
「俺は、そもそも、フリーマーケットへ行ったことないから知らん」
「若い人は、既に出店者を集めとるから、今さら中止できん言うて、オロオロしとったんや」
「ほう、そんで、金澤大先輩のお出ましか」
「ちゃかさんでえぇ。警察に、まず、“人と人とのつながりづくりのためのフリーマーケット”やいうことを話した。“商品取引ではない”ことを強調した。えぇことしようとしとることは理解してもろた」
「それで OK になったのか」
「まだや。いろいろやりとりがあったんやけど、結論は、美術品・骨董品の類を持ち込んどる人の古物商免許を確認すること、ほかの出店者には 1 万円以上のものの販売を控えてもらうちゅうことで、なんとか決着できた」
「実際の出しもんは、タダのもんから数千円までのもんしかないわな」
「ふたを開けたらそんなもんや。誰も金儲けできる思うて出店しとらんかった。みなさんが楽しんでくれてるのがうれしいわな。警察が今も何らかの指導をやっとるかどうかは知らんが、警察の立場もわからんことはない。そんなことがあったんや」
「重要なんは理念やな。“人と人とのつながりづくりのためのフリーマーケット”か、うまいこと言うたもんやな」

### みんなが主役

「いろんな団体が、誰が主役やちゅうことなしにやってくれとる。みんな主役や。凄いネットワークになった。地域の力が合わさると、こんなにも凄いことんなるんや」

「地域の人たちの潜在能力が凄いちゅうことも、ようわかった。能力を発揮する機会がなかったんやな。能力を活かす方法がわかっとらんかったんかもな。いずれにしても地域の力が合わさることは重要なことや」

「地域団体みんながフェスティバルの仲間や。新しくできた団体だけやなしに、商工会、自治連合会、老人会、婦人会、社会福祉協議会、観光ボランティアの方々、歴史研究会の先生方…」

「農協も、最初は渋っとったが、地域と産品の知名度を上げることが重要や言うて、協力してくれることになったもんな」

「大阪から出店してくれとる人もいてはる。うちは、よそもんを排除せんもんな。来てくれはることがうれしい思うとる」

「みんなで力を合わせて、春と秋の 2 回の大フェスティバルや」

「この地域の産品が全部出とる。昔の農林産物の集散地の時もこんな感じやったのかな」

「それは、ちょっと違うやろ。1960 年代の後半頃から大規模流通業が全盛の時代になって、それを引っ張ったのがダイエーやが、農家が農協を通じて大都市へ出荷することがあたりまえになって、地域の中で、何が作られとるんか、誰が何を作っとるんか、ようわからんようになった。それが今は、こんだけのもんが地域で作られとるのがようわかる。凄いな」。河北よ、お前もうんちくを入れるのか。

「運営者側のみんなが主役であるだけやないぞ。うちのフェスティバルは、来てくださる方々も主役や。来てくださる方々に主役になってもらえるような設営や運営をやっとる」

「そうや。皆さんが楽しそうに参加くださっとる」

「そして、ネット上へ写真や動画を掲載してくださる。楽しいからネットへ上げる。それが拡散して、興味を持ってくださる方、来てくださる方が増える」

「口コミを忘れたらいかん」

「当然、それは重要やと思うとる」

参加くださる方々が着実に増えているのは、運営側のみんなが主役、参加くださる方々が主役、この相乗効果によるものであろう。

あの先生から、集めることではなく、“来てくださる方々が楽しめる”空間を提供することが重要と、飲み会の席上で教えてもらったことが思いおこされる。

### フェスティバルの内容

「大フェスティバルは、地域産品の市場ちゅうだけやない。それぞれの会場が地区の特徴を活かして工夫してくれとる。山沿いには山沿いの特徴がある、平地は平地の特徴を出しとる、川沿いは水を使うとる、歴史の舞台やったところはそれを活かしとる」

「どこへ行っても、全会場とそこから行けるハイキングコースやら名所なんかを詳しく紹介したパンフレットがあって、みなさんそれを持って回遊してくれはる。春も秋も、実数は 3 万人やが、会場ごとのお客さんを合計したら、6 万人以上にはなっとるんやないやろか」

「パンフレットは 1 万部を準備しとる。A4 で 16 頁もある立派なもんや。喜んでもらえとる。すぐになくなっとる」

「どこの会場がメイン会場やとはいっさい言うておらん。12 会場すべてが、それぞれ特徴を出して、メイン会場になっとる。会場を起点・終点として歩くコースがあったりするから、町全体が会場や」

「会場が起点・終点になるハイキング、全会場を 2 日間の会期中に歩いて回るスタンプラリー、歴史講座と現地見学、おばちゃんたちの伝統料理のブース、フリーマーケット、芋ほり体験、トラクターの試乗会、写生大会、風景写真を撮ってきてくれた人たちの写真展、山野草の料理教室、ジビエ料

理の試食会、ものづくり体験教室……、何でもある」
「まだ忘れとるぞ。大きなステージを造って、バンド演奏、高校生のブラスバンド演奏、ダンスショー、ここらの踊り、のど自慢、クイズ大会、ビンゴゲーム、ここらの歴史に関する朗読なんかもある。他にも、地元素材を使ったジャムづくりやお菓子づくり体験なんかや」
「まだまだや。大道芸、ストリートピアノ、即席でチームをつくっての綱引き大会、けん玉大会、椅子取りゲーム、輪投げ大会、丸太切り大会、チェーンソーアート体験、竹炭の販売、竹炭で焼いたミニステーキと野菜、防災教育ゲームをやっとる会場もあるぞ。ここんところ災害が多いんで、子どもと大人が一緒にゲームで遊びながら防災を勉強しとるんは重要なことや」
「けん玉は、ワールドカップがあるそうや。この町に、ワールドカップで 2 位になった高校生がおって、技を見せてくれとる」
「輪投げなんか単純なもんやと思うとったが、人が群がっとるな。幼児向けのもんから、大人向けの巨大な、複雑なもんまであるな。商品つきのゲームやから良いんかな」
「ゲーム言うたら、頭を使うゲームもあるぞ。囲碁、将棋、チェス、オセロ、五目並べ、双六、大きなカードを使うたババ抜き、七並べ……。わざわざ青空の下でやらんでもえぇやないかと思うけど、皆さん夢中になっとられる」
「県立歴史資料館には、けっこうゆったりしたスペースがあるから、そこで、工房街道フェアをやっとられる。県東部に工房を持っておられる、ものづくり作家さん 30 人が作品展示即売会とものづくり体験をやっとられる。いっぺん見てきたんやが、凄い作家さんがたくさんおられるちゅうことがわかった」
「スポーツ公園では、とび入り運動会をやっとって、これがけっこうな人気やな。種目は、パン食い競争やら借りもの競争、知らん人同士で組む 5 人 6 脚、これも知らん人同士がチームになる綱引き大会、ほかにも知らん人同士でチーム組むいろんなレクリエーションスポーツなんかをやっとる。ちょっと覗いた時に借りもの競争やっとって、借りものの種類を放送するんやが、そん中にパンツがあって、会場中で大爆笑やった」

「ものづくり体験教室は、志賀が、俺らの最初のイベントの時からずっとやってくれとる。横山君も続けてくれとる。志賀は、子ども向けの竹トンボ、コマ、大人向けの桶づくりをやってくれとる。横山君は、横山君じゃなく、もう 45 歳のはずやから横山さんやな。彼は、作っとる椅子が有名になって、相当に忙しいようやが、今も出てきてくれる。出し物は幼児用の椅子や。えぇかげんなもんやったら危ないから言うて、しっかりしたもんを作らせとる」
「2 人とも、知り合いの職人さんらにも声かけてくれて、全部で 7～8 人が来てくださっとる。体験の種類が 15 かそこらもある。ありがたいことや」
我々の 5・10 月のフェスティバルの出しものも、8 月のイベントと違って多彩である。販売は、野菜、漬物、ジャムなどがあり、体験は、木工を中心に 10 種類以上のものづくり体験教室、伝統料理づくり体験教室、ゲームは、綱引き、輪投げなどがある。食は、この地域の昔からの団子類、タカナなど野菜の古漬けを入れたおにぎり、地鶏の卵を使った卵かけご飯とハクサイ漬け、地元野菜をふんだんに使った焼きそば、お好み焼きなどがある。ハイキング 5 コースの起終点にもなっている。ハイキングから戻った人たちへは、みたらし団子を 5 円でお渡ししている。
「卵かけご飯なんちゅう単純なもんが受けるかな思うたけど、これが大人気やな」
「食いもんも、何でもある。さっき言うた、おばちゃんたちの伝統料理のブース、丼物、焼きそば、お好み焼き、野菜の煮物、牛やシカのミニステーキ、みたらし団子、アワ餅……」
「基本は、地元の食材を使うてもらうことや。みなさん、地元食材率 50％以上を合言葉に工夫してくださっとる。2 日間で 3 万人の胃袋を満たすちゅうのは大変や」
「どこの会場も工夫を凝らして、特徴あるもんを出しとるな。それと、どこも“参加性”を重視しとる。来てくれはった人“みんなが主役”になって参加くださっとる」

「“参加性”と“みんなが主役”は、このフェスティバルの出しものづくりの最重要テーマや。どの会場も、それにこだわっとる。ほんで、フェスティバルのメインテーマが“つながり”や。実際、ほかの地域から来てくれはった人たちと地域の人との“つながり”ができとる」

「運営ボランティアの人たちがどんどん増えてくださって、ありがたいな。中には、大阪から運営ボランティアで来てくださる人もいらっしゃる。スポンサーもどんどん増えて、おかげで、新しい出しものもつくれとる」

「ハイキングは、コースがいくつもある。それでも、グループに分かれてもろうて、時間差で出発するくらいに人気や。ここらの景勝地や名所旧跡を知ってもらうことにもなっとる。花めぐりのコース、古民家めぐりのコースもある。そんだけやない。“田んぼの間の細い農道をのんびり歩くコースが気持ち良い”言うてくれた人もいてはった。地元の人間には、何のおもしろみもないところやのに、それが地域の資源やったんやと、初めて気づいたわ」

「みなさんが楽しんでくれはるおかげで、ここらは資源だらけちゅうことが、ようわかった。やり始めた頃は、そんなことに気づかんかったもんな」

「ここらは、花も多いし、ハイキングはええな。5 月は、レンゲがまだ残っとるし、フジやシャクナゲ、ボタンもええな。ハナミズキ、ハナショウブ……。ササユリは 6 月か。花は、これくらいしか知らんが、ようけあるんやろ」

「カザグルマを忘れとるやないか。テッセンと同種やが、テッセンは花びらが 6 枚、カザグルマは花びらが 8 枚や、テッセンは中国原産でヨーロッパに渡ってクレマチスと言われるようになったんやが、カザグルマは日本原産や。うちの町に自生地があって、国の天然記念物やぞ」

「そうや、子どもの頃、風車やいうて遊んだ」

「ちょっと待て、俺らが生まれる前から天然記念物やぞ」

「カザグルマの自生地のもんをとったらあかんが、うちの庭にあったもんで遊んだ。最近、見てへんな。どうなったんやろ。庭の手入れ、放ったらかしや」

「5 月は、テイカカズラもある。キョウチクトウ科のつる植物や。花びら 5 つで、はじめは白い。しばらくすると淡い黄色になって、ジャスミンのような芳香がする。名前の由来は知っとるか。テイカは、百人一首で有名な藤原定家のテイカや。藤原定家が、死んでからも、愛した式子内親王を忘れられへんで、カズラに生まれ変わって彼女の墓にからみついた。それがテイカカズラや。うちの庭には、文筆家の先生に分けてもろうたもんがある。立派に生長しとる」

「わかった。わかった。カザグルマもテイカカズラもある。石川さんよ、解説ありがとう」。こらこら、能美君、飲んでいるからと言って、ちょっかい出すような言い方をするなよ。お前と河北の小競り合いには慣れているが、矛先を石川へ変えるな。

「花だけやのうて、植林してへん里山がけっこう残っとるわな。そこの新緑をゆっくり眺められるんがええと言うてもろたわ」

「歴史講座も人気があるな。地域の歴史家の人たちが熱心に話してくれてはる。有名な先生まで喜んで講義に来てくれてはる。特に 60 歳代以上の人らに人気がある。現地見学がついとるから、神社やお寺さんも喜んではる」

「芋ほりやトラクター試乗は、子どもに人気や」

「写真展は、こちらは白い壁やスクリーン、電源をいくつか準備しとるだけや。自分でタブレットと小型プロジェクターを持ってきて映さなならんのやが、それでもたくさん参加くださる」

「俺は、まだ行ったことないんやが、2 時間ごとに、10 人づつ出品者が代わる写真展やな。参加くださる方が多くて、会場を増やすことになったな」

「この写真展へ出すために、毎月、この地域へ通って、地域の表情の移り変わりを撮影されとる人

もいてはるそうや」

「その写真は、こっちの人にとって、地域再発見になっとる。うちらの地域がこんなに美しいんやと喜んでくれてはる」

「移住相談や子育て相談コーナーまである。こちらへ移住してくれた人が都会の人に、移住についてアドバイスし、自然豊かな場所での子育てを紹介してくれとる」

「来てみれば、何かに出合えるという期待感も膨らんで、大勢来てくれてはるんかな」

「何でもありはあかんと思うとったけど、来てみたら、いろんなもんに出会えるんが良いんかもな」

**ネットワーク型コミュニティ**

40 年も前になるであろうか。この町に、住宅団地ができた。大阪へ勤めている人たちが入居した。人口が増え、地域の活力が増すだろうと思っていたが、あてが外れた。団地の住民は、旧来からの町のことには無関心で、高価な買い物や楽しみごとは大阪へ、日常の食べ物や日用品の類は車で 10 分ほどの駅近くにできたスーパーマーケットへ行っておられる。

しかし、彼らも歳をとってしまった。入居時に 30 才代の働き盛りであった人も、40 年も経てば 70 才代である。息子や娘は、家を継がず、2 階の雨戸が閉まったままの家が目立っている。地域との関わりなしで過ごしてきた人たち、生活やつきあいの大半を大阪に依存していた人たちは、隣近所との関わりがなく、孤立・孤食の状況もあると聞こえてくる。

「そういや、あこのニュータウンからも、出品してくれはったり、運営ボランティアで来てくださっとる。いつの間にかオールドニュータウンになって、高齢者ばっかりで、孤立やら孤食やらの問題があったそうや。そんで、福祉カフェをつくったんやけど、毎日々々、同じ数人しか来なかったそうで、手詰まりになっとったんや。それが、福祉カフェの運営メンバーが、俺らの会場へ出店させて欲しいと言うて来られた」

「そうやったな。出しものは、これから考えるちゅうことやったが、手づくり品を出してこられた。着物をリフォームした小袋、皮のスマホケース、何とかいう笛…、竹で作った…」

「ケーナやな。南米が発祥の縦笛や」

「そうや、ケーナや。それと、子どものおもちゃを修理する“おもちゃ病院”もあるな」

「野鳥観察が趣味やいう人が、ここらの野鳥を絵に描いて、展示してはる」

「ここらは、野鳥がけっこう多いそうやな。展示は 20 種類ぐらいやが、ここらでは、50 種類ぐらいが見られるそうや。もっといるはずやとも言うてはった。生態系の頂点に位置しとる鳥が多いことは、環境が良いちゅうことで、うれしいことや」

「地域のフェスティバルへ参加するようになって、雰囲気が変わった言うてはった。孤島に住んどるような孤独感やら閉塞感があったんやて。それが、年に 3 回の出しものを考えなあかん、作らなあかんいうて、集まっていろんなことしだした。そしたら、みんないろんな技術やら知識があることがわかって、出しものづくりを協力しあっとるうちに、“つながり”が深まったらしい。ニュータウン内の“つながり”が深まって、福祉カフェが、交流センター兼創作センターに変わった。このあたりの地域との関わりも増えて、陸の孤島状態やったんが、この地域の一員になれて、みんな生きいきされとるそうや。“ありがとう”と言われたぞ」

「ニュータウンの人らとは、何か垣根がある感じで、親しみがわかんかったが、向こうさんも、こっちへ来てえぇんかどうか迷うてはったんやな。お互いに勝手に垣根を作っとったちゅうことや」

「なんかのきっかけがあると、そんな垣根が取り払われて、つながっていくんやな。そう言うてもろたら、こっちも“ありがとう”や」

「そんだけやないで。最近は、その創作センターへ、こっち側の人らが、子ども連れて、手づくり品を習いに行ってはる。何人行ってはるんか知らんが、月に 1 回か 2 回。それから、この前、農家の次男坊が、サラリーマンやが、そこの空き家を買うて入居した。双方向の“つながり”ができてきとる」

「野鳥観察は、その人が世話人になって、この地域で野鳥観察クラブができたんや。ニュータウンの人たちもメンバーになってはる。フェスティバルの時は、人が多すぎて、野鳥観察は無理のようやが、定期的に観察会をやられとる。県下のほかの地域とも連絡とりあって、県全域の野鳥データベースづくりを進めたいということや」

「理屈で考えたら、福祉カフェは必要かもしれんが、福祉カフェをつくっても問題は解決せんいうことやな。こりゃ、あの先生が言われとった“ネットワーク型コミュニティ”でなけりゃいかんちゅうことや」

「“ネットワーク型コミュニティ”ちゅうんは何や」

「あぁそうか、君たちは知らんだろう。金澤君とわたくし能美が、地域プランナー・コーディネータ養成塾で学びました」

「えらいもったいぶった言い方せんと、ちゃんと説明せぇ」

能美が説明せず、金澤へ役割が回ってきた。金澤は、次のように説明した。

従来、自治会が中心となってコミュニティ活動が行われてきているが、その活動分野が固定しており、新しい社会状況や社会的課題に対応できておらず、また、役員の持ち回り制もあって、コミュニティ活動の硬直化が見られる。

この状況を打破するのは、例えば、歴史に興味がある人による地域の歴史探訪会、野鳥に興味がある人による野鳥観察クラブ、トンボなどの小動物の生息空間の整備のためのビオトープづくりに取り組むグループといったように、従来からの自治会活動の分野を超えて新しいことに取り組む人たちの活動である。自治会活動には興味がなく、自治会に加入していない人でも、このような活動には興味を抱いて参加してくださることがある。

そうすると、コミュニティ内で、“興味つながり”が生まれてくる。そこには、自治会活動を行っている人も、行っていない人も入っている。こうした“ネットワーク(つながり)”が広がり、重なっていくことにより、コミュニティ内の“つながり”が絡み合い、強固になり、コミュニティ活動が活発になっていく。このネットワークは、コミュニティ外ともつながり、相互に刺激を与える状況も生まれる。あの先生は、この状態を、“ネットワーク型コミュニティ”と言っておられた。

「なるほど、閉塞状況にあったニュータウンが“ネットワーク型コミュニティ”となって生き返ったとは、すばらしいこっちゃ」

「うちの町全体が“ネットワーク型コミュニティ”になっとるとも言えるな」

「俺らは、地区の寄合いでの合意ちゅう手続きをすっ飛ばして勝手に走ってしもうた。そこんとこが、ちょっと引っかかっとったが、結果的には、“ネットワーク型コミュニティ”づくりの先駆けやったんか。裏で、大目に見てやって欲しい言うて、収めてくれはった人がいらっしゃることには感謝しとるが」

**合意形成**

「合意形成のことも学んだな。NPO に若いメンバーが増えてきて、コミュニケーションに戸惑ったこともあったがな」

「合意形成の必要性、合意形成への進め方を、地域プランナー・コーディネータ養成塾で教えてもろうた。あの講師のおねぇさん、おねぇさん言うても、俺らと同年代やろけど、迫力があったな」

「こんなこと言うてはったぞ。1)誰もが良いアイデアをもっているはずだ、それを持ち寄れば、良い解決案を見いだせる。2)理解しよう、意義を見いだそう、同意しようとして相手の話を聞く。3)相手の考え方を取り入れれば、自分の考えも改善できる。ざっと、こういうことやったな、能美」

「お前のように詳しくは覚えとらんが、“相手を認めて聞く”ことは、あれ以来、強く心がけた。おかげさんで、若い人を含めて、みんなの力、地域の総力の結集することができた。いや、“結集する”言うてはあかんな。俺らが“結い集めた”わけではないんや。お互いに認め合って、一緒にやったんやから、どんな言葉がえぇんか……」

「適当な言葉はわからんが、気持ちはようわかる」

「地域の昔からの組織とは、ちょっと、あったな」
「俺らが先走ってしもうたからな」
「お前の親父さんが抑えてくれてた。感謝や」。
親父に迷惑をかけたことはわかっていたが、親父は、何も言わなかった。心の中で感謝していた。その親父も 81 歳である。まだまだ、農作業に勤しんでいるが、車の運転は危なっかしい。事故を起こさないことを願っている。
「合意形成のことを先に知っとったら違う展開になっとたかもな」
「まぁ今は、齟齬があったり、対立しとるわけやないんで、えぇんちゃうか」

**淡路島の食文化の発展から学ぶ**

「いろんな人たちに出合って、教えてもらい、協力をもらって、ここまで来た。紆余曲折はあったが、今の状況に感動や」
「そこで、感動ちゅう言葉を使うんかい」。ちゃちゃを入れる奴がいる。
「うまく言えんかっただけや。関係してくださった方々に心から感謝、過去と比べての地域の変化に感動や」
「そやな。いろんな人に教えてもろた。ほかの地域から誰も来てくれることがなかった我が地域が、来てくれることがあたりまえの状況になっとる。淡路島のようにまではできてへんがな」
淡路島へは、3 年前に行って、いろいろと教わってきた。食による地域づくりが進んでいる。以前の淡路島の食と言えば、知られているのは魚だけと言っても良い状況であったが、1992 年から、“淡路牛”づくりを始めた。淡路島で生まれた子牛が、但馬へ売られて行き、それが三田で最終肥育されれば“神戸牛”、松坂で最終肥育されれば“松坂牛”になっている。淡路島で生まれた子牛の素質に気づいた人たちが、“淡路牛”づくりを始め、2004 年、“淡路牛”が、洲本都心にある、大正時代に建てられた、元は近代日本の代表的な紡績工場の事務所棟を改修した「ごちそう館御食国（みけつくに）」で提供されるようになった。“淡路牛”は、今、島内の飲食店であたりまえに提供されている。
最初の動きは、1985 年の CoCo-Net 推進委員会の挑戦であったそうだ。CoCo は“個々”である。大量流通が主流であった時代に、淡路島の良いものを、生産者から都会の消費者へ直接届けようとしたのである。今では、宅配便により、あたりまえに行われるようになっているが、当時はそんな状況にはなく、バイクで届けるしかなく、配送コストがかさばり、みごとに失敗したそうである。当時、冷蔵輸送が必要なものは宅配便の対象ではなかった。
しかし、メンバーは、思いを持ち続けたそうである。そして、このメンバーが中心となって、“淡路牛”づくりが進められ、2004 年に“淡路牛”が誕生した。
島内のいろいろな飲食店で“淡路牛”が提供されるようになった 2008 年、“淡路島牛丼”が生まれた。淡路島観光協会が主催し、参加 50 店舗から負担金を徴収し、パンフレット、ポスター、景品等の費用を確保した。話を聞いていた 4 人とも、50 店舗もが負担金を出したことが凄いと思えた。
“淡路島牛丼”の開発にあたっては、“淡路島牛丼 3 つの誓い”が交わされた。1）私たちは、おいしい牛丼を通じて、淡路島の食材のすばらしさをお伝え致します、2）私たちは、おいしい牛丼を提供するために、牛肉・玉ねぎ・米は淡路島産を使用します、3）私たちは、牛丼を通じて、淡路島の発展に寄与することを誇りに感じ、淡路島のファンを増やします、というものである。
食材のすばらしさを伝えたい、地元の食材を使う、淡路島のファンを増やすという決意、俺らの地域で、これほどのことを言えるのかと思った。
これは、マスコミがよく報道してくれ、発売から 1 年間で 48 万食、約 6.9 億円を売上げ、経済波及効果が 11 億円を超えるメガヒット商品となった。
牛丼の価格は、600 円から 10,000 円超まで多様である。淡路島産の牛肉・玉ねぎ・米を使うことを基本に、各店の自由な工夫を認め、お客様の選択の幅を広げて“食べ歩きの楽しみ”を生んだので

ある。賞金・商品つきのスタンプラリーも、来訪促進に大きな役割を果たした。

“淡路島牛丼”の成功は、次々と発想の連鎖を生み出していくこととなった。特産品ではあるが、他地域の企業へ供給していた“そうめん”を、2010 年に“淡路島ヌードル”として売出し、2012 年から“そうめん食べ歩きプロジェクト”を実施している。また、2010 年に“淡路島スィーツ”、2011 年に“淡路島バーガー”と“生しらす丼”を、2014 年に“生サワラ丼”を売出している。さらに、2014 年には、80 近い店舗・旅館が、“淡路島食材こだわり宣言”を行っている。

淡路島の 2016 年の人口 1 人あたり観光入込客数は 99 人となった。奈良県の 31 人、奈良市の 42 人、京都市の 39 人と比べると、その多さがわかる。

観光行動に占める“食”のウェイトが高まっているとも聞く。スペインに、食文化や映画祭などで国際的に有名なサン・セバスティアンという都市があるが、淡路島は、そこに肩を並べていると思える。

我々の地域も、産品は多様で豊富である。海の魚こそないが、来てくださる方々に、“食をも”楽しんでもらえるような発展形が必要であることには、4 人の意見が一致した。それと、淡路島のような“発想の連鎖”と“活動の広がり”を創っていくことについての決意を新たにしたことが思いだされる。

**ほかの地域のフェスティバルとの違いは**

「ほかの地域でも、こんなフェスティバルやっとるんやろか」

「あると思う。そんでも、うちの地域のような、みんなで創り上げたもんがあるんかな」

「そこはようわからんが、みんなで創った、各地区が主体性をもって、全体としての大フェスティバルやもんな」

「行政主導のフェスティバル、行政の外郭団体がやっとるフェスティバル、商業者の団体なんかがやっとるフェスティバルは、よう聞くわな。特定ジャンルの、音楽や花に関するものもあるわな。こんなグチャグチャの、何でもありの、お客さんまで主役になっとるもんがあるかな。うちは、地域の人とお客さんが主役で、行政はお手伝いやもんな」

「グチャグチャちゅう言葉は、何とかならんか」

「う～ん。混沌か、違うな。多様な出しものがあり、多様な世代が参加くださるフェスティバルということやが……」

「多様性やな。お客さんからすれば、選択肢が多い」

「選択肢が多いは、あの先生から聞いた言葉やな」

「俺らも、町のみんなも、大音楽イベントみたいな、ひとつの分野の出しもんで大勢を集める能力もノウハウも持っとらん。みんなが精一杯やった結果として、いまの形ができてきた。グチャグチャになっとることが誇りや。お前ら誰も文句ないやろ」

「グチャグチャちゅう言葉は、自分たちで使っとるかぎりは、愛と自虐が感じられてええ」

「ほかと無理に比べんでもええやろ。うちの地域が創り上げたグチャグチャは、うちの地域でしか創れへんもんや。そんでええ」

「ほかの地域でもこんなグチャグチャなフェスティバルやっとるんやったら、そことの交流もおもろいやろな」

「ほかの地域ちゅう言葉が出たついでに、ちょっと言うておきたいことがある。この地域は、大阪から遠くはないやろ。この場所やから、いろんな人が、ちょっと行ってみたろかと、それぞれの楽しみを求めて来てくれてはる。立地条件が良いから、グチャグチャが成り立つとも言える。いわゆる遠隔地では、そうはいかんわな」

「うん。それは、俺も考えたことある。今の状況まで来れたんは、立地条件、地理的位置のおかげでもある……。ほんで、お前の言うておきたいことは何や」

「俺たちは、立地条件の良さに胡坐をかいとったらいかん言うことや」

「河北君、すばらしい」。能美がパチパチパチと手を叩いた。

## 経済効果

「使ってくださるお金も、4 年前の一人あたり 1,500 円から、去年は 3,000 円に増えた。良いものを提供できれば、気持ちよくお金を使ってくださる。春・秋のフェスティバルでの 6 万人の直接消費額の合計は 1.8 億円にもなる。経済波及効果は 3 億円を軽く超えるのではないか」

「銀行やったら、ちゃんと計算してみてくれ」

「そうやな。今度、ちゃんと計算してみる」

「車で来てはる人は、野菜やら加工食品やらを 5,000 円も買うてくれはる。家族 4 人で来てはる時は、野菜・加工食品などが 1 人あたり 1,200 円、食事・おやつ・ゲーム参加などが 1 人 800 円、1 人あたり合計 2,000 円ほどやが、大阪のおばちゃんたちは、3 人で車で来て、3 人とも 5,000 円以上も買うてくれはる。そうすると、平均 3,000 円くらいにはなるわな」

あの先生が言われていたことを思い出した。「おばちゃんは、どこかへ出かけた時、1 万円を使えなかったら満足しない。おっちゃんが 1 日に使える金は数千円であるが、おばちゃんは、家族の生活費や小遣いを含めてであるが、月に 30～50 万円を差配しており、1 万円札を使うことには躊躇しない」。なるほど、そのようである。

「兵庫県の中部へ行った時のこと、思い出すな。石川がインタビューしたあれや」

「あの大阪マダムにはど肝を抜かれた」

「おっちゃんは、あんまり金を使わんが、おばちゃんたちのダイナミックな消費行動は、この地域にとっても重要になっとる」

「この前、あん時と同じ言葉を聞いた。“帰ってから旦那の晩ご飯の準備せんでええように”やて」

「そうか、それで、すぐにおかずになるもんや押し寿しの類がよう売れとるんか」

「あん時、能美が、うちらでも巻き寿しの材料ぐらいあるちゅうてたが、あん時は、どこのおばちゃんが、わざわざうちらへ巻き寿し買いに来てくれるんや、あり得ない、思うてた」

「それが、いろんな出しもんがある、おもろそうな場所になって、ちょっと行ってみたろかと来てくれはった人が、知り合いに渡すみやげものだけやのうて、旦那の晩飯になるもんまで買うてくれてはる」

「そこがまた凄いとこや。旦那の晩飯になるもんなんか、こちらが意図せんかった、最初に行った兵庫県の真ん中のとこで、石川が大阪のおばちゃんにインタビューした時に聞いたもんやが、忘れとったもんや」

「こっちは、これを知って欲しい、こんなもんやったら喜んでもらえるんやないかちゅう出しもん準備しとる。どんなふうに使うてもらえるかまでは想定できてへん出品者が多いけど、お客さんが考えてくれはる。お客さんに聞いたら、それを使う時の思いがわかる。それを活かして、こちらが次へ動く。凄い相乗効果が生まれとる」

## 成功要因を問われる

「最近、いろんなところから視察に来られて、俺が対応することが多いんや」

「そりゃ、ごくろうさんやな」

「ごくろうさんと言われるほどのことはないんや。来られた方々とのやりとりがけっこうおもろいわ」

「どんなやりとりや」

「みなさん同じように感心してくれはって、“どうすれば、こんなことができますか”と聞かれる。どうすれば言われても、俺らがどうこうしたわけでもないから、“わかりません。いつの間にか、こんなふうになってしまいました”と答えるんや」

「相手さんは、それで納得するはずないわな」

「うん。そうなんや。次に、“まずは失敗することですね”と言う。相手さんはギョッとしはる。特に行政の人には、失敗ちゅう言葉は良くないんやろな。行政は、誰かが失敗しても、たいていみんなで覆い隠すもんな。それから、議員の方々は、理解しようという意識が低い」

「お前、ちょっと、性格悪うなったんちゃうか。温厚で冷静な金澤君がそんなこと言うか」
「温厚で冷静と言われるんが、いちばんイヤや。なんか人間性を否定されとる気もする」
「お前の人間性を否定しとる奴は、誰もおらんぞ」
「うん。それはわかっとるがな。俺にも、怒りの感情がふつうにあることをわかってくれ。その感情を即座に言葉に出せる奴が羨ましい。俺は、怒る相手が去ってしばらくしてから、怒りの言葉が浮かんでくる。怒りの言葉を即座に思いつかん。時間的にずれとるから、結果として、相手に対して怒ることがないんや。ある意味、くやしい。あん時、こう言っておきたかったと、後で思う。結果として、温厚で冷静と思われとるが、俺も、ふつうの人間や」
「世の中には、何かあった時、相手を罵倒しまくる言葉を次々に吐く奴もおるわな。そいつは、頭ん中に、怒りの時に使う言葉をすぐに使えるように、いつでも準備しとるから、次々と出てくるんやろ。お前の場合は、ふだん怒らんから、怒りの言葉が深く潜在化しとって、すぐに引っ張り出せんちゅうことやな。怒りの気持ちより、相手を思いやる気持ちが優先しとんのが、お前のえぇとこやないか」。石川よ、解説してくれているのか、なぐさめてくれているのか、誉めてくれているのか、いずれにしてもうれしくない。
「俺は、仕事中に、相手を罵倒しまくる言葉のデパートみたいな人に会っとる。ようこんだけ、次から次と、そんな言葉が出てくるもんやなと、頭を下げながら感心しとった」
「罵倒しまくる言葉のデパートやと、うまいこと言いやがる」
「疑惑のデパートちゅう言葉を使うた議員がいたやろ、あれをパクッただけや」。河北よ、話を横へ持って行くな。
「そういや、金澤は、試合中に怒ったことないような気がするな。少なくとも俺は、怒られたことなかった」石川が言う。
「俺は、早う自陣へ戻って、サイドでフリーの奴のマークにつけと言われることがしょっちゅうやったが、怒られたという意識はない」。フォワードの能美は、前へ突進しすぎて、カウンターをくらった時に、帰陣が遅れることがよくあった。
「俺は、いっぺんだけ、金澤に怒鳴られた。相手のフォワードとの間合いを詰めずに、楽々とシュートを打たしてしもうた。それが、相手がでっかいヤツで、こいつが蹴ったボールに当たったらコワイと、一瞬、思ってしもうた。結果として、その 1 点で負けた。優勝しよう言うてた中学校の最後がベスト 4 で終わってしもうた。決勝戦へ行けんかったんは、俺の責任や」。河北が、しおらしいことを言う。
「ちゃう。俺が点を取らんかったから負けたんや」。ゼロ対 1 で負けたのだから、そうとも言えるな。
「いや、俺も、能美から絶好のパスもろうて、フリーやったのに、シュートを外してしもうとる」。おいおい、ここで、美しいなぐさめあいか。それだったら、シュートを止められなかった俺にも責任があると言わなければならないのか。
「ゴールキーパーとしては、怒っとるより、次の陣形を考える方が先やから、基本的には怒らん。しかしまぁ、40 年近う前のことを、よう覚えとるな」
「あれは、相手にビビッた俺のミスや。石川がフリーでのシュートを外したちゅうような、人のミスは覚えとらんが、自分が目一杯やらんかった時のミスは、何かの時にフッと出てくる。にがい思い出や。みんな、すまんかった」
「お前のせいで負けたんやないけど、お前がそう言うんなら、そういうことにしとこか」
「話を元に戻すぞ」
「元ちゅうんは、どこや」
「温厚で冷静と言われるんがイヤやちゅう話や。会社でも、そう思われとった」
「わかった。金澤もふつうの人間や、性格が悪うなったわけやないちゅうことやな。ほんで、視察に来はった人らの話はどうなったんや」
「行政が失敗ちゅう言葉にギョッとする、議員の理解しようとする意識が低いちゅうんは、別にうちの

町のことを言うとるんやない。大阪で仕事しとったら、それなりに耳に入ってきよる。行政や議員の話はもうえぇとして、俺らが失敗から始まったんは事実や。まずは走ってみよう言うて、走ってみたが、うまくいかんかった。それがあったから、次に素直に学べたんや。そこから、教えてもらいながら、協力してもらいながら進めたんや。まずは失敗してみることや」

「それはわかるが、その説明で、相手さんは納得するんか」

「“失敗してもメゲないこと”、“失敗しても必ず得るものがあるから、それを活かすこと”と言うても、納得した顔してくれへん。しゃあないから、ひとしきり経緯を紹介したうえで、こんなふうに言うんや。ひとつは、“垣根をつくらず、みんなが、新しいみなさんの参加を喜んだこと”、二つ目は、“つながりが重要だと言い続けたこと”、そのつながりがどんなつながりか、どういうふうにつくるのかは、それぞれの地区が工夫し続けていること、三つ目は、“運営参加者が増えるたびに、町の将来像を徹底的に議論したこと”」

「なるほど、重要なことや。うまいこと言うてるな」

「それでも、“仕掛け人はどなたですか、どんな方法をとったのですか”と聞いてこられる。“仕掛け人はいません。お客様も含めて、みんなが主役です”と答えとる。仕掛け人がおるのは、仕掛けられた人、乗せられた人もおるちゅうことで、俺は、地域の中で、そんな関係は良うないと思うとる」

「視察に来てくれはった人にとっては、キツネかタヌキにバカされたような話かもしれんが、お前さんが言うとることは、俺らには、ようわかる」

## 第 6 章　持続可能な地域が見えてきた－地域がインキュベータに

今日は、3 時すぎから飲み始め、外はもう暗くなっている。母親と妻が、夕食の支度をしてくれているようだ。今日は、どんなものを出してくれるのか、楽しみである。

我々が何もわからないままにイベントを始めたことがきっかけとなって、地域において、様々な活動が生まれてきている。あの先生から聞いた“地域がインキュベータ（INCUBATOR）であるべき”という言葉が思い起こされる。

インキュベータは、起業したばかりの、産業機能が未熟な企業を一人前の企業に育てるための施設・仕組みのことである。元は農業用語の孵化器が、医療用語で未熟児保育器として使われ、さらに 1970 年代後半のアメリカで産業政策用語に使われるようになった。当時のアメリカは、産業構造の転換期にあり、大企業が撤退して地域経済が崩壊する地域が続出した。公的機関による失業対策・雇用創出としてインキュベータが設置されたのである。日本では、1989 年の神奈川サイエンスパーク、1990 年の大阪市ビジネス・インキュベータが嚆矢となって多くのインキュベータが設置されている。

施設としてのインキュベータの必要性とは別に、“地域がインキュベータ”であることが必要とのことであった。そのためには、地域全体として、次のような雰囲気・支援体制・場などが十分に備わっていることであると、先生は話された。

1）起業促し喜ぶ雰囲気がある。
2）“よそ者”の参入を受け入れる風土がある。
3）起業することへの支援がある。
4）起業してからは、資材・販売先の確保、技術やサービスを高度化する機会、大学・研究機関や他企業と情報を交換し研鑽し合い、ネットワークを組み、ともに発展していく機会などが多い。

我々の地域は、“起業”に関してはまだ多くはないと思うが、“地域の人たちによる新しい活動”はどんどん増えている。“起業”という言葉を“活動”と置き換えれば、“地域がインキュベータ”の様相を呈してきていると言えると、金澤は思っている。

飲むほどにみんなの口が滑らかになっている。以前は、行きづまって、重ぐるしい雰囲気になる時もあったのにと、金澤は思う。前へ進んだことを振り返っている今は、みな楽しそうである。次から次へと話題が出てくる。

### 黒ブタによる耕作地回復

「おい、能美、黒ブタは元気か」

「元気にしとるぞ、この前、子ブタが 10 匹も生まれたんや。かわいいぞ」

能美は、石川が紹介してくれた、黒ブタによる耕作地の復元に取り組んでいる。能美には、家畜の飼育ノウハウがないため、畜産農家の高橋さんと共同でブタを購入して、ふだんは高橋さんが準備した豚舎で飼っている。エサ代は折半、生まれたブタは高橋さんのもの、ブタに耕作地の復元の仕事に出てもらうものは能美の都合によると取り決めているそうだ。

「今度は、ブタのうんこに浸かっとらんか」。また、ちゃちゃ入れかい。じゃれるな。

「河北は、何を言わせたいんや。残念ながら、浸かっとらん」

「教訓を活かしとんのやな」

「長靴を変えたんや。うんこがくっつかん優れもんや。はまっても、うまいこと抜ける」

「そりゃ、前の長靴が、長いこと使うとって、表面のワックスが剥がれとっただけちゃうんか」

「2 倍も金払うて買うたんや。えぇ長靴や思うて、機嫌よう使うとんのに、何か文句あんのか」

「じゃれあいがすぎるぞ」と、石川がたしなめた。

「すまん。黒ブタの力はたいしたもんや。掘り返して、頑固な根っこまで食べてくれとる。うんこは肥料になる。放牧した時は、見にくる人が多いな。子どもたちも来るんで、安全のために柵はしとる。“黒

ブタ貸出し”を事業としてやらんかと、高橋さんと話しとるとこや」
「貸出し事業か、そりゃおもろい。うちの銀行で協力できることないか」
「ない。金はいらん……。いや、すまん。耕作放棄地の復元で困っとる人がおられたら、紹介してくれへんか」

### カフェ開業

「そうそう、鳥越さんところの娘が帰ってきて、カフェを始めた」
「鳥越さんて誰や」
「中学校で 2 年上やった人や。おとなしい、あんまり目立たんかった人や。大学出てから東京でしばらく勤めてたんやが、親父さんが亡くなって、30 歳前に帰ってきて、農業を継いで、今、施設園芸やっとられる」
「あ、あの人か。そのカフェ、近いうちに行ったろうや」
後日、4 人は、連れ立ってカフェへ行った。蔵を改造した空間であった。京都でインテリアデザインを学んだという娘さんの店づくりの感性はすばらしいと思いつつ、おじさん感覚では馴染めなかったが、コーヒーはなかなかにうまい。食材は、できるだけ“地のもの”を使うようにしているという言葉がうれしい。
都会から訪れる観光客の方々が、昼食を食べに来てくれるそうである。また、この地域のマダムたちも、よく来てくれるそうで、最初から黒字とのことである。今まで、この地域に、こんなオシャレな店はなかった。こんな店があれば、この地域のマダムも、ほかへ行かずに地元でお金を落としてくれるのかと思った。
地元の素材をうまく使い、料理によって付加価値をつけ、それが地元で消費されている。地域でお金が回り始めていることがわかり、うれしくなった。商業統計調査によれば、この地域の人口一人あたり小売業販売額は、全国平均の 85%程度で、大きな消費流出があることがわかっていた。

### 移住者が農業を

「そう言やぁ、去年、移住してきて農業をはじめた者もおるそうやな」
「石川が 30a 農業ちゅうもんがある言うて、紹介してくれてたやろ。あれや」
「そりゃおもろい。成功してくれて、マネする次の人が来てくれると、もっと良いな」
「俺のように、高齢の方々の農地を預かっとるのとは別の農業の形やな。農業も、国が言うような大規模化と消費者直結型の両方が必要ということや」
能美は少しばかり悔しそうであるが、農業者が増えることには期待しているようだ。大都市圏縁辺部にあるこの地域であれば、大都市の消費者へ、採れたその日のうちに新鮮な野菜を届けることが可能である。
「その移住者は、最初は、俺らが始めたイベントでここへ来たんやそうや」
「うれしいこっちゃな。年はいくつや。どこからや」
「30 すぎやと思う。嫁と子ども 2 人や。大阪の河内や言うておったが、名前が“こめだ”や、米田を“こめだ”と読むんはこの辺りやから、もともとこの辺りに縁があった人かもしれんな」
奈良と大阪の河内は、古代からつながりが深い。今も、河内の人たちがよく遊びに来てくださる。
「農業はどこで勉強したんや」
「独学やて。金沢の近くで 30a 農業やっとる人のところへは聞きに行ったらしい。夏のイベントに何回か来とるうちに、この地域に惚れてしもうたそうや。会社勤めを辞めて来とる」

### サポーターも

「この前、大阪の北河内から来てるちゅう人に会うた。小西さんらがやっとられる営農組合の畑で、

若い女性が2人、30前後やと思うが、耕運機を動かしとった。小西さんと立ち話しながら見とったんやけど、手馴れたもんで、びっくりした。途中で、はて、小西さんとこにこんな娘さんいてはったかと思うて、聞いたら、大阪から手伝いに来てくれてはるいうことや」

「そりゃ凄いな」

「女性がということが凄いんか、大阪からということが凄いんか、どっちや」。また、小競り合いか？

「そりゃ、どっちもや」。あっさりと収まってしまった。じゃれ合いはなしか。

「この人らも、最初は、俺らの夏のイベントに来てくれた人らや。小西さんらが始めて野菜を出してくれた時に、たまたま出会うたそうや。そこから、時々訪ねてくれることんなって、今は農作業の手伝いまでやってくれとる」

「そら、小西さんらはうれしいやろ。俺もうれしい。ビジターがリピーターになってくれて、地元の人との関わりが増えて、地元の活動を支援するサポーターになってくれる、えぇ例やな。さっきの米田君は、そっからついには地元のメンバー、移住者になったいうことやな」

「ビジターからリピーターへ、そっからサポーターへ、さらにメンバーへか、カッコえぇこと言うな」

「そやろ。こんなことも地域P&C養成塾で勉強したんや」

「そういうストーリーが生まれとることが重要なんや。うれしいことなんや。まだある。彼女らのひとりが、住んでるとこの近くにあるスーパーのバイヤーと知り合いで、組合の作物をそのスーパーへ入れる仲立ちをやってくれたそうや」

「そりゃまた凄い」

「そんだけやないで。今、ここらの山野草を使ったクッキーを作って売ろう言うて、共同開発まで始めてくれとる。大したもんやろ。次のフェスティバルには出してくれるわ」

聞いていた誰も、「うれしい」「凄い」以上に言える言葉が見つからなかったが、都会の人の視点で、この地域の資源を活かしてくれていることに感謝である。

**空き家の再生**

「あの地区の空き家をレストランに再生して、大阪から移住してきてくれた人もいる」

「あの地区は、どこのことや」

「最近、地名・人名がすぐに出てこんことがたまにある。くそったれ。まだまだ若いつもりやが、頭のてっぺんがえぇ具合になってきとるしな」。能美の自虐ネタが出て、みんなの笑いがあったが、みんな同じようなものである。河北の頭髪もあやしい。石川は、典型的なオヤジ体形になっている。そう言う自分も。

「俺らはまだまだ若い。それは認知症やないから心配すんな。そんでも健忘症かもな」

「健忘症？　放っといてくれ……。思い出した。あの川べりや」

「あの川べりか」。思い出したことにはなっていないのに、反応する奴がいる。

「この地域の雰囲気がえぇ、この地域の食材がえぇ言うて、来てくれはった。それが、大阪で繁盛店を経営してた人や。この前、女房と一緒に食べに行ってみたんや。今、県内でイタリアンの店ばっかりオープンしとるらしいが、イタリアンでなくて良かった。うまかった。大阪からわざわざ食べにきてくれとる人もおったぞ」

「うちの地域は、俺らが気づかんかっただけで、いろんな潜在力があったちゅうことやな」

「そのおやっさんが、こっから奥の地域にぎょうさんある旅館の料理人に料理を教え始めてくれとる。近々、地域の奥さん連中のための料理教室も開くそうや。この地域へ受入れてもろうたお礼や言うて、受講料はとらん、材料費だけやそうや」

「この話もすげぇな。うれしいこっちゃな」

「“うれしいこっちゃ”はえぇとして、“すげぇ”かい。どこの言葉や」

「たぶん、神戸やと思う。奈良市内の高校へ行った時は、言葉に少し違和感があるくらいやったが、

神戸では強烈に影響を受けた。大学へ入ったばっかりの頃、“自分、どこの出身や”と言われて、きょとんとした。“あんた、どこの出身や”ならわかるが、相手のことを一人称を使って言うとる。日本語やない思うた。あいつは、神戸の人間か、大阪の人間か知らんが、ここらでは、そんな言い方せんやろ。ほんで、大阪で仕事しとる時は、ここへは寝に帰るだけのようなもんで、家族と会話するが、ここらの人と話すことが殆どないから、ここらの言葉を使うてへん。いつの間にやら、神戸弁や大阪弁とここらの言葉がグチャグチャや」

「みんなそんなもんやろ。能美は大丈夫か」

「俺も、千葉の大学へ行ったから、関東弁か千葉弁かわからんが、影響されとる」

「この前、自分の女房を俺に紹介すんのに、“僕の奥さんです”とぬかしやがる奴がおった。謙譲語ちゅうもんを知らんなと思うて、“へぇ奥さんですか”とイヤミっぽく言うたんやが、“はい、奥さんです”と返しよる。グチャグチャやな」

話の流れまでグチャグチャになってきている。グチャグチャという言葉の連鎖はあるが……。さっきのフェスティバルの話の時は、愛を込めてグチャグチャと言っていたが……。飲んでいる時は、これで良いのだろう。

### お年寄りが元気に

能美が話を変えた。「俺らは、来てくれはる人たちから得ることが多かったな。俺は、ここの環境の良さを教えてもろうた。いつもあたりまえに見とるもんが、えぇもんやちゅう感覚はなかった」

「うちの母親も言うとった。落ち着く、気持ちが安らぐ良い景色や、うらやましいと言われて、ここで生きてきたことが認められたような気になったそうや」

「お年寄りが、イベントに出してくれはった、ここらの伝統のアワ餅、それから、みたらし団子、3 年漬けたウリ漬けなんかの評判が良かったな」

「あれで、お年寄りが元気になったもんな。お年寄りと言うてしもたらあかんな。皆さん、まだ 70 歳代や。あれから、ずっと屋台を出してくれてはる」

「屋台だけやないで、菜園の野菜も出してくれてはる。有機肥料で土を肥やしてはる、うまい野菜や思う。農薬を使うてない、安全なものやし、人気があるな」

「認められ、誉められ、感謝され、どんどん元気になられる」

「ふだんは、たいていは高齢者 2 人だけの生活やから、刺激ちゅうもんがないんや思う。イベントに出す何ヶ月も前から何を出そうか考えて、準備の会合にも必ず出てくれはって、当日は、ほかの地域の人と関わりを持って、前に買うてくれた人から“おいしかった”言うてもろて……」

「出しもんがないからちゅうて、運営ボランティアに出てくれはる人もけっこういてはる」

「この前までは、サラリーマンやった人らが、60 歳過ぎたら、地域の活動してはったんやが、世間で、定年が 65 歳まで延長になった。5 年遅れるようになった。地域活動の人材不足になると心配してたんやが、お年寄りが元気になりはったから、あんまり心配せんでもえぇかもな」

### メダカの学校

「大阪の人に、ここの川がえぇ言われて、子どもの川遊びを 8 月のイベントに入れてから、お客さんが増えたな」

「最初は、あの川を勝手に使うて、県の河川管理者に怒られたんや。昔から俺らが遊んどった川を使うて何が悪い言うて、能美が怒りまくっとったな」

「そうや。ほんでも、怒っとってもしゃあない、小さな川を何とかしよう言うて、取り組み始めたんやが、これもけっこう大変やったな」

「三面貼りにされて、川やなしに水路になってしもうて、生き物の姿がなかった。そこを、子どもが遊べる“メダカの学校”にしよう言うて、よう言い出したもんや。役場へ行ったら、河川の話は土木の河川

係や、子どもの遊び場は公園係や、生物環境は何々言うて、たらい回しやったな」

「結局、3 年かかった。その間、生物環境の保全を専門としてはる NPO の方々に助けてもろうた。“メダカの学校”を造ると言うても、子どもの頃にメダカを食うたことがあっても、メダカに棲んでもらうのにどんな環境を造らなあかんか、何もわかっとらんかった」

「流れの勾配がこれぐらいで、卵を産みつけられる水草が生えとる、生まれた稚魚が流されんような溜まりがあって、何とかかんとかということは、何も知らんかった」

「県庁へも、何とかならんかちゅうて話に行ったら、多自然型護岸づくりとか言う補助事業があることがわかって、そこから前へ進んだ。あれは、役場が知らんかったな」

「まぁそう言うな。役場もそれから、窓口を一本化してくれて、メダカ生息環境の整備という予算をつけてくれたやないか」

「それまでの俺らの活動の積み重ねが信用となって、何とか実現できたという側面もあるな」

「それは、手前味噌やないか。けど、確かにそうや。積み重ねが信用やな」

「予算がつくことがわかったんで、学校へ話に行った。NPO の方々に指導してもろうて、川ができた時に放流できるよう、みんなでメダカの飼育をやったな。おかげさんで、カッコえぇ言い方すっけど…」

「カッコえぇ言い方はせんでもえぇ」

「言わしてくれ、“世代間交流の促進”にもなった」

「子どもたちにも、親御さんからも感謝されたな。校長先生から感謝状までもろうた。子どもたちが遊びに行ってくれとる。6 月頃からは、暑い日には、川へ入って遊んでくれとる。さすがに俺らの時みたいにメダカを食べる子はおらんが」

**里山クラブと竹林の手入れ**

「“メダカの学校”づくりが始まったら、里山クラブの人たちが、これ使うてくれ言うて、竹炭を持ってきてくれた。竹炭は水を浄化する力がある言うて。おかげさんで、“メダカの学校”の水はきれいなままや。竹炭をずっと定期的に取替えてくれてはって、汚れることがあらへん。」

「最初のイベントの時に来てくれはった大阪の人が中心になってつくった組織やな。その人らは、確か 3 回目の時に北村さんと知り合って、北村さんちの山を貸してもろうて活動してはる」

「そうや。20 人ぐらいいてはる。定年退職後の、大阪から来てはる人たちが多いけど、この辺りの 30・40 代のサラリーマンもメンバーになっとる」

「あの人らは、初めは、里山を子どもの遊び場にする活動してはったんや。遊び場は、もうできとって、土日は、大阪からも、子どもたちがあたりまえに遊びに来てくれとる。その人らへ、俺が、そこらじゅうで竹が暴れまわって困っとるちゅう話をしたことがあるんや。そしたら、竹炭を焼く言うてくれてな」

そんな経緯があったのは知らなかった。能美は、いろんなところへ顔を出して、いろんな“つながり”をつくってくれている。山裾で勢力を伸ばして困りものになっていた竹は、今は、里山クラブへ持って行けば、炭に焼いてくれる。できた炭は、持ち込んだ人、炭焼き作業を行った人、里山クラブが分け合う仕組みである。兵庫県の NPO が創った仕組みを参考にさせてもらっているそうだ。関連する話であるが、自宅に成ったカキを、おばちゃんたちの加工所へ持ち込んでも、同じ仕組みでジャムにしてくれる。

竹炭は、県都のふるさと産品販売所で販売され、里山クラブ、クラブメンバー、持ち込んだ人に、わずかではあるが収入をもたらしている。そして、里山クラブの取り分の炭の一部を“メダカの学校”へ入れてくださっている。

タケノコを採らなくなって荒れ放題の竹林の整備もやってくれている。竹林所有者からは、タケノコが採れるようになったと感謝されている。この場合、伐採した竹は、里山クラブのものとなる。それを日陰で乾燥させており、乾燥が十分に進む 3 年後には、竹家具づくりを始めるそうである。さらに、ササユリの復活にも力を入れている。

### 農地オーナー制と体験農園

「大阪の人が、田んぼ・畑づくりをしたいと言いはって、田んぼ・畑のオーナー制ができたんや。あれも能美が、耕作条件が悪い地区の人に持ちかけたんやな」

「そうや。そこで、おもろい話、聞いたぞ。サラリーマンやりながら農業を手伝ってくれとる息子に、いくら教えても、その通りにやらんかったそうやが、オーナーになってくれはった人に教えたら素直にその方法で野菜栽培をやって、十分な収穫があったそうや。その方法を、オーナーの人が息子に言うたら、息子がその方法でやるようになったそうやで。親が言うことは素直に聞かんが、よその人の言葉には耳を傾けるちゅんはおもろいやろ」

「うちの息子も、俺が言うことは素直に聞きよらん。そんなふうにしてでも、智慧が引き継がれていくことはえぇことやな」

「体験農園も、いくつもできた。イチゴが中心やが、夏から秋にかけて、ブルーベリー、ブドウ、ミカンのもぎ取り体験がある。それを使った完熟ジャムづくりもやっとる」

### 観光入込客の増加

「みなさんがいろいろ考えてくれはって、この地域をいろんなことで楽しんでもらえるようになってきとると思えるな。この前、役場の人から、フェスティバルをやる5月・10月の観光入込客だけやのうて、ほかの月もお客さんが増えとると聞いたわ。観光入込客は、35年前、歴史的なとこ、神社仏閣を中心に毎年60万人あった。それが、日本人の観光行動が変化したことや、ほかで新しい観光地ができた影響で、10年前は30万人ほどにまで減っとったんやが、今は、60万人に戻っとるらしい。統計の取り方がようわからんが、この地域の良さが知れだしとるそうや。神社仏閣でも5割増しになっとるらしい」

「フェスティバルのアンケート結果を見とっても、そんな実感があるな。来てくれはった人の口コミ、SNSを使うた情報発信のおかげで、始めて来てくれはった人が“来たことがある人に聞いた”ちゅう割合が、このところずっと50%や」

「それが本当に大事なことやな。来てくれはった人が良かったと評価してくれてこそ、口コミや」

「この町へ“年に4回以上来る”いう人が、アンケート回答者全体の2割以上もある」

フェスティバルへ来てくださる方々へのアンケートは、毎回、2,000人以上が回答くださる。“とても良かった”との回答が常に80%強、“まぁまぁ良かった”が10%程度であり、高い評価が得られている。回収数は、会場によって最低100人から最大500人までと異なるが、それぞれ来場者の10%程度であるから、結果の信頼性は相当に高い。

「アンケート結果は、様々に使うとるな。お礼のコメントが多いが、これは、みんなの励みや地域再発見につながっとる」

「お叱りもたまにあって、課題として共有し、次は、改善しとる」

「こんなもんあったらという要望は、殆どすべて、次のフェスティバルの出しものになっとるな」

「お客様の声を聞いて、まじめに対応し続けていっとることが、高い評価につながっとるんやろ」

### 地域産品の評価の高まり

「おかげさんで、この地域の産品が高い評価をもらえるようになった」

「来てくださる方々は、ここの自然環境を気に入ってくださっている。地域の野菜も、その野菜で作る伝統料理による“もてなし”も評価してくれてはる」

「河北が、滋賀県からの帰りに“地域の固有性が重要や”と言うて、あん時は、具体的に言うてみんかいと思うとったが、こういうことやった」

「俺も、あん時は、わからんままに、固有性ちゅう言葉を使うてしもうたんやが、ここの地域の固有性を考えないかんかったんや。この地域の固有性は、ここの自然環境、ここの野菜、ここの伝統的な生活文化、ここの“もてなし”や。それを、来てくださった方々から教えてもろうた」

「そうやな。みなさんから教えてもろうた。25 年前は、農家は、形が整ったきれいな野菜を作って出荷するだけの、全国どこにでもある野菜製造者やった。大量に作らんと採算が合わんから、農薬をあたりまえに使うとった。そんでも、生活に余裕がでるほどにはならんかった。野菜を口にする人たちのことなど、微塵も考えんなかった」

「規格外の野菜は廃棄していた。今では、おばちゃんたちの加工所で漬物に加工しとる」

「ここらの野菜は、ここらの気候風土の中で育ったもんや。この地域ならではの野菜ができるんや。いまは、味が濃い、安全な野菜を作って、ほかのどこのもんでもない、この地域のもんや言うて販売できとる。フェスティバルへ来てくださった方々が口コミで広めてくださった」

「お前の親父さんが進めはった黒大豆、叔母さんのムコダマシの評判が良いそうやな」

「うん。そうらしい。それから、俺たちの夏のイベントにも出しとる、丸ナス、キュウリ、トマト、オクラ、サヤインゲン、サヤエンドウなんかも、評判が良いと聞いとる。はかの地域でも作っとる野菜やが、ここらのもんは、味が濃い、甘いとか言ってもらえとるらしい」

「農家は、子どもに農業を継がせとうはない、そこの嫁はんも、“こんなところにおってはダメや”ちゅうて、息子たちを都会へ追い立てるような言葉をいつも口にしていたんやが、意識が変わってきとる。ほかの地域から来てくださる方々が、ここらの産品や環境を評価してくださるからや」

かつては、年をとるたびに農作業の重労働が身体に堪え、農機具の購入が増え、農機具購入のために仕事をしているような状況も見られたが、最近は、農業を継ぐ若者が増え、他地域から農業者になるために移住してくれる若者も出てきた。この地域の産品の評価の高まりは、地域経済の活力にも結びついている。

ところで、能美は、夏のイベントの時に、野菜売り場へ来た小学校 1 年生ぐらいの男の子が、野菜を見てくれているから、うれしくなって、「これ、かじってみ」と言ってキュウリを差しだしたそうだ。

ところが、「ぼく、キュウリきらいなんや」とのことで、

「どうしてや、みずみずしいて、うまいぞ」

「にがい！　給食に出たら残す」との答えであった。

横から母親が、「キュウリはエグイから買わへんねん」

「そんなことない。だまされた思うて、食べてみ」と、無理に渡した。

「あら、このキュウリ甘いわ」

「そやろ、このキュウリ、朝採ってきたばかりや。甘いはずや」

「野菜はスーパーで買うんやけど、キュウリとアスパラガスはエグイから、最近は買わへんわ」

「そうか、都会では、採ってから日にちが経ったものが並べられているんかもしれんな。出荷から店頭までに 2～3 日と聞いたことがあるもんな。温度管理がしっかりしてへんと、3 日も経った野菜はうまくないよね」

「キュウリは、この子らが食べへんから買わんけど、お盆にだけは買うわ。亡くなったおじいちゃん、おばあちゃんが、キュウリの馬に乗って来てくれるから言うて、子どもの頃によう作ったから、今も、お盆にはお供えしてる。帰って行きはる時のナスの牛も準備してる」

「先祖を思う、敬うことはええことや。ボクは、キュウリの馬を作ろか、どうしよか思うて、さっきから見てたんやな。ほんなら、このキュウリとナス、ひとつづつ持って行ったらええ。タダや。でもな、採れたばっかりのキュウリやアスパラガスは甘い、うまいちゅうこと、覚えといてな」

なるほど、重要なのはこういうことである。一人ひとりとつながって理解を得ることの積み重ねである。能美は、初めてのイベントの時から、“つながり”がうれしい、ありがたいと言い続けてきた。

### CONTEXT と清く美しく正しい癒着

金澤は、頭の中が“つながり”の方へ行き、あの先生が言われていた“CONTEXT”という言葉を思

い出した。
「辞書には、文章の前後関係、脈絡と出ていますが、地域づくりに使うと、意味がある“つながり”のことです」。能美が、キュウリが嫌いな子とつながったことの意味がよくわかる。
もうひとつ、“清く美しく正しい癒着”という言葉も思い出した。地域プランナー・コーディネータ養成塾の講義の後、先生と一緒に飲む機会を得た時のことである。
「今日、先生は、地域の人たちとじっくり飲むことが必要とおっしゃれましたが、先生の大学は公立大学で、先生は公務員ですね。公務員が、訪問先へ上がり込んで酒食の接待を受けて良いんですか」と、余計なことを聞く奴がいた。
「大学の教員は、特別公務員だから、講演料をもらってもかまわない。私は、地域の方々から講演料をもらわないが、準備くださった食事はいただく。何か問題でもありますか」
「すみません。へんなこと聞いて」
「最も大切なことは、“清く美しく正しい癒着”です。準備していますから食べていってくださいと言われて、断るような奴は、本音の話、心の底からの思いを聞く機会を持てません。それを知らなければ、地域への提案は、上滑りのものにしかなりませんね」
確かに、己の腹を満たすために地域を利用しているような研究者がいるらしい。自分が調べたいことを調べに行って、地域の人たちが協力してくださってるのに、調査が終わったらそれっきり来ることがない。調べたことをベースに、地域に対して提案することもない。こんな話を、隣町の方から聞いたことがあった。
“清く美しく正しい癒着”は、あって当然、そうあった方が良いと、金澤には思えた。自分たちと行政との今の関わり方がそうなのかもしれない。

**ストレス症状の緩和**

「ストレスちゅう言葉を始めて聞いた。新聞でストレスちゅう言葉は知っとったが、都会人がそんなにストレスを感じとるんか。たまには、のんびりと、気を休めるとこがなかったらあかん、その点ここはええ言うてはったな」と、能美が言う。
「人と関わる仕事しとったら、ストレスが必ずある。特に、中間管理職がストレスを感じとる。調査結果では、役員クラスより、課長クラスの方がストレスを感じとるそうや」
「サラリーマンがそれなりに大変なんはわかるが、30 代の母親がストレスちゅう言葉を使うとった。いずれにしても、ここら辺りはええとこやちゅうことや」と、能美が、ストレス論議を打ち切ろうとしたが、総務部に所属しており、社員の健康管理を担当していたこともある金澤としては、知識を少しひけらかしておきたい。金澤が説明したのは、次のようなことである。
最近は、ストレスという言葉がよく使われるようになったが、ストレスは元々は金属などに力をかけた時の歪のことであり、ストレスを感じるという言い方はおかしい。何らかの影響を与えるものがストレッサーであり、気候の急激な変動、人間関係のトラブルなどがストレッサーで、外的刺激要因である。ストレッサーが働くと、人間の体内で何らかの変化が起きる。簡単に言えば、暑い時には汗が出る。同じストレッサーであっても、強く反応してしまう人とそうでもない人がいる。刺激への耐性は、遺伝的に、あるいは過去の経験にもよるらしい。
体内で何らかの変化が起きている状態がストレス症状、ひどい時には、一晩で胃に穴があいたり、うつ病になることもあり、これがストレス病である。ストレス病にはいろいろな症状があり、簡単なことでミスをする、ちぐはぐな受け答え、ぼんやりしている、同じことを繰り返し考える、意思決定ができない、といったようなこともあるそうだ。
ストレス病に陥らないためには、気軽に話せる人が回りにいるかどうか、自然の中のような心身が爽快になる場所に身をおくことも必要である。
2000 年代に入って、働く人の健康管理の項目にストレス対策を入れよとの通達が厚生労働省から

きた。ストレス病に陥る人が増えているとのことであった。ストレス病の人が増えれば、社会全体の生産性の低下にも至ってしまう。

ストレス病対策について調べさせられた。その過程で、疲労とストレス病対策を取り扱った本の著者のひとりに会いに行ったこともある。その人は、その本の中に「社会経済構造の変化とストレス問題との因果関係」を書かれていた。社員の健康管理に関わる者としては気になる。技術革新が社会経済構造を急激に変化させ、それに適応できない人たちがストレス病に陥ってしまうとのことであった。

ストレッサーには、パワーハラスメント、長時間残業のような、マイナス方向に作用するものだけでなく、良いストレッサーもある。5 月のそよ風、新緑の香りなどは良いストレッサーと言える。試験があるということも悪いことではない。

自然の香りが満ちた空間でサルに単純作業をさせた場合と、そうではない閉鎖空間でやらせた場合では、前者の方がミスをしないそうだ。森の香り、青葉アルコールや青葉アルデヒトを嗅がせると作業効率が落ちないことが実証されているそうだ。

「ちょっと南の地域では、サルの害が相当のもんで、困ってはるらしいが、今は、サルはどうでもえぇ。要するに、この辺りは、自然が豊か、昔からの田園風景も残っとって、心身の健康増進にうってつけのところ、だから気持ちよくハイキングしてくださっとる。農作業に来てはる都会の人にも、ここらの環境が良い影響を及ぼしとる、従って、この豊かな環境を地域資源と捉えて活かそう、と理解したらえぇんやな」と、能美にうんざりとした顔で言われた。

「長々とすまん、そういうことや」と、金澤は言わざるを得なかった。

### 怒られたことがヒントに

「怒られたことからも、たくさんのヒントをもらったな」

「うん。最初は、準備した野菜がすぐに売り切れて、後から来てくれはった人たちに怒られた。売れ残っても困るんやが、期待して来てくれはった人を裏切ったらいかんわな。そんな感覚も、最初は持ってなかったな」

「子どもに指摘されたと、志賀が言うとったことが、頭に残っとる。刃物を子どもに使わすなということやったな。子どもが刃物を使わんようになっとることが問題やけど、イベント運営者としては、当然の配慮が欠けとった」

「カブトムシを買うてくれはった人が 2 年目に来て、来年、この飼育箱の中でカブトムシが生まれる言うてたのに……、と言われた。聞いてみると飼い方に問題があったんやと思うたが、カブトムシの飼育方法を書いた紙を準備したんはそれからや」

「能美が連れてきてくれた、今、中心になってくれとる津幡君の提案から、2 年目に野菜の種類を増やしたんやが、調理方法をうまく説明できんスタッフがおって、大阪のおばちゃんに怒られとった。事前研修をやっとらんかった」

### コーディネータの役割を果たす人が重要

「ところで、F さんが亡くなってしもうたんやけど、あの人の力は大きかったな」

「そや。あの人がメンバーになってくれてから、いろんなことが一気に進んだな。話をつけに行かなならん時、すぐに動いてくれはった」

「F さんは、もと銀行員やな。河北とはえらい違いや」

「ちょっと待て、なんでそこに俺に名前が出てくるんや」。おいおい、また小競り合いか。

「すまん、すまん。河北も、重要な役割を果たしてくれとることはわかっとる。バブル経済を引き起こした犯人のひとりは銀行やろ。そんでも、銀行にも、あんな人がいてはるねんな」。話が横道へ逸れていきそうであるが、今日は、飲んでるから、まぁ良いか。

「銀行は、地域の企業を支援する、育てるちゅう使命をほっといて、今頃になって、金を借りてくれ

る相手がおらん言うとる。経営姿勢がおかしいんちゃうか」

「それを言われると、返す言葉がない。確かに借りてくれはる企業さんが減った」

「まぁそこは、そのへんで止めとこや。Ｆさんの話や」

「Ｆさんのおかげで、牛糞と杉チップを混ぜた堆肥ができたようなもんや。山の方の地区の、廃園になった保育園を音楽サークルの練習場に変えたんも、あの人のおかげや」

「そやな。“ここには何もない”言うてはった地区へ、今は、あたりまえに他所から人が来てくれとる」

Ｆ氏は、勤めていた銀行を早期退職後、県の農業者養成学校で農業を学び、奥さんの父親がこの地に持っていた田畑を引き継いだ。自宅が奈良市にあって、通い農業者であったため、簡単には地域に受け入れてもらえなかったが、そんなことでメゲル人ではなかった。ブルーベリーの栽培に取り組み、牛糞と杉チップを混ぜた堆肥をブルーベリー栽培に使い成果を挙げられた。このあたりで牛糞と杉チップの堆肥が良く使われるようになり、収穫量が増え、雑草除去の手間が減ることになったのはＦ氏のおかげである。疎まれていた畜産農家も救われた。杉チップの廃棄にコストがかかっていた製材所も助かった。

また、自身のブルーベリー園がある山あいの地区で、廃園になった保育園を、音楽サークルの合宿練習場として蘇らせた。今では、県都を中心に100以上はあるシニア合唱団や県内の小中高校の合宿練習場として、週末を中心に数十人から100人規模の合唱団が来てくださっている。来てくださる人数は、1年間に約5,000人にもなる。誰も訪れることがなかった山あいの地区が、あたりまえに訪れてもらえるところとなり、地区の人たちは、“もてなし”が評価され、みなさんに自信がついてきた。合宿練習の帰りには、野菜を買ってくださる。

“ここには何もない”という地元住民の言葉がひっくり返り、将来に向けての地域の力強い歩みが始まったのである。このような方向へと動きだすにあたって、Ｆ氏がコーディネータとして果たされた役割は極めて大きい。Ｆ氏は、地域の将来への危機意識と地域への強い思いをもって、地域住民への働きかけを続け、地域外からの来訪者を受入れる組織をつくり、役場に働きかけ、他地域との交流の基盤づくりを進められたのである。

Ｆ氏は、上述してきたことに加え、大学生の体験教育プログラムの受入れ、世界の学生をホームスティさせるプログラムの世話など、広範に活躍された。

「Ｆさんが、うつ病になりはったんは知っとるか」

「知らんかった。いつや」

「合宿練習場ができる前や。合宿練習場は、Ｆさんが知り合いやった、あの先生からの提案やったんやが、それを実現するんは、役場に改修費の予算をつけてもろう以前に、地区内の合意ちゅうもんが必要やろ。そのための会合が揉めにもめたらしい。“よそもんが何言うとる”とまで言われたらしい。メゲない人が病気になりはった」

「そうやったんか。寄合いは、ものごとがすぐに決まらんし、決まった思うても次にはひっくり返っとるし、簡単やないわな。家の序列が残っとるちゅう、嫌な面もあるわな。ああでもない、こうでもない言いながら、時間をかけて決まっていくちゅうことは、都会の人には馴染めんかもしれん」

「話をちょっとそらすかもしらんが、移住者が、むらの中での役割について行けんちゅうこともあるな。草刈り、夜回り、消防団、お寺や神社の……」

「まぁその話は、こちらがキチンと受入れ体制を整えにゃならんということで、ちょっとおいといてくれ。Ｆさんは、あの頃は、辛そうにしてはったが、幸い、全快しはったから良かったんやけど。よそ者の視点で、地域を活かす新しいことを提案してくれる人、その実現に向けて動いてくれる人がおらんと、前へ進まんもんな」

「それは言える。Ｆさんに感謝や」

**女性の活躍**

「話を変えるけど、女性が活躍しだしたな」

「そうや。さっき言うた鳥越さんとこの娘さんもそうやけど、最近、伝統料理をベースにして、見た目にも食欲をそそるような料理を出す店ができた」

「あそこの体験交流施設で、地元のお母さんたちが食事提供してるのも聞くな。やっぱり、地域の食材にこだわってな」

「地域の農産物を加工販売するグループもできた。いろんな種類の野菜の漬物、イチゴやブルーベリーのジャム、柿のジャム、それから、え～っと」

「ジャムづくりが始まってから、キウイがえぇ言うて、耕作放棄地にキウィを植えたおばちゃんも出てきはったぞ」

「特定郵便局やった建物を、地域の交流拠点として再生した女性も、40 代や思うが、いてはる」

「女性は、年代に関係なく活躍してくれとる」

「そう言や、俺たちの活動グループにも女性が増えたな」

「おかげさんで、俺ら男にはわからんような、買うてくれる人の目線や、来てくれはる人への気遣いがあるようになった」

「活動を始めてから 4 年目につくった NPO のメンバーが、この春で、30 人を超えた。若い女性もたくさんメンバーになってくれとる。俺らがいろいろ言わんでも、みんながやってくれとる」

「おいおい、年寄りみたいなこと言うな。俺らはまだ何も成し遂げたわけではないんやぞ。ここまで来るきっかけはつくったがな」

「うん、わかっとる。ここからや」

**地域エネルギー**

能美が話をさらに出してくる。「うちの息子がソーラーシェリングに取り組み始めた。野菜栽培と太陽光発電を両立させるんや言うて」

「若いもんは、新しいことに取り組む元気があってえぇな」

「また、年寄りみたいなこと言うとる」

「農業用水での小規模水力発電も始まった。地域の中に小規模やがエネルギー源がいろいろあるな。うまく、その場所で利用する仕組みが広まりゃ良いがな」

「あこに昔からある蕎麦屋さんが、水車を造って、石臼で粉ひき始めたら、えらい人気が出て、たくさんのお客さんが来てはる。土日は、行列もできとる。水利組合に了解もろうて、30m ほどの水路を掘って水を引いとる。水は農業用水に戻しとるから、田んぼ用の水が減るわけでもない。あこは 3 代目かな。まだ 40 代や」

「ほかの地区でも農業用水での発電と太陽光発電を組み合わせて、ビニールハウスの暖房に使われへんか、検討を始めとる」

「あこの農業用水は、流れが安定しとるが水量が少ないんで、そんな組み合わせになるんかな」

「そんでも、太陽光発電は、発電量が変動するんで、蓄電池が必要となって、そうなると、コストが高うなってと、悩んでられる」

「ほかにも、昔、水力発電所があったところで、発電所の復活プロジェクトを進めとる」

「バブル経済の頃に開発業者が入ってきて、別荘開発を始めたとこ、それが、バブルがはじけて放置されとったとこに、でかい太陽光発電所ができとんのやけど、あれは、もうちょっと、景観に配慮してくれんといかんな」

「バイオマスエネルギーは、岡山の山間部やら兵庫県西部の山間地で進んどるそうやが、ここらは無理なんかな。だいぶ前、隣の村でバイオマス発電の構想があったが、燃やすもんが足らん、安定供給できんちゅうて、前へ進まんかった。東部のいくつかの自治体が協力関係つくったら、安定して

燃やすもんはあると思うがな。林地残材は今もそのままや」
「自治体間の協力関係づくりは重要課題や。観光でもそうやが、ここらの自治体は、広域的協力関係づくりちゅうもんがヘタやなと思う。自治体の責任を問うとるわけやないが……。俺らが、近隣の自治体で活躍してはる方々と、もっとつながっていけば、自治体の感覚も変わってくるかも知れんな」

**マスコミ報道・情報発信**

「新聞が取材に来てくれた時は、うれしかったな。そんでも、インタビューなんか受けたこともなかったし、何言うてえぇんかわからんかったが、うまいこと記事にしてくれてた」
「その頃からかな、行政の見る目が変わったんは」
「見る目が変わったんは、NPO の設立と新聞報道の両方やろな。NPO の設立で俺らの本気度が伝わった。新聞に載るくらい価値がある活動やと評価された」
「行政からは、何か支援して欲しいことないかという言葉が出るようになったな。そんでも俺らは、行政に何もいらん言うてきたな。そしたら、行政の若いもんが休みの日に手伝いに来るようになったな。これで良かったんや」
「今のフェスティバルの運営には、行政から助成金が出とるがな。町を挙げてのフェスティバルに発展したんやから、フェスティバルのパンフレットは、観光パンフレットを兼ねたようなもんやし、そんなもんに助成金が出るんは、そんで良いかもしれん」
「俺らは、初めから今まで、俺ら自身が得するようなことは何もやっとらん。地域が元気になることをしてきただけや。パブリックな活動や。もともと、パブリックを意識してやっとったわけやないけどな」
「俺らは、おかげさまで、誰も生活に不安がなかったからできたんちゃうか」
「そういうことでもあるな。仕事先が少のうて収入が不安定な地域におったら、こんなことできんかったかもしれん」
「新聞は、毎年、取材に来てくれて、ありがたい。全国紙に取り上げられたこともあったな」
「県・町、観光協会などのサイトにも、たくさん掲載してくれるようになった」
「関わりをもってくださった方々が SNS で発信してくださっている」
「そのおかげで、さっき言うとったように、ほかの地域から視察に来られる方も増えた。これにはびっくりした。俺らがやっとることを参考にする価値があるんかいと思うとったが、いつの間にか参考にしてもらえることになっとった」

**地域情報誌**

「それから、あの彼がやってくれとるあれ」
「おいおい、健忘症にならんでくれ」
「地域情報紙や。地域の人らのことを紹介してくれとる。俺らのイベントを手伝ってくれた彼や」
「あぁ、わかった。吉永君や。地域おこし協力隊で来てくれとった、大阪出身で京都かどっかの会社を辞めて来てくれた。3 年の任期が終わって、こっちに定住してくれたんやな」
「そや。吉永君が出してくれた情報紙の役割も大きかったな。地域の人の情報を地域の人が知らんかった。今では、地域の人同士がつながるツールにもなっとる」
「人あたりが良い、それでおって芯を持っとる好青年や。地域の情報を、地域の人が知らんかったから、ありがたいツールになったな」
「うちの県の地方紙が弱くて、地域の情報を地域の人が知らんかったから、良いツールになった」
「吉永君が、この前、俺んとこへ取材に来てくれたんや。今度、俺と息子の農業を紹介してくれることんなった。そん時、彼が言うとった。“ありがとう”いう電話がかかってくるんやて。“地域のいろんな人のことを知ることができて、ありがとう”、“親戚がやっとることの意味を知ることができて、久しぶりにゆっくり話ができた。ありがとう”やて」

### 次世代へ引継げる基盤ができつつある

「人口は相変わらず減っとるが、農業粗生産額が久しぶりに増えたらしいぞ。黒大豆は相当に増えとる。30a 農業なんかも小さい動きや思うとったけど、消費者と直接つながる農業の形を見せてくれたんや。これから地域にもっと貢献してくれるやろ」

「この5年で、若者のIターンが10家族らしいぞ。息子・娘のUターンも増えとる。ほかの地域から、あたりまえに遊びに来てくれてはる」

「この辺りの人が集まって、ほかの地域の人にも混ざってもらって、何かやることがあたりまえになってきとる」

「以前は、行政が何もやらん言うて、行政にケチつけて、行政と地域の対立関係を煽っとるような人もおったが、最近は、“自分たちの地域は自分たちで”があたりまえや」

「JFKの大統領就任演説のあれやな。国が諸君のために何ができるかを問うのではなく、諸君が国のために何ができるかを問うて欲しい」

「今は“協働”ちゅう言葉がけっこう使われるようになってきとるが、当初は、行政の口からは言いにくかったやろと思う。国・行政主導で何でも進めてきたからな。阪神・淡路大震災の後や。1998 年に NPO 法ができて、その年の“国土のグランドデザイン”で、これからの地域づくりはあんたらの参加と連携や言うて……」

「地域の人らは、何でもかんでも行政がやるもんやと思い込んどった。あんたらがやらにゃいかん言われても、なにをどうすりゃえぇんか、まるでわからん時代が、10 年ほど続いとったと思う」

「ようやく、自分らでやりだして、苦しいことも楽しいこともわかってきた。自分らで次の世代へつなげていかんならんことがわかってきたな」

### 行政の雰囲気が変わった

「行政の雰囲気が変わったとは思わんか。俺らがイベントを始めた頃は、庁舎の雰囲気が暗かったが、今は明るうなった」と、能美が言う。

「そりゃ単に、お前が行った時、節電で暗かったんちゃうか」

「いや、それとは違う。町村合併後は、“とにかく経費を削れ、地域へ出向いたら要望を聞いてきて金がいるようになるから地域へ出向くな、庁舎内にじっとしとけ”やったんや。それが、今は、“金がなくてもできることがある。地域の方々の活動は前向きに支援しろ”となってきた」

「パーキンソンの法則ちゅうもんがあってな。いくつかあるんやが、そのひとつに、役人は自分らの利益のために仕事をつくり出すちゅうのがある。つまり、行政組織は、新しい仕事を取り込んで肥大化し続けるちゅうことや。イギリスの社会学者で政治学者のパーキンソンが 1950 年代後半に言うたことや。バブル経済が崩壊するまでは、これが当てはまっとったが、今は、肥大化したもんをどないして縮小するか四苦八苦しとる」

「河北も、うんちくかい。大学時代に知った話やろが、そんなこと、今はどうでもえぇやろ」

「すまん。余計な話やった。能美が言う、明るうなったちゅう話はわかる」

「やっぱり、住民が自ら動いて、凄いフェスティバルになったからな。どっかで聞いた言葉やが“住民発意のまちづくり”や。それを、行政が支援しだしとる」

神戸に縁がある金澤は、阪神・淡路大震災からの復興の過程で、神戸市が“住民発意のまちづくり”という言葉を使ったことを知っており、いつか、能美に話したことがあった。復興の過程で、市が主導できるのは区画整理という手法しかなく、それによって、交通利便を確保したり、延焼防止に資する広い道路を造るとのことであった。ところが、住民にとっては、以前からのまちの“つながり”が分断される、まちとは無関係な通過交通ばかりとなり、交通騒音も困るとなった。広い道路用地を確保できたとしても、まちづくりにはマイナスに作用するかもしれない。そこで、確保される道路用地をどのように使うのかを、住民の話し合いによって決めていった。例えば、道路は 2 車線分だけで、残りの用地

を、せせらぎが流れ、ベンチがある、みんなが過ごせる空間とすることとなった。こうすれば、広い道路は、まちを分断する空間ではなく、“つながり”の場所ともなる。従来の区画整理では、このような発想がなかった。これが、“住民発意のまちづくり”の例である。我が地域の“住民発意”とは少し違うが、まぁ良しとしよう。

「行政は、地域の活力を創らないかんちゅう使命感を持って、いろいろやっとったんや。温浴施設やら町並み交流館やらを整備した。よそからそこへ来てくれる人は増えたな。そんでも、活力が生まれることにはならんかった」

「手詰まりやったわな。活力を創ることの新しい企画の立案は、行政だけではどうにもならんことを、行政もわかってきた」

「行政は変わったな。住民の活動に、メンバーのひとりとして参加してくれる職員が増えたしな」

「今まで、住民が、自分らが何もせんで、行政に要求することばっかりやったから、“地域へ出向くな、庁舎内にじっとしとけ”ちゅうことやったんかもしれんな。垣根がなくなって、良い関係になっとるんちゃうか」

「金を使わんでも地域に貢献できることがあるちゅうことで、特に若い職員が生きいきしとる」

「住民も行政も、お互いに考えを出しおうて協力すりゃ良いんや。“協働”やな」。能美がまた、政策用語を使った。そういう解説的な言い方は、河北のものではなかったのか。それなら、あの先生に教えてもらった“共働”の方が良いのではないか。

最近の行政は、前向きであると感じる。先日、子ども園の隣に、母親向けのワークスペースを設けるという話が出ていた。子育てに関する母親たちと行政との懇談会の席上で出てきた話だそうだ。母親たちにとっては、うれしい話であろう。どこかの市長が駅前保育所という政策を掲げていたが、それでは、子どもを預けて、ほかへ働きに行けと言っているようなものである。

このワークスペースから、母親たちのコラボレーションが生まれ、新事業へと発展していくことを、金澤は期待している。女性の就職先が少なく、就業率が低い状況も改善できるかもしれない。

そして、このワークスペースが、母親たちだけではなく、大阪などへ通勤している人たちにサテライトオフィスとして使ってもらうことも想定しているのが良いと思う。往復 3 時間の通勤時間を、週 1 回でも、地域に関係する時間に振替えてくれる若手がいたら、さらに地域の活力が増すとの期待もある。

### 地域は活動のデパート

「能美は、誰よりも地域の新しい動きを掴んどるな。暇なんか」

「あほぅ。暇なもんか。フルに仕事しとるわ。お前らみたいに通勤に何時間も使うとらん。その時間分ぐらい地域で動いて、お前らに情報を渡さないかん思うてやってきただけや」

「すまん。余計なイチビリ入れてしもうた」

「能美は、俺らに、いろいろ教えてくれる。地域情報のデパートやな」

「その言い方は違うぞ。俺は、デパートウォッチャーや。いつもデパートの中を歩き回って、この売り場は新しゅうなっとる、ここには前はなかったコーナーができとるちゅうことを見つけとんのや」

「なるほど。うちらの地域にいろんなもんが出きてきて、地域が活動のデパートやちゅうことか。そのデパートを見て歩いとるデパートウォッチャーか。ありがとうな」

### 4 人が寄れば

「3 人寄れば文殊の知恵と言うが、俺は、最初に 4 人で取り組んだことも良かったと思うとるんや。3 人では、2 対 1 の状況が生まれて、1 人が疎外感を感じて抜けて行くちゅう話を耳にするもんな」

「俺たちは、曲りなりにも、この 10 年間、地域づくり活動を続けてきた。地域の仲間と一緒になってやることにになり、ほかの地域から多くの方々が年に何回も来てくださることとなり、その人たちとの会話のなかから多くのヒントをもらってきた。時々、この 4 人で、振り返りやら反省会やら、ただの飲み会

やらをやってきた。それぞれが、役割を担いあってきた。それが、3 人やのうて 4 人やったから良かった。そういうことやな」

「それから、俺ら 4 人とも、人を非難する能力がないちゅうことも良かったんやないか」

「そりゃ、能力やない。アホやと言うことや」

「うん。アホやろな。ただ、人を非難するんは、たいていは自分を守るために、相手の問題をあげつらって、自分を優位に置こうとする行為やろ。俺らは、そんなことしとるより、問題を確認して、先へ進む方が似合っとる」

「わからんままに走ったがな」

我々の活動がきっかけとなって、いろいろな活動グループができた。特に、女性グループは元気である。空き家へ新住民が入ってくれるようになった。子どもの数が増えた。新住民と地域との関わり方はまだまだ覚つかないが、新住民へのサポート体制ができている。

地域づくり関する知識は増えた。地域での活動のノウハウもわかってきた。頭でっかちになってしまうと実践は無理であろう。知識は知識として引出しに置いておき、折々にうまく引き出すことが重要なのであろう。

「この 10 年、俺らがやってきたことは、どれくらい役にたったんやろな。10 年前の停滞しとった状況をゼロとして、今、いろんな人たちがいろんな活動をしてくれて、活気がでてきた、もちろんゴールへ到達したわけではないんやが、今のこの状況を 100 とすると、俺たちがやってきたことは 20 やろか、10 やろか」

「俺らは、20 やったかもしれんし、たったの 5 やったかもしれんが、そんなことは、どっちでもええやろ。いろんな人たちがいろんな活動を始めてくれたきっかけになったことだけは確かやな」

「俺は、行政の役割は何か、地域住民がやるべきことは何かと考えたことがなかった。そんなことは全く関係なしに、お前らと一緒にイベントを始めた。後で、“国土のグランドデザイン”やら、“国土形成計画”やら、“協働政策”やら、いろんなことを知ったがな。お前らと一緒にやれたことに感謝しとる」

「終わったようなこと言うな。お互いに心の中で感謝しとる。けど、これからや。ここからや」

3 時すぎから飲み始めて、もう 10 時に近い。石川が金沢で買ってきてくれた酒は、早くに飲み干した。金澤が準備していた地元の銘酒も、一升瓶が 2 本目である。誰も言い出さないが、そろそろお開きにしなければならない。

年度末は何かと忙しいサラリーマンがいる。荒おこし後の田んぼに、雑草を埋め込み、土を乾燥させる作業にとりかからなければならない者もいる。実は、金澤は、2 年半前に、前者ではなくなり、後者になった。

## 第 7 章　これから

金澤には、走り続けてきた 10 年という歳月は、長かったようでもあり、あっという間であったようにも思える。地域の活力を創ることについての基盤づくりはできたと思うが、何も成し遂げたわけではない。大学時代に、教授が言っていた言葉を思い出す。「10 年は変わる芽は出ているが何も変わってはいない、20 年は変わったようでいて変わっていない、30 年ですべてが変わる」とのことであった。

そして、都会の 10 年と田舎の 10 年の違いにも思いが至る。自分が通勤していた都会では、企業が次々と新しい状況を創っている。新しいビルが造られ、そこが新しい人の流れを創りだし、新しい活動の場となり、新しい状況が生まれていくが、この辺りでは、そのような動きは本当に少ない。ロードサイドショップが徐々に増えているくらいで、なかなか状況は変わらない。それでも、ずっと我々の活動を気にかけて、折にふれ覗いてくださる、あの先生の言葉も思い出す。

「変わる状況と変わらぬ価値がある。技術が発展すれば、状況は必ず変わる。それでも、状況の変化にもかかわらず重要な価値は残る。自分たちの地域に必ずある重要な価値を見つけ出し、大切にせよ」

金澤は、2 年半前、勤めていた会社を、次長職を最後に、早期退職した。親父の農業を継いでいるが、ここまでに力を入れてきたのは、ソーシャルビジネスであるという方が適切かと思う。地域が抱える課題をビジネスという手法で解決していくと決めて退職した。

初めての話し合いの時に河北が出した「山あいの地域でおばぁちゃんたちが広い畑を作り、大量にできる作物を腐らせている」という言葉がずっと気になっていて、おばぁちゃんたちの作物を集め、県都にできた産直市場へ納入する仕事を、退職の直後から行ってきた。“おばぁちゃんの畑”というネーミングによる小さな創業である。

おばぁちゃんたちには、「食べてもらえたらうれしい」、「孫に小遣いをあげられる」と喜ばれている。産直市場へ来られる消費者の方々からは、「形は揃っていないが、無農薬で安心、味が濃い」と評判が良い。これは、生産者と消費者の“思いをつなぐ”仕事であり、社会的意義があると思っている。週に 3 回だけで、収入と言えるほどの収入はないが、田畑があるから、生活していくことの心配はない。

息子も娘も自立した。息子は、縁あって石川が所属する医療機器会社の研究職に就いた。娘は、県内の大学を卒業し、県都で就職したが、この前、彼氏を連れてきた。学生時代からのつき合いとのことである。妻はうれしそうであったが、金澤は、「お前はまだ、コロの相手しとったらえぇのに……」と思ってしまった。コロは、老犬になっているが、まだまだ元気である。ただし、相変わらず、金澤に朝の挨拶をするつもりはないようだ。

### 道の駅の運営責任者に

昨年 11 月、行政から頼まれて、道の駅の運営責任者を引き受けた。農業との両立は簡単なことではないと思い、農地の一部は能美に耕作支援を依頼した。82 歳になってはいるが、まだまだ元気な親父にも分担してもらうこととした。

道の駅は、農産物直売所が 350 ㎡、レストラン 80 席、観光案内所という構成である。直売所内にも案内所内にも、十分な休憩スペースを設けている。直売所内には、ジュースバーもある。案内所内には、幼児用の遊び場もある。

2 度も教えてもらいに伺った滋賀県北部の施設のように大きくはないが、決して小さいわけでもない。近隣の町にある農産物直売所は、75 ㎡の店舗面積しかないが、約 100 人の出荷者がおられ、約 21 万人の年間来訪者があり、約 3 億 2 千万円を売上げている。

“おばぁちゃんの畑”の作物は、道の駅に一画を設け、そこへ入れた。不揃いの野菜が並ぶこの一画は、訪れた方が必ず覗いてくださる人気コーナーでもある。以前からあった農産物直売所は、出

荷者の方々も、運営側の方々も、道の駅の直売所へ合流された。
このような公共施設の観光案内所は、景勝地や神社仏閣、祭りなどを紹介し、民間の営業施設等はあまり紹介しないのがふつうであるが、ここでは、すべてを紹介している。大フェスティバルのパンフレットに記載されているすべてである。民間の営業施設等を含めて、すべてが、この地域の資源であり、来訪された方々にお伝えしたい、知っていただきたいものである。
ちょっと言っておきたいのは、トイレのことである。トイレは、この施設を利用される方々のみならず、通過される方々であっても利用されれば良いとの考え方で、かなり広い面積を確保している。清掃は、快適に利用いただけるように、2 時間ごとに行っている。ある道の駅で、コスト削減のために、トイレ清掃を 1 日 6 回から 3 回に減らしたところ、立寄り客が 2 割も減ったとの話を聞いたことがある。

道の駅の名称は、“道の駅つながり”となった。能美と金澤が提案した名称である。先日、大阪から来られた 50 歳代と思われる女性に問われた。
「道はつながっているのに、なぜ、わざわざ“つながり”なんですか」。こう聞かれるのはチャンスである。適切にしかもできるだけ短く伝えなければならない。
「10 年前に地域を元気にしようとイベントを始め……。我々は、“つながり”に助けられ、“つながり”に生かされてここまで来ることができました」
1 週間後に、その女性とまた出会った。また来てくださった。ここを気に入ってくださっている、ありがたいと思えた。

**道の駅の開設準備**

この町に道の駅を造ろうという話が出たのは 5 年前である。そこから、金澤たちは、役場へ、どのような道の駅をつくるのかについての提案を何回か行った。滋賀県北部の道の駅で聞いてきていたことが参考になった。
3 年前に、役場から、出荷体制をつくることについて協力を求められ、能美と金澤が出荷委員会のメンバーとなった。道の駅への出荷に興味を持つ 20 人・団体が第一次メンバーとして参加した。委員長には能美が、副委員長には金澤が選ばれた。
黒大豆を復活させ中京市場を席捲した黒大豆生産グループの方々も出荷委員会のメンバーとなった。黒大豆生産グループは、金澤の父親が引っ張ってきたが、4 年前、若手に(と言っても 50 歳代後半であるが)代表を引継いだ。

委員会では、まず、滋賀県北部の道の駅へ視察に寄せてもらった。能美と金澤は、かつて快く接してくださった運営責任者の方に、丁寧なあいさつをした後、みんなを案内してもらった。みんなは、お客さんの多さ、商品数の多さに驚いていた。そして、今の自分たちの状況と繁盛している施設の状況とをつなぐイメージが湧かなかったようである。かつての自分たちもそうであった。地元へ帰ってからの委員会の会合では、恐れをなすような発言も出たが、“着実に一歩づつ”を合言葉に、少しづつ前へ進めていった。
やらなければならないことは山ほどあった。金澤は、何回か有給休暇をとって対応することとなった。早期退職を真剣に考えざるを得なかった。

“着実に一歩づつ”ということではあるが、加工食品の試作品は、開業の 2 年以上も前から一部の有志にお願いして作ってもらった。みんなでそれを試食して意見を言い合った。試作品、その改良版は、夏のイベントにも出してもらい、いろいろな意見をいただいて、また改良することを繰り返した。加工食品は、味はもちろんのことであるが、パッケージにもこだわった。手にとってもらえるデザイン、この地域を感じてもらえるデザインでなければならない。

こうして、開業時に、本当に自信をもって提供できるものとして、みなさんが精魂込めて作られる味が濃くおいしい多様な野菜に加え、この地域の名物とも言える加工食品を30種100品つくることができた。富有柿を使ったお菓子、平核無（ひらたねなし）の干し柿、山菜の佃煮、フキノトウ味噌、ムコダマシを使った粟餅、完熟イチゴのジャム、完熟トマトのジュース、収穫から3時間以内に加工した野菜ジュース、収穫した日に漬けたキュウリやハクサイの浅漬け、地元の果物を使ったワインなど、ここでしか買えないものばかりである。

金澤が、名物の中でもスゴイと思っているのは、数量は少ししか提供できないが、能美の師匠S氏が出してくださった“サンショウの花の塩漬け”と“ユズの葉のパウダー”である。

“サンショウの花の塩漬け”は、食欲が落ちる夏場に、ご飯に乗せて食べると、ご飯が進む。これは、大量の花を摘みとってきても、できる量は極めて少なく、大変な労力を伴う、貴重な商品である。

ユズの葉のパウダーは、ほのかにユズの香りがして、いろいろな料理に使えるのであるが、金澤は、サラサラの塩と混ぜて使う。こうすると、塩をどの程度かけたのか、色がついていてわかりやすい。昔からの智慧を受け継ぐ人がいらっしゃることがうれしい。

S氏の工房へは、年に数回、4人で、あるいは若手メンバー4～5人を誘って、寄せてもらっている。いつも季節の草木を大鉢に活けて迎えてくださる。伝統的調理法による季節のものを出してくださる。食材にエネルギーが満ちている旬のものがおいしい。若手は、伺うたびに、作物のこと、植物のこと、木材の性質や利用方法など、多くの知識を持ち帰っている。

それから、キュウリやハクサイの漬物は、収穫したその日に漬けることを徹底している。キュウリやハクサイは、生きているうちに漬けるとうまい。死んでしまったものを漬けても、固く、歯ざわりが良くない。

こんなことができるのは、地域内での生産者と加工者の協力関係ができているからこそのことである。地域の中での1×2×3＝6次産業の体制ができてきた。1＋2＋3も6であるが、協力関係が相乗効果を生みだしている状況は、掛け算の1×2×3の方がふさわしいと思える。

農産物については、有機肥料の使用と徹底した減農薬を出荷者にお願いした。これには、多くの異議があったが、今から土を肥やしておかなければ、お客様に納得いただける、何度も買いに来てもらえる野菜にはならないと、粘り強く説得を続けた。お客様にとっての安全・安心・おいしいが最優先される必要がある。

売れ残った野菜の取り扱いについても、いろいろと議論があった。新鮮なものを新鮮なうちにお買い求めいただくことを基本にすれば、売れ残り品は、道の駅が処分すべきである。いや、出荷者の責任で引き取るべきである。しかしそれでは、どちらにしても処分することになってしまう、加工品にすることができないかとなり、おばちゃんたちの加工所において、様々な加工品が開発され始めている。

もうひとつは、その日のうちに売り切れる数量の見極めが必要なのであるが、出荷量と販売量との関係を把握することはなかなか難しい。商品が早くに売り切れれば、後から来られたお客様の期待を裏切ってしまうことにもなる。このため、出荷者の約半数の方々には、売れ行きに応じて追加で出荷してもらうことをお願いしている。ある程度の見極めには、あと数ヵ月はかかるであろう。

そして、野菜の形の良し悪しは問わないこと、出荷量が多くても少なくても出荷者を差別しないこと、車を運転できないお年寄りの出荷をサポートすることなども申し合わせている。

委員会での議論を始めてから2年目になると、出荷希望者が約80名に急拡大した。初年度は、加工食品の試作に取り組んでくれた5社以外を農業者が占めていたが、食品加工業、酒造業、農家のおばちゃんのグループ、福祉作業所、里山クラブ、山野草の保全に取り組むグループ、何も生産物を持たないが何かしてみたいという30歳代のサラリーマンの奥さんのグループなどもメンバーになっ

てくれた。中には、新事業開発を目指して参加してくれた鉄工業の会社、タクシー会社もあった。
もちろん、田んぼ・畑・柿のオーナーに農地を貸しておられる方々も、大阪から移住してくれた 30a 農業者もというように、農業者も増えた。
そして、道の駅の開業時には、出荷者が 120 人・団体を超え、これまでの地域では考えられないくらいの大集結となった。

おもしろかったのは、イチゴ農家と 30 歳代のサラリーマンの奥さんのグループとの関わりであった。彼女らは、イチゴ農家へ見学に寄せてもらった時、出荷作業中に廃棄の方へと仕分けられる完熟品に疑問を持った。出荷からスーパーマーケットに並ぶまでに 2～3 日かかることがあり、完熟品を出荷すると、店頭で腐り始めることがあるために廃棄されていた。また、加工の人手がないから廃棄されていた。その比率は、摘んできたものの約 3%とのことであった。廃棄される完熟イチゴをジャムに加工できないかとの思いを持った彼女たちが、粘り強い交渉の末、わずかな値段で譲ってもらえることとなり、道の駅に、完熟イチゴのジャムが並ぶこととなった。商品名は、“立岡さんちの完熟イチゴで作ったこだわり母さんたちの手づくりジャム”と、とても長いが、とても人気がある。
ある時、このネーミングについて、彼女たちに、ちょっとしたイチビリを含めて聞いてみた。「立岡さんに敬意を表してのネーミング、ありがとう。ところで、なぜ、“母さん”なんですか。みなさんは“お姉さん”ではないんですか」
「私たちは、自分を“お姉さん”と思っているわよ。でも、“お姉さん”では、調理がヘタそうで、おいしい感じがしないでしょ。実際、私たちは“お母さん”でもあるのだし、“お母さん”は、家族に、安心なおいしいものしか買わないのよ」
なるほど、俺は、これまで、買物は女房まかせで、食品を買うことが殆どなかったが、彼女たちは、食品を買うことに関しては、俺よりはるかに経験が豊富である。そんな消費者の視点を入れてくれているのだ。お客様の“ニーズ・ウォンツ・感性”という言葉を、出荷者に何度も投げかけながら、お客様と商品をつなぐ言葉を考えたことがなかった。みんな凄い。
彼女たちは、今、イチジク、ブルーベリー、ブドウにねらいを定めている。イチジクは、道の駅への出荷を前提とすれば、完熟品の方が喜ばれるから、年に 60t も生産する大規模イチゴ農家との関係とは違い、交渉は厳しいかもしれない。
ブルーベリーは、摘み取る時に、完熟の実と完熟前の実が一緒に採れてしまう。農協を通じて百貨店へ出すものは、完熟品だけを詰めるように指導され、完熟前の実が廃棄処分と聞いたことがあるから、それをうまく加工する方法を見つければ、おもしろい加工品ができるかもしれない。近くの町のトマト農家が、摘果した青いトマトをジャムに加工していたのを見たことがある。
ブドウは、どうだろうか。これまで、主として大阪へ出荷されているのだから、イチゴと同じような展開にできないか、彼女たちの積極性と熱意に期待している。

野菜農家・果物農家と酒造業とのコラボレーションは、人気のジュースやワインを生み出した。鉄工業の会社、タクシー会社は、委員会メンバーの農家の仲介により、高齢農家の田畑を借りることができ、農業へ参入した。両者とも、まずは、この地域の特産品となった黒大豆の生産に取り組みだしている。今後、生産品目を拡大するそうである。

商品を作るということは、簡単なことではない。食品加工業の経験がない者が商品を作るには、勉強しなければならないことがたくさんある。このため、出荷希望者向けの連続講習会を開いてきた。これには、県と町が講師代などを支援してくれた。
出荷者は、商品開発の全体像と流れ、商品の企画・コンセプト、事業計画づくり、商品の販売戦略とマーケティング、商品のデザイン、商品づくりに関わる法令・資格・免許・知的財産としての取り扱い

などを、理解するだけでなく、これらに関連するノウハウを獲得していくことが重要である。食品加工業以外で加工食品の出荷を考えている方々のほぼすべてがこの講習会に参加された。

そして、出荷者の間で、加工食品の試作品の評価、改善提案を行う自主的な組織ができた。とてもうれしいことである。世話役は、「立岡さんちの完熟イチゴで作ったこだわり母さんたちの手づくりジャム」を作ったメンバー 6 人である。評価会の開催時には、SNS をうまく使い、ほかの地域に住む知人・友人にも声をかけてくれている。おかげさまで、都会のお客様のニーズ・ウォンツ・思いの把握にも成功している。

### 施設の企画・設計段階から

金澤は、出荷委員会への参加と並行して、施設建設委員会へも参加することとなり、意見を言い続けた。自分が運営責任者になるとは夢にも思っていなかったが、施設運営のイメージは、ある程度はできていた。出荷者にもお客様にも喜んでもらえる、滋賀県の道の駅で見たような、そこにいることが楽しい店を造りたかった。

金澤たちの活動がきっかけとなって道の駅の建設への取り組みが始まったこと、金澤が総務部所属とは言え、建設会社に勤務していたことを知った設計者が、休日にも関わらず訪ねて来て、思いを聞いてくれたこともあり、満足できる設計図に仕上がった。

従来、建築物の企画・設計の段階に、運営者が参加することはまずないが、使い勝手が良い建物にするためには、運営者の参加が不可欠である。金澤は、委員会へ参加した当時は、運営者ではなかったが、結果として、運営者が参加した企画・設計となったのである。

### 地のもんしか置いていない

幸いにも、道の駅の出だしは順調である。先日、大阪から来てくださったマダムが「ここは、地のもんしか置いてないのがえぇね。野菜は新鮮やし、また、来とうなるわ」と言ってくださった。また、「こんなところには、“あるもんがあれば”えぇんやわ。ないもんを持ってくる必要はない。新鮮なもん、地域の人たちの一生懸命が伝わってくるもんがえぇ」とも言ってくださった。

生活に必要なものを揃えておかなければならないスーパーマーケットとは違っていて良いのだ、地域にこだわって良いのだと思えた。

### レストラン

施設の中にはレストランを設けている。営業時間は 11:00～20:00 で、席数は 50 席である。ここも、基本的に地のものしか使わない。地元の食材による昼食バイキングが人気である。大阪からのお客様が多いが、県内の方々の方がもっと多い。近くの人から評価されていることがうれしい。

シェフは、この地域の出身者で、大阪で和食の修行をしてきた 42 歳である。休みの日には、生産者を訪問し、収穫作業を手伝っている。生産者との対話を重ね、思いを知り、信頼関係を築いている。忙しい昼食時間帯にも、フロアへ出て、お客様に、食材の紹介をしている。「生産者の方々の思い、この地域の産品とお客様をつなぐのが自分の仕事」と言ってくれているのがうれしい。

地元の素材にこだわることは、滋賀県北部の道の駅から、また、淡路島の食文化の発展からも学んだ。地域の特性・固有性を活かすことが重要なのだ。ただし、来てくださる方々に感謝しつつ、精一杯の“おもてなし”を行うことが大前提である。心しよう、スタッフときちんと共有しようと思う。

この地域には、シェフが自信を持ってお客様に提供している豊富な種類の、安全・安心で味が濃い野菜に加え、牛肉、豚肉、鶏肉、シシ肉、シカ肉がある。シシ肉と地元野菜を使ったコロッケ、数種類の山野草を添えたシカ肉ステーキは人気メニューである。ドクダミ、ヨモギなどを使った山野草茶は全 5 種類を無料で提供している。

魚に関しては、海がない県であり、アユとアマゴぐらいしかない。このため、海の魚だけは、3 年前に

寄せてもらった淡路島南部の漁港で知り合いになった、魚市場の仲買人から直送してもらうこととした。その漁港は、淡路島では最大規模の漁港であるが、同一魚種が大量に獲れる海域ではなく、多様な魚が獲れるところである。週に3回、定額で、“その日に何が獲れるかわからないが、その日に獲れたものしか送らない”ということで合意した。送られてくる魚種も数量も大きさも、当日にならなければわからないが、後はこちらの腕次第である。調理スタッフには、無理を聞いてもらっている。獲れた翌日の昼に、数量限定で刺身や煮つけを提供しているが、特に地元の人に大人気で、すぐに売り切れている。

何人ものお客様から、「淡路島へ連れて行って欲しい」と言われており、近々、バス旅行の企画をしようと思っている。我々だけではなく、この地域の方々が、ほかの地域を味わいたい、ほかの地域とつながりたいと思っていらっしゃることが重要であると思う。魚市場の見学もコースに入れよう。

### 道の駅の運営責任者として行うべきこと

道の駅は順調にスタートしたが、道の駅の運営責任者としてやらなければならないことは何かを、金澤は考え続けている。2年半前から農業を始めているが、商品としての農作物に関する知識はないに等しい。店舗運営に関しての知識やノウハウは、もちろんない。

できることの第1は、生産者・出荷者の方々の現場へ足繁く通わせてもらい、作る人の思いを汲みとらせてもらうこと、生産・出荷状況を見せてもらい、店へ来てくださった方々に自信をもってお奨めすることである。

第2は、お客様とできるだけ話をさせてもらい、ニーズ・ウォンツ・思いを聞かせてもらい、それを商品構成、新商品開発などに反映させること、お客様の行動をつぶさに観察させてもらい、そこから店のレイアウト、スタッフの対応の仕方をはじめ改善すべきことを見出して改善することである。

第3は、この施設の理念、運営方針をスタッフの方々と共有し続けることである。また、スタッフそれぞれの事情を勘案し、それぞれが希望する働き方を実現させていこうと思う。スタッフの中には、一生懸命と“もてなし”は誰にも負けないが、認知症の親の介護をしている人、小さな子どもを抱えている人もいる。地域の仲間が仕事を通じて輝き続けられるよう支援していきたい。

さらには、近隣の道の駅と何らかのつながりを持てないか、商品の補完体制をつくれないか、お互いをPRできないかとも思う。

なお、第1・2の事柄に関連して、店の中で、金澤が工夫していることがある。POP広告である。当初は、生産者をできるだけ紹介しようとしていた。例えば、柳本さんは、毎日、野菜に話しかけながら、生育を喜びながら……というような文言を考えていたが、出荷くださる全員を別々の言葉で紹介することが難しいことと、特定の生産者を支援することになるとの指摘があって、店側が作成することを断念した。そのことは、出荷者自身が考え、買ってくださる方々に語りかけるPOP広告となっている。もちろん、POP広告なしで、見た目の鮮度で勝負されている出荷者もおられる。

金澤が行っているのは、野菜の特徴と料理法の紹介である。それを見ながらひと回りすれば、夕食のアイデアが生まれるようなものを心がけている。楽しい、役に立つ店にしたいと思っている。

### 県下全域への貢献

それから、少しの野望も持とうと思う。それは、県下全域に“おもてなし”の精神を広めることである。この県の人たちは、“おもてなし”の精神に欠けているのではないかと思うことがよくある。特に、県都ではそうだ。県南部には“お接待”という文化が残っているが、県都では、大仏様のところへ来られた方々から、適切な言葉ではないが、ふんだくってきたからなのだろうか。

県下全域で観光に来てくださった方々へのヒアリング調査をした結果を聞いたことがある。“おもてなし”に関する評価は、圧倒的に県南部地域の方が高かった。今でも、県都へ行くと、お客様のニーズ・ウォンツ・思いをよく考えていないのではないかと思うことがある。

この県の観光入込客数は、近年、4,000 万人を超えているが、殆どが日帰りの方である。その日帰りの方が使ってくださるお金が 4,500 円ほどに止まっている。京都市への日帰りのお客様は 7,500 円程度を、神戸市への日帰りのお客様は 8,500 円程度を使われるそうである。京都の知り合いに、「奈良はのんびりできるところだからよく来る。買いたいものがなくて、お金を使わなくても済むから」と言われたことがくやしい。神戸に住む大学時代の友人の奥さんは「奈良らしい、友だちとお茶する時に持っていけるおみやげが欲しいと思って探したがなかった」と言っているとのことであった。お客様のニーズ・ウォンツ・思いを把握していないのだろうか。“おもてなし”の精神があれば、お客様が欲しいものを提供できるはずである。

神戸の店で、アルバイトの女子学生に、「これの素材はどこで採れたものか」と聞けば、いったん下がって、答を持ってきてくれる。奈良では、おばちゃん店員が多いが、同様の問に、「私、知りません」との答である。すべての店ということではないが、人の流れが多い場所でのことである。店員には、お客様と接する最前線にいて、お客様のニーズ・ウォンツ・思いを知り、それを商品に反映させていく情報として、製造スタッフや経営者に伝える重要な役割があるはずなのに……。スタッフ教育ができていないのかと思ってしまう。我が道の駅で、そんなことがあってはならない。

そして、これは、店舗の話ではないが、ある人が言われていたことまでも思い出す。「ふつうジャンケンをする時は、“最初はグー、ジャンケンポイ”でしょう。それが、ここでは、“最初はグー”ではなく、“最初はノー”なんですよ。新しい提案ができないところですね」。お客様の指摘や提案に対して、こちらの都合で、最初から、できない理由を述べるような対応があってはならないと思う。

この道の駅を成功させて、この施設のコンセプトである“おもてなし”を県内全域に広めていきたい。県内には、良いものがないわけではない。むしろ、たくさんある。それは、0.1 カラットのダイヤモンドかもしれないが、地域が育んできた価値あるダイヤモンドである。その良いものが、“おもてなし”というベースの上に乗ることによって、より輝くはずである。他地域との交流の拡大と地域経済の浮揚は、そこからでしかないと思える。

### 友人たちの動向

能美は、高齢農家に請われて、耕作請負地を増やしている。そして、変わらず、地域内で新しく萌芽した活動の支援を行っている。このような支援はとても重要である。能美の活動が、地域内の新しい活動の数を増やしていくこと、それらが定着していくことに、金澤は期待している。

能美の息子は、30a 農業に挑戦中である。これはかつて、石川が参考事例として挙げてくれたものに類似したものである。また、畑に適度な間隔を開けて太陽光パネルを設置し、作物にとって最適な日照量を確保しつつ発電を行うソーラーシェアリングにも取り組んでいる。

「あいつは、机上の計算ばっかしとる。このあたりの平年のこの時期の日照量がこんくらい、可動式にしとる太陽光パネルの隙間をこんくらいにすりゃ、この野菜に最適な日照量を確保できて、発電もこんくらいできるということやわな。この前、太陽光パネルを、その時その時の日照量に合わせて自動で動かすプログラムづくりもやっとった」

「お前んとこの息子は、農学部やのうて、確か、工学部やったな」

「機械工学や。そのくせ、急に、帰ってきて農業やるちゅうて言いだしたんや。なんでも、大学で植物工場のことを学んで、農業に興味が湧いたそうや」

「そりゃ、頼もしいやないか」

「そんなことあるかい。計算ぐらい俺でもできるわ、言うてるんや。数値計算だけで作物ができたら、百姓は苦労しとらん。百姓なめとんのかちゅうことや」

能美は、安定した環境を造り、そこで作物を育てる食物工場と、地域の気候風土の中で優れた作物を育てるのとでは、雲泥の違いであると言う。変化があってあたりまえの自然環境の中で、味が濃く、風味豊かに、逞しく育った野菜こそが本物の野菜であると考えている。そのために、有機肥料をすき

込み、ミミズなどの分解者の力を借りて土づくりを行っている。
「お前は農学部やから、作物に詳しいわな」
「農学部やから、作物のことは、それなりに習うた。その後、種苗会社におったから、栽培実験はいろいろやった。ほんでも、実際に農業やってみたら、マニュアルどおりにはいかん」
「そんなもんか。農業ちゅうのは、生半可ではできへん言うことか」
「そや。大学で植物工場を学んどっても、今、息子がやっとるのは、露地に太陽光パネルを立てとるだけの露地栽培や。数値計算だけでできる世界やない」と言いながらも、能美の顔には笑みが浮かんでいる。息子が帰って来て、一緒に住んでくれて、うれしくないはずはない。
「親の言うことは聞かん。まぁどこも一緒かもしれんが……」
「そやな。田んぼ・畑のオーナー制やっとられるところでも、親の言うことは聞かんが、オーナーさんの言うことは聞くちゅうとられたな」
「それがな、もうひとつ、生意気なこと言いやがる。こっちの目途が立ったら、次はドローンを使うて、親父の米づくりを支援するシステムを創る、とぬかしやがる」
能美の息子が考えているのは、水田の管理だそうだ。ドローンを飛ばして、水温・地温、生育状況のデータを取得する、それによって、水の供給量、最適な追肥時期を見極める、目標は、米の品質と収穫量の向上とのことである。
能美の息子は、親とは別の農業を模索しているようである。野菜を買ってくださる方々との直接的な“つながり”、信頼関係がある農業、先端技術の活用による農業の効率化・高度化を目指している。この町へ移住してきて30a農業を実践している30歳代前半の人と、既につながっている。金澤は、この町が新しい農業形態の先導地のひとつになり、都市住民との日常的な交流が増える、農業が成長産業になるという期待を抱いている。

石川は、医療機器会社の取締役営業部長になった。最近は、自ら営業に突っ走るのではなく、難しい交渉ごとや成約後のお礼のために、部下に取引先へ連れて行かれることが多いと言う。第一線の営業の方が楽しかったと言いつつ、まんざらでもない様子である。貫禄たっぷりになってきたのは、役職の成せるわざなのか、飲みすぎなのか。
酒を飲んで談笑する時、みんなを煙に巻く話術は、ますます冴えつつある。そんな話術を駆使しながら場を和ませ、取引先にも部下にも信頼されているようだ。会社の後輩となった金澤の息子のことを気にかけてくれ、時々、息子が所属する研究所を覗いてくれているようだ。
石川は、これまでと同様に、これからも、行く先々で情報を仕入れ、我々にとって重要な参考事例を持ってきてくれるであろう。

河北も、銀行で役員になった。河北の銀行では、NPO支援の仕組みをつくって8年になる。どこのNPOも、事業資金が不足しており、特に、事業を請け負った時などに、資金が不足する。この資金をごく低利で融資してくれ、NPOにとってはありがたいことである。
また、地域産業支援の分野においても、数年前、新しい仕組みをつくった。従来は、個別企業への融資という支援のみであったものを、地域の企業に対する投資ファンドを設けた。融資とは違い、企業の株式を買い取るという方法である。企業は成長後に株式を買い戻す。収益が出るまでに長期間かかる業種にも対応する。企業は月々の返済がなく、成長を長い目で見てもらえるようになっている。新規創業にも積極的な支援を行っており、最近、地域産業に元気が出てきているのは、そのおかげでもあるのだろう。
河北は、さらに、伝統技術の継承と復活についても検討してくれている。ひとつは、後継者確保への支援である。もうひとつは、プラスティックのゴミが様々な環境問題を引き起こしていることから、天然素材が見直されるはずだとして、木工産業の復活に向けた研究会を立ち上げた。

仲間うちの会合では、出される問題について、対応できないことの解説ばかりしていた奴だが、実は、出された問題をキチンと捉え、金融面での対応策を考え、講じてくれていた。今後とも地域産業の発展を支えてくれることを期待している。

### 俺たちにできることは？

俺たちにできることは何かについては、何度も意見を交わした。

「まずは、俺たちが何かすることや。みんながマネてくれたら、おもろそうや言うて一緒にやってくれたら、広がりがつくれるんちゃうか」

「時間はかかるかもしれんが、みんなで考える機会をつくることや。問題を共有すること、地域の将来像を議論して共有することや。そこから、どのようにすれば将来像へ近づけるのかを考えることや」

どちらも正しいのであろう、どちらも必要なのであろうと思える。将来像を共有できたとしても、活動経験がある仲間がいなければ、新たな活動に着手し現場を動かせることはできない。逆に、まず何らかの活動に着手したとしても、将来像という行き先が見えていなければ、右往左往を繰り返すだけである。

わからないままに、まず行動に移したことが思いだされる。それがなかったら、地域づくりシンポジウムへ参加し、また地域プランナー・コーディネータ養成塾へ入り、多くの学びとたくさんの協力者・仲間を得ることにはならなかったであろう。その塾での学びから、合意形成の大切さを意識し、問題の共有、地域の将来像の議論と共有へと舵を切り直したことも思いだされる。その後に、まず行動して得た教訓やつながりが生きてきたことも確かである。今、様々な活動を始めてくれている若い人たちに、俺たちの経験を伝えておこうと思う。

### 主体性をもって取り組む

「地域が主体性を持つことの大切さも学んだ。資源発見のために、地域計画を専門とする、あの先生に来てもらった。ここより奥の山あいの地域の例を教えてもろうた。“見えるすべてが資源である”と言わはった。そこから、自ら資源を発見することを心がけた。来てくださった方々に教えられたんやが、先生に言われて、資源を見つけるちゅう意思を持っとったことが役に立っとる」

「俺らは、この地域の住んどるけど、都会との行き来も日常的にやっとる。そんな俺らが資源を発見せなあかんと思うた。都市住民の目線、特に子どもがいる親の目線でみると、ここは、自然資源の宝庫やちゅうことが見え始めた」

「最初に調査に行った兵庫県の真ん中で会った大阪のおばちゃん、石川が毒気に当てられるくらい強烈やったが、あの大阪マダムの目線でみると、どの資源が魅力的かちゅうことも考えた」

「次は、俺らが主体的に資源活用を考えることが必要やった。来てくださる方々の“ニーズ・ウォンツ・思い”を想像しながら資源活用を考えると、いろんなことができるちゅうことがわかってきた」

「その場での販売イベントだけやのうて、その場を起点として 1 時間半ほどハイキングして、この辺りの里山・小川・畑を感じて帰って来てもらって、ここらの昔からのサトイモ汁を 5 円で食べてもろうた」

「あのハイキングは、里山やら畑の持ち主への根回しが不十分で、後で怒られたが、参加者には、喜んでもらえたな。5 円は良いアイデアやった。本当に“ご縁”が生まれ、その後も続いとる」

「イベント会場へ来てくださった人たちに、地域のうまいもん処を紹介した紙を渡したんも良かったようや。俺らは、地域資源を広く知って欲しかっただけやが、うまいもん処から感謝されたし、来てくれはった人からお礼の手紙も貰うた」

「いろいろな地域資源を組み合わせると、楽しんでもらえることがわかった」

「地域が主体性をもってという意味もようわかった」

「5 年目やったと思う」

「そやな。2 回目のイベントの後、しばらく落ち込んで、その後、地域づくりシンポジウムへ参加した。

そこの交流会で、手厳しく指摘された。次の年の 6 月から、地域 P&C 養成塾でいろいろ教わった。そこから、俺らの夏のイベントへ来てくれはる人が徐々に増えて、5 年目に急に増えた。1,000 人や。いきなり倍や。あたふたしたが、うれしかったな」

### 小さな成功が地域の雰囲気を変える

「俺らのたったひとつの、あの小さな成功が地域の雰囲気を変えたな」

「あいつらでも、あんなことができるんや、ということやろな。冷ややかに見ておられた人が多かったと、後から親父に聞いた」

「お前んとこの親父さんは、昔からみんなの面倒をようみてはって、この辺りで信頼されとるからな。裏で支えてくれてはったことは、俺も気づいとった。そんな人が身近におられて良かった。俺らは“先走りするバカ”やったんやが、おかげで、マラソンに出て、最初はトップを走っとったが、5 キロで脱落、6 キロで棄権ちゅうことにはならんで済んだ」

「うまい例えを言うんやな」。河北よ、また、ちょっかいを出すな。

「いろんなテーマで、人が集まることが増えた。高齢農家の耕作支援、集落の空き家をどうするのか、伝統料理の勉強、規格にあわんで捨てられとる農産物の活用、自然エネルギーの利用を含めた生活のあり方の検討会、地域まるごと子育て支援体制づくり、移住してこられる人への支援体制づくり、田んぼ・畑のオーナー制……、テーマのすべてが将来像に直結しとった」

「俺らのイベントを手伝ってくれる人が増えた。ほかの地区でもイベントを考え始め、同じ日にやろうちゅうことになった

「お客さんが分散して共倒れする危惧はもちろんあったんやが、金澤が、もともとはゼロやから、共倒れしてもええ、むしろ、あの町のあちこちでいろんなことやっとると思うてもらう方が重要や言うて、決断したな」

「それぞれの出しもんも調整せぇへん。それぞれで、自分とこの特徴を考えて出してもろたらええとも言うたな」

「俺はムチャやと思うとったが、金澤が押し切った。結果的に、それが良かったな。今は、そこらじゅうで、春・秋の同じ日に開催される大フェスティバルになった。俺らが中心の 8 月のイベントも、協力をいただきながら続けとる。11 月の干し柿づくりも」

### 時間軸と空間軸

我々を指導してくださった、あの先生は、今も、神戸から来てくださっている。

「奈良への遠距離通勤は疲れませんか、なぜ、こちらへ転居なさらないのですか」と、これも一緒に飲んでいて質問した時に、時間軸と空間軸の話をしてくださった。

「地域の方々は、地域の過去から現在までの変化はよくご存知です。これは、時間軸での把握です。しかし、ほかの地域のことをあまりにもご存知ではない。ほかの地域から参考事例を得たり、ほかの地域と比較してみたりすることも必要です。これは、空間軸を据えたものの見方です」

「私がこちらへ住んでしまうと、空間軸をもって比較・評価したり、ほかの地域の情報を持ってくる人がいなくなります。比較・評価すると、キツイことを言わなければならないことがあり、敵と見なされることもよくありますが、それが私がやらなければならない仕事です。みなさんがあたりまえに意識されるようになるまで」

なるほど、我々も、もっと空間軸を意識しなければならないと思った。時間軸と空間軸の話を、若い人たちに伝えていかなければならない。空間軸については、自分は、そうできていなかったが、大阪へ通っている人には、空間軸を意識して欲しい。他地域へ旅行に行く人たち、大阪へ買い物に行く女性たちにも、そんな意識を持ってもらえないかと思う。また、時間軸を意識する中から、過去からの変わらぬ価値をしっかり見据えることもできるであろう。

**地域発展とは**

「先生がおっしゃられていた“地域発展の定義”がようやくわかってきた」

先生は、地域発展とは、従来のような国主導による量的拡大（様々な指標が上向きになる状況）のことではなく、次のような状況が生じていることと定義したい。地域を“持続可能な地域”へと導く重要な要件であるとして、次の 3 点を挙げられた。

1)自然的・社会経済的環境、社会経済の仕組み、対外交流ネットワーク、知識・情報、文化、社会経済基盤施設など次世代に引き継ぎ得る新たな基盤が積み重ね続けられていること

2)産業発展や新事業の創造など内的活力が発現し、豊かさが享受され、地域の人々の自信や誇りが醸成されていること

3)他地域と活発な交流を続け、刺激し合い、新たな価値を創造し合っているといった状況があること

「最初は、何のこっちゃと思うた。全くわからんかった」

「そやな。今はようわかる。コンクリートの三面貼りの川を多自然型の“メダカの学校”に変えたんや。それから、地域の人たちが主体性を持って参加してくれはる仕組みをつくったんや。ほかの地域からあたりまえに来てくれはり、楽しんでくれはる状況をつくったんや。これは、“自然的環境、社会経済の仕組み、対外交流ネットワークなど次世代に引き継ぎ得る新たな基盤が積み重ね続けられていること”になるな」

「みなさんがいろいろやってくれはった。“内的活力が発現”したちゅうことやな」

「今は、地域のみんなが自信を持ってくれてはる。気持ちのうえでも停滞していたんやが、何かやってみて気持ちが豊かになった。地域産品の注目度も高まって経済的な豊かさも見えてきた」

「ほかの地域から、行政や議員、地域活動やっとられる方々が視察に来られた。そんなたいそうなことやってへん、たまたまこうなったんやちゅうのが正直なところで、びっくりしたな」

「ほかの地域の方々が参考にしてくれはって、そこになかったもんを創りだした。その人らとまた出会うて、こっちも刺激を受けた」

かつてのこの地域は農林産物の集散地で、商売の人を多く集めたが、この 50 年ほどで、見る影もなくなってしまっていた。それが、今は、地域発展の要件にあてはるものがたくさんできてきた。

そして、あたりまえのように来てくださる方々が、来てくださるだけではなく、交わってくださる。交わりの中では、誉めてもらたり、感謝されて、元気が増している。

それから、それらと同等の量で、批評や指摘をいただける。批評や指摘をいただけることは、こちらのことを親身になって考えてくださっていることであり、どうすべきかを、智慧をいただきながら考えている。「批評も指摘も、あるいは意見も質問も、考える機会をいただいたということです」と言ってくださった先生に感謝である。

**つながり**

能美がしみじみと言っていた言葉が、本当に重要であったと思える。

「俺らは、“つながり”を大切にしてきた。と言うより、俺らには、それしかなかった。最初のイベントの後で、俺らに残ったんは、たくさんの反省とごくわずかな“つながり”やった。それしかなかったから、結果として、“つながり”を大切にしてきたとも言えるがな。最初に来てくれはった人たちから多くの協力が得られ、多くのヒントもいただいた。その人たちが“つながり”を広げてくれはった。最初に“つながり”しかなかったから、俺らは道を誤らんで済んだ」

「そやな、言うとおりや。これからも“つながり”を大切にせなあかん」

「ところで、最近よう目にする“絆”と“つながり”は、どう違うんや」

「違う気もするし、一緒のような気もする」

「“絆”は、結果とちゃうんか。お互いを思いやった結果としての“絆”、同じ地域に住んで関わりを続けた結果としての“絆”。親子の絆は最初からあるもんやろが……」

「ということは、つながる意思が重要やということやな」
「なんか突然、“絆”が出てきて、何を言いたかったんかわからんが、お互いにつながる意思を持つことが重要やというんは確かやな」
「ついでに、もうひとつ。食べ物に対して“もったいない”という言葉は、どう思う？」
「それも、突然の突然やな。お前は、どう思うとるんや」
「食べ物に対しては“いただきます”や。命を“いただきます”や思うとる。“もったいない”は人間側だけの勝手な話やないか。日本の生活文化として重要な言葉のひとつなんはわかっとるが」
「なるほど、“いただきます”なら、生き物への感謝でもあるな。生き物とつながっとるな。“つながり”が重要やいうことを、回りくどく言うたんやな」
「そうでもない。50 歳すぎてから、言葉の意味を、伝える・伝わる言葉の価値をけっこう考えるようになっとる。“つながり”も、手段がいろいろ出てきて、通信技術にのみ頼っとる若い人らが道を誤らんか心配しとる」
いくら通信技術が発展して、SNS などでの情報交換があたりまえになっても、顔を合わせる“つながり”が基本であると思う。人は人の表情や目線、仕草などから、多くの情報を得ている。記号による情報交換だけでは、信頼関係はつくれない。
通信技術の発展により、状況はいろいろと変わった。外国人観光客を集めているのは、画像通信である。それはそれで良いとして、我々の活動の進展は、来てくださった方々による“口コミ”によるところが大きい。顔を合わせ、“つながり”、信頼し合える関係づくりの重要性を伝えていかなければならない。
もちろん、ホームページなどを通じて、きちんとした情報を提供し続けるつもりでいる。我々の道の駅のホームページへアクセスくださった方に、道の駅の情報だけではなく、地域の情報も十分にお伝えしたい。ある人に、どこかのホームページの例として言われたような、「あこのホームページは、“お越しください”にはなっとらん。“来るんやったら来たらえぇやんか”にしか思われん」。というようにはならないように……。

4 人が中心になってきた 8 月のイベントは続けることとした。昨年の第 9 回イベントが終わってから、こんな話をした。
「道の駅に農産物直売所ができるから、俺らのイベントの 3 本柱のひとつの野菜販売の意味がなくなるんとちゃうか」
「う～ん。つらいところではあるな。そんでも、俺らの野菜販売は、出荷くださっとる方々とお越しくださる方々が、じっくりと話しをしとられるぞ」
「そうや。野菜の特徴を伝え、調理方法もお伝えして、納得して買うてもらえとる。そんな“つながり”を続けていかんならんことはないか」
5 月・10 月の大フェスティバルの際は、我々は、小学校を借りて、3～4 千人の方々に楽しんでいただいているが、8 月のイベントは、第 1 回から公民館とその前の広場で行い続けている。このイベントでは、来てくださる方々との“距離が近い”、“つながる”ことができている。この原点を大切にしていきたい。

**地域には内在しているエネルギーがある**

先日、また 4 人で飲んだ。今度は、河北が地酒を買ってきてくれた。うまい酒であるが、今回は、おみやげ談義にはせず、金澤が口火をきった。
「道の駅づくりを通して、みなさんの発想の連鎖が凄い、活動の広がりが凄いと感じとる」
「出荷者が 120 人・団体にもなるんやな」
「俺らが活動を始める前から、地域には、エネルギーが溜まっとったとも言えるんかもな。俺らがや

り始めて、それを見ておられた方々の内に溜まっとったエネルギーが一気に噴き出した。かつての地場産業の発展も、そんなことやなかったかと思う」と、能美が言う。

「おまえ、たまにはかっこえぇこと言うな」

「何がたまにや」。フォワードとセンターバックの間には、こんなやりとりがよくある。これは、ゴール前へ突進するフォワードに、バックラインを押し上げてサポートすることができなかったセンターバックという構図であろうか。

「こらこら、良い話の時に、また小競り合いするな、じゃれ合うな」

「いや、すまん。そうでなかったら、今の状況を説明できんもんな。内在しとった、溜まっとったエネルギーを解放して、皆さん、生きいきとしてはる」

そういうことだったのだ。どこの地域でも、我々が歩んできたような地域づくりの可能性はあるのだろう。大阪から遠くない我々の地域の立地条件のおかげと思っていた時もあったが、地域の方々が持っておられるエネルギーが凄いことに、改めて思いを致した。このことも、地域の文化として、みんなで共有していく必要がある。

**数字による検証**

「少し、数字による検証もしとこうか。我々は、大フェスティバルと言っとるが、毎回 3 万人と俺らのイベントを合わせて年 61 千人、この町全体の観光入込客数が約 60 万人。つい“この町”と言うてまうな。合併で市になっとるんやが、前からの癖で町と言うてしまうな。みんなも町と言うとるわな。市と言うても、人口 3 万人ちょっとや。観光入込客数は、人口 1 人あたり 20 人にしかなっとらん。淡路島みたいな、1 人あたり 100 人近いところと比べると、まだまだやな」と、銀行員の河北が言う。

「ほんでも、フェスティバルの毎回 3 万人は、せい一杯やぞ。来てくださる一人ひとりに丁寧に対応することを基本としてきて、“つながり”ができ、新しい活動がどんどん広がった。それが重要なんやないか」。能美が食ってかかる。

「そのことは否定せん。最も重要なことやと思うとる。数字を検証しとこうということや」

「道の駅が、おかげさまで、出だし順調や。この 3 ヵ月で 16 万人も来てくださった。年間 50～60 万人にはなると思う。75％がほかの地域の方々や。そうすると、観光入込客数として 40 万人ほど増えて、合計 100 万人。すべては、積み重ねてきた“つながり”がベースになっとると思うとる。フェスティバルへ来てくださった方々が道の駅を駅を知って道の駅へ、道の駅へ来てくださった方がフェスティバルへ、町のあちこちへという流れになってきとる」

「なるほど、相乗効果や。それでも、人口 1 人あたり 33 人や。県平均の 31 人を超えるのは良かったが、県都並みの 42 人という数字が欲しいな」

「うちらの数字は、通り過ぎて行く観光客やないんや。“観光交流”の方々や。2 度と来てくれはることのないビジターやのうて、リピーターであったり、そっからサポーターになってくれはったり、ここにメンバーとして住んでくれはる人や。そんな人が増えていっとることが重要なんとちゃうんか。そんな人らのおかげで、活力が出てきたんや」

「能美が言うことは良うわかる」

「わかっときながら、数字を増やせか」。フォワードとセンターバックが、小競り合いではなく、ちょっと険悪な雰囲気になってきた。石川よ、収めてくれ。

「基本の“つながり”を大切にし続けることやな。今までも、その結果として来てくださる人数が増えるちゅう結果が出てきとる。かと言うて、目標数値がなかったら、それを達成するためにどんな工夫をする、どんな新しいことに取り組むかちゅうことが出てこんこともある。両方とも重要や」。石川は、両方を立てながらうまく収める。

**地域事典づくり**

金澤は、先日から、“地域事典”づくりの企画書を書き始めた。この地域には、すばらしい知識や思いを持つ方々がたくさんいらっしゃる。その方々に書いていただきたい。子どもたちにも、大人ではわからない視線から書いて欲しい。この地域へ何度も来てくださっている方々の寄稿もありがたい。多くの方々に関わっていただき、この地域に関することは何でも収録していきたい。

うんちくのネタになるのか、地域の誇りにつながるのか、次世代へ伝える記録になるのか、まだわからない。多くの方々が関わって、総合的な何かができれば良いと思う。まず 100 項目ができれば、HP で公開しよう、そこから新たな項目を順次追加していこうと思っている。

## エピローグ　ここからがスタート

耳元でコロが吠える声で目が覚めた。俺が朝起きても挨拶に来ない奴が、なぜか今日は起こしに来た。不思議なことがあるものだ。ウグイスの鳴き声が聞こえる。ほかの鳥もやってきたようだ。

しばし、布団の中で、この 10 年間をふり返ってみるのも悪くないと、順を追ってこれまでのことを思いだしていたのだが、いつの間にか眠って夢を見ていたのだろうか。すべては、早春の白昼夢だったのだろうか。

そんなことはない。すべてが事実である。みなさんに協力してもらい、多くの方々の参加を得て、ここまで来た。大フェスティバルは続く、俺たちのオールドスタイルの夏のイベントと晩秋の干し柿づくりも続く。常設の交流拠点としての道の駅ができた。交わり・つながり、それが広がる状況がうれしい。

中学生の頃から、全体が見えるポジションにいる、ゴールキーパーである自分が、冷静に戦況を見つめ判断して指示を出さなければならないと思ってきた。それは、社会に出てもそうであったし、この 10 年間の 4 人の活動の中でもそうであった。今後も続けなければならないと思うが、しかし今、回りのみんなに生かされている自分も感じるようになった。

35 歳前後のある 1 週間ほどの間に、回りのことがよく見えるようになる、回りの人に対する気づかいができるようになるという第 3 次成長は実感したが、今はその時の感覚とは異なる。第 1・2 次成長は身体の変化であるが、第 3 次成長は精神面での成長のことである。今は、第 3 次成長を超えて、生かされている自分を感じ、みんなに感謝している。

一方で、道の駅の出だしがあまりにも順調なだけに、逆に不安を感じてもいる。文句を言ってこられる方が誰もいらっしゃらないからである。文句を言われて、考える機会を得て、あの先生が言われる、「仮説をたて、聞くまわりの人に、繰り返し、検証しつつ、ここからが始まりと思う、仮説を見直す……」という“か・き・く・け・こ”のサイクルを回す機会を、また持ちたい。

地域 P&C 養成塾で教えてくださり、その後もご交誼くださっている、20 年も 30 年も地域づくりを続けてこられた先達の方々が、既に大きな成果を挙げておられるのに、「まだ何も成し遂げてはいない、ここからがスタートや」とおっしゃられている。そうだ。我々も、ここからがスタートだ。

積み重ねてきた平成という時代が終わり、令和という新しい時代へと移った。ここからまた積み重ねていかなければならない。

いつの間にか、4 人とも、町の名士のようになってしまった。道ですれちがう人が会釈してくださったり、“いつもありがとう。ごくろうさん”と声をかけてくださる。こちらが存じ上げない方も多い。ちょっぴり誇らしいが、俺らが主役をはろうなどと思ったことはなかったし、いろいろな会合で強いリーダーシップを発揮したわけでもない。みなさんが地域のことを愛する気持ちをもって力を発揮されたおかげである。むしろ、みなさんにお礼を言いたいのはこちらであると思う。

この地域の子どもたちが、この地域に愛着と誇りを持ってくれたら、他地域の方々が楽しみつつ、“つながり”を続けてくださったら、その“つながり”を俺たちが大切にし続ければ、この地域は、真に、次世代に引き継ぎ得る地域になっていくのであろう。俺たちが 70 歳になる頃までには……。

**参考・引用文献等**

1）一般社団法人地域づくり支援機構・地域 P&C 教科書編集委員会編著『地域プランナー・コーディネータ教科書』OM 環境計画研究所, 2019
2）奈良県立大学村田ゼミ大宇陀研究室『大宇陀の伝統料理改訂版』2011
3）村田武一郎編著『地域の時代を創る－地域発展と「ひと」の役割』OM 環境計画研究所,2007